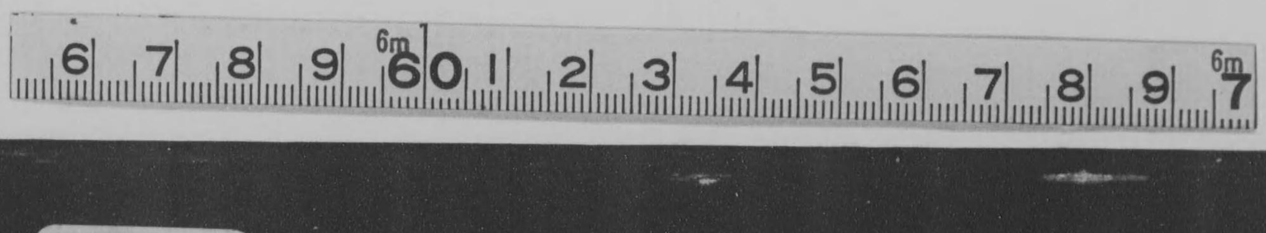

360
321

陸海軍人物史論

安井滄溟 著

東京 博文館藏版

大正
5. 6. 1
内交

序

余は素と、國防問題の研究に半生を捧ぐるの漢子、人物評論の如きは其柄に非ざるなり。而して一箇の國防研究者たる余が、人物評論を以て見る可き本書を作すに至りし事由は、余が國防研究に意を注ぐに至りし因緣と共に、之を此機會に於て明らかにし置くの寧ろ妥當なるを信ず。

回顧すれば二十三年の昔、余が歳十二を以て愛媛縣師範學校附屬小學校高等科三年生たるや、偶々其年十一月三十日の味爽、佛國より回航し來りし帝國軍艦千島が英船ラベンナに衝突せられて興居島沖(松山を西北に去る約三里)に沈

沒せるの變事あり。當時余が家に師範學校生二人を宿す、其一人を久保熊吉氏と爲す。一日久保氏余を其室に延き、千島艦沈沒當時の狀を語ること頗る詳かなり。曰く軍艦千島は佛國に於て建造せし新艦なるも、艦體小に(僅々七百噸なるのみ)且出來榮えも豫期の如くならざりしかば、人皆其能く印度洋、支那海の險濤を凌いで帝國に到達することを得べきや否やを危ぶむ。之を以て艦の佛港マルセエルを出發するに際してや、彼地の紳士、淑女等其埠頭に集まつて送別の意を表するもの無數、皆胸裡に無限の感慨を藏し、我優秀なる艦員の技倆に依つて其無事に帝國に回航することを祈り艦影の見えずなるまで手巾を打ち振りつゝ名殘りを惜めり。既にして千島は埃及なるアレキサンドリヤ港に到着し、此處を根據として地中海の東部、エエヂヤン海方面に數旬の日時を試運轉及び諸種の操練に費やしたる後、愈々蘇士を經、紅海に出で、印度洋を横斷し、支那海を凌破し、以て無事我長崎港に入り、我海軍々人の眞價を全世界に發揚するを得たり。爰に至るまで苦心慘澹回航の任に當れる鏑木艦長(誠)以下の大歡喜と大安心と察す可きなり。然るに豈測らんや、我内海に於て斯る變災に逢遭せんとは。此時に於ける鏑木艦長の胸中を思ふもの、誰か一掬同情の涙無から

ん。聞く鏑木艦長は艦沈没の後寒潮中に漂蕩して英船の舷下に至り、呼んで綱を下さんことを求む。始め佛語を以てす、彼れ解せざるもの〻如し、再度英語を以てす、彼れ漸くにして一本の綱を下す。卽ち之に縋りて上らんとせしも手、痿して意の如くならず、由て更に一本の綱を下さんことを求め、之を結びて身を托し、辛うじて甲板に上るを得たり。而かも彼船員の毫も我艦員を救助するの手段を講ずるの狀無きを見、其救命艇を降して救助に從事せんことを求む。彼れ其十四隻の救命艇中、僅かに二隻を降して之に應じたるのみ。之を以て貴島大尉(才藏)以下艦員の大半は寒潮中に命を殞し、艦乘組の將校中救はるゝを得しもの鏑木艦長の外は唯土山少尉(哲三)一人ありしに止まる。土山少尉は艦のラベンナに衝破せられし時、尙ほ寢室にありしが、警笛に續いて轟然たる物音に蹶起、甲板に至らんとせしも、此時は既に室內に海水侵入し來り、また策の施す可きなく、其儘海中に投じたりと云ふ。

變を聞いて急遽遭難場に驅けつけし堀江分署(温泉郡堀江村)の巡査のラベンナに至りし時、鏑木艦長は火を擁して凍寒せる身を暖めつゝありしが、我巡査の影を見るや唯一語「噫殘念なことをした」とのみ。嗚咽復た言ふ能はざり

しと云ふ。

始め、我軍艦千島の釣島燈臺下附近に於てラベンナの燈光を其前面に認め、漸次相近づくに及んでや、衝觸の危險を慮り、卽ち相圖の警笛を鳴らして之を左に避く。然るに彼れ突として其舵を右轉し、其船首を以て我艦の右舷を衝破す。我艦は爲めに數分時ならずして沈沒せり。而してラベンナは少しく其船首を損じたるのみ。由是觀之、其衝突の過誤及び責任の彼れにあること分明也。然るに近時聞く所に依れば、我れの損害賠償を要求せるに對し、彼れ圖々敷も之を認めざるのみならず、却て反對に我れに對して損害賠償を提起し、延て瀨戸內海を我帝國の領海に非ずと言ふに至る。而して其裁判の結果は神戸に於ては我れの勝訴となりしも、上海なる高等裁判所に於ては我れの敗訴となれり。這は畢竟、治外法權なるものありて外人を被告とする訴訟は其理非を外國法廷に爭はざる可からざる關係上、種々我れに不利なる點あるに由るものなるべしと。語り終つて慨然たり。

余此言を聞き、英人の無情と無禮とを憤るの情に堪えず、卒然として問ふて曰く、既に曲彼れにあり、國際に通ずるの法、何故に之を制裁する能はざるかと。久保氏曰く、何故に

制裁を與へ得ざるとや、好し、汝に之を明らかにす可し。汝起て、而して歩めと。余其言の如くす。久保氏亦不意に立ち突として横さまに余を衝撃す、余卽ち轉倒せり。久保氏曰く、我千島艦事件も亦復斯の如きのみと。爾來今日に至るまで余は此事を心肝に銘記して忘れず、余の國防に意を注ぐ實に之より始まれり。

本書の如き亦余が明治維新以來の我國防上の施設の變遷を研究せるの旁ら、自己の備忘の爲めに筆錄せしものを統合體成したるに外ならず。曩きに之を雜誌「太陽」に連載するや、幸に讀者の歡迎を受け、知友と未見の士と共に其出版を慫慂せらるゝあり。由て多少の改刪と增補とを加へ、以て之を一冊に纏めたり。尙ほ多くの讀者中には特に「日露海戰外史」の愛讀者たりし人士の尠からず、是等の諸人士は別に「日露海戰外史」のみの出版を勸告せられたれども、或事情の爲め之を本書の一部に收めて以て甘心するの外なきに至れり。切に其諒恕を請ふ所なり。

前陳の如く、余は元來一箇の國防研究者にして人物評論家に非ず。余の國防の本論の未だ體成するに及ばずして先づ本書の出版を見るは、余としては衷心慚愧に堪えざる所なり。然れども幸に讀者が此書によりて、假令幾分なりと

も國防に關して更により多く且深く知らんと欲するの知識欲を啓發せらるゝあらば、余が本書出版の素志は酬ゐられたるに庶幾し。

本書の資料は精確と信ず可き記錄、書籍、(主として彼我の戰史)文書の外は悉く之を當時にありて最も其事情に通曉し居らる可しと推定し得らるゝ人々の實歷談に求めたり。此故に假令余自身の觀察、評論乃至言辭に就ては或は誤れるもの、或は不穩當なるもの之れあるべしと雖も、資料其者に至ては恐らく現代に於て最も信憑するに足るべき價値あるものなることを信ず。

本書の陸軍篇に關して余に諸種の資料を供給せられしは主として某中將、某、某二少將、某、某、某三大佐、某中佐、某大尉等なるが、其外に尙ほ余の友人にして騎兵中尉たる則本富三郎君、支那通の先輩たる中野二郎君、曹洞禪の一老僧德川觀光師及余の先輩にして日淸戰役に通譯官として從軍せし香月梅外氏、余の竹馬の友にして大山元帥と半日閑談せしことある津守豐治君、及び仙波將軍の幼時を知悉せる余の亡母(十六年前に死去)等の直話に得たる所あり。又海軍篇に關しては主として某、某二中將、某、某、某、某五少將、某造兵總監、某、某二大佐、某中佐、現藏相武富時敏氏、

岡崎邦輔氏、戸水寛人氏、添田壽一氏及余の先輩にして特別の眷顧を享けたる白岩龍平氏、同夫人艶子氏、竝に友人故西龍太君等より資料を得たり。殊に余の知友櫻井轍三君の斡旋に負ふ所尠からず。深く感謝の意を表する所なり。

大正四年十一月三十日
帝國軍艦千島難遭第二十三周年の紀念日
東京博文館樓上に於て
滄溟生識

凡例

一、本書は雜誌「太陽」大正二年九月號より、大正四年十二月號に至るまでに引續き連載せし余の陸海軍人物評論及び觀察を纏め、之に多少の增訂を加へて集成せるものなり。

一、本書編纂の目的は維新以來の我軍備の變遷を最も適確に、最も有趣味に、且最も平易に記述し、讀者をして一讀直ちに我國防施設の推移と、之を通じて活躍せる人物とに就いて興味ある智識と印象とを得せしめんとするにあり。

一、陸軍篇中の「長閥非長閥」は以て其總論に充つべく、「陸軍省の幹部」「各師團及師團長」「參謀本部の變遷及人物」「教育總監部」は其各論に充つべく、「陸軍新進の人材」は其將來の陸軍史に關係する所多かるべきを豫想して、補遺の意味を以て之に添加したるなり。

一、海軍篇にありては著者は「歴代の海相及其羽翼」に於て我海軍權勢推移の迹を述べ、「各鎭守府及長官」に於て海軍の陸上機關たる鎭守府を通じて帝國海軍に貢獻せし人物を畫き、「日清戰爭と殊勳者」及「日露海戰外史」に於て我海上威力の代表機關たる艦隊

が如何に帝國の國防上に重大なる働きを爲したるかを最も明瞭に描出せんことを努めたり。最後の「海軍新進の人材」は陸軍の夫れと同樣、是等諸人材の帝國海軍の將來に大關係あるべきを思ひ、特に之を附加したるなり。

一、「日露海戰外吏」は陸軍篇、海軍篇を通じて其量最も多く、資料亦最も精選せられたり。著者の期する所は之を以て既出の戰史外に、別に新味と新彩とを加へんとするにありし。而して此企圖が果して那邊まで成功するを得しやは一に讀者の批判に待たんと欲する所なり。著者は此篇を作すに最も苦心し、專ら其資料の蒐集を心懸けてより實に三年の星霜を閲して後、始めて執筆するを得たり。

一、本書の稿成りしは大正四年十一月上旬なるを以て、陸海軍人に就て其現職を記せるものは大正四年十月末日現在なることを了知せられたし。

陸海軍人物史論目次

陸軍篇

第一　陸軍の長閥非長閥……二―一九
長閥對非長閥＝川上操六＝三浦梧樓＝月曜會＝淺田信興、長岡外史、山口勝＝東條英敎と長岡＝寺內と長岡＝山地將軍と長岡
川上操六の參謀本部＝川上の人材本位＝長閥全盛＝參謀次長寺內＝東條、柴、
上原の放逐＝伊地知幸介對田村怡與造＝福島安正と宇都宮太郎＝井口省吾と松
石安治＝井口と兒玉源太郎＝井口と松川敏胤＝眞面目なる國防研究者＝松石
の風格＝松石の用兵＝松石對長閥
田村怡與造と大島健一＝田村の胸秘＝田村の爲人＝田村の體軀＝田村の死
＝大島の人物＝藤井茂太＝大島久直＝立花小一郎＝寺內と久能司
增師問題＝上原と山縣＝上原の意圖＝草生事件＝增師と整理＝岡、田中對
上原＝公桂と木越＝木越の力量＝木越の不明
楠瀨幸彥＝楠瀨の意圖＝就任劈頭の喝破＝楠瀨の自由手腕＝長閥の捲土重來

長閥の配人法――長閥の後繼者――帝國陸軍の基礎

第二　陸軍省の幹部……二〇――三七

陸軍大臣十二人――山縣、大山、西郷――伊豆と兒玉の大山評――一青年實業家の大山評――高島鞆之助――桂太郎――軍制の大改革――師團の創設――第三師團長陸相桂――兒玉源太郎――兒玉の執務振り――宮中に於ける不評――經理事務の改革――山縣と衝突――陸相寺内――寺内の經理事務――軍事參議院――師團長親補――寺内對田村――石本新六――岡市之助――大島健一

軍務局――局長岡澤精――中村雄次郎――陸軍對海軍――木越と宇佐川――寺内の後見役――長岡大臣――寺内の警告――岡市之助――田中義一――柴勝三郎――山田隆一

人事局長――本郷房太郎――山田、河合――菊池愼之助――經理局長――野田豁通――原田良太郎――野田の剛直――野田の遺産――外松孫太郎――辻村楠造――隈德三――石黒忠悳――小池正直――森林太郎

第三　各師團及師團長……三八――九九

師團編制成る――第一の試演場――第五師團――戰將野津――遼陽戰の殊勳者――立見尙文――鳳凰城據守戰――黑溝臺の猛戰――仙波太郎――長閥に忌まる――劃切なる意見書――仙波の風格――立志傳中の人

奥保鞏――第二軍司令官――南山役の決斷――沙河戰時の沈勇――英雄の襟懷――青年將校に對する訓戒――奥對黑木――醇乎たる武將――上田有澤――山田支隊の敗戰――軍政家の適任者か――木越安綱――大谷喜久藏――小原傳

第三師團――對宋慶戰――大迫尙敏と大島久直――日露戰役の第三師團――高島友武

南部辰丙――戰後の第三師團長――仙波太郎の人望――大庭二郎――大庭の專恣――ポーア戰術――狹く深き型

第一師團――山地元治――日清戰時の第一師團――三國干涉當時の山地――山地の人材援引――乃木希典――西寛二郎――大寺安純――日露戰時の第一師團――松村務本――白襷隊――戰後の第一師團

黑木爲楨――明治十年役――第一軍司令官――梅澤道治――梅澤の多藝多能――遼陽戰と黑木軍――戰將黑木――世界の黑木――大久保春野――戰後の第六師團

第二師團――佐久間の人物――佐久間の無學――佐久間と長岡――乃木希典――西寛二郎――日露戰爭と第二師團――松永正敏――岡崎生三――打方止め――遼陽戰後の第二師團

近衛師團――能久親王殿下――當年の近衛師團――參謀明石元二郎――寺内の智囊――明石の性格――鮫島重雄――鮫島の人物閲歷――川村對鮫島――川村景明の力量

長谷川と川村――阪井重季
日露戰爭と近衛師團――不遇なりし長谷川――長谷川の暗誦力――長谷川の淫酒――長谷川の隱藝――長谷川の吝嗇――淺田信興――尉官時代の窮乏――十年役の勇戰――鶏群の一鶴――川上に知らる――淺田の豪傑癖――淺田の宿舍選み――一代の綸巻物――豪傑廢業仕候――戰後の近衛師團――山根武亮――山根の暢氣――秋山好古――平和會議――騎兵科に於ける評判――秋山の人物――鄕黨の誇
第四師團――山澤靜吾――小川又次――大阪師團の名聲發揚――南山役に於ける小川團長――大迫尙道――仁田原重行
有數の實戰家――塚本の廉直――大阪師團の恩人――歷代の第四師
塚本勝嘉――
日清戰後陸軍力の倍加――日露戰後の擴張――第十二師團――井上光――井上の軍備論――歩兵第一聯隊長時代――戰後の第十二師團長――柴五郎――第十一師團――土屋光春――伊地知幸介――川上の心事――伊地知の不評――伊地知の失脚――依田廣太郎――部内の學者――蠣崎富三郎――第九師團――戰後の第九師團長――第七師團――上原勇作――林太一郎――林の用兵――林の氣骨――林の日蓮讃仰――宇都宮太郎
第十師團――川村と安東――安東貞美――戰後の第十師團長――松川敏胤――松川の漢學――松川と大島久直――松川の骨力――松川の不評――山口勝――第八師團――立見尙文――小泉正保――大井成元
第十三師團――戰後の第十三師團長――安東嚴水――第十四師團――山田忠三郎――第十五師團――内山小二郎――終始順境の内山――内山の爲人――由比光衛――由比の人物手腕――第十六師團――長岡の眞價――長岡の利殖――堂々たる青山の邸――第十七、第十八兩師團――第十七師團長――第十八師團長

第四　參謀本部の變遷及人物……100―142

參謀本部――第六局――參謀局――征臺の役、西南の役――鳥尾參謀局長――山縣の戰略――十年役の四殊勳者――鳥尾の陸軍改革運動――鳥尾の爲人――鳥尾の頭腦――桂太郎の建議――參謀本部長山縣――地理調査の必要――東北地方警戒――陸地測量部の觀――參謀本部の組織變更
參謀本部の七變遷――川上操六時代――日清戰役と川上――川上の情報蒐集――川上の對露準備――川上の死に基く損害――川上の支那經畧
川上門下の四天王――大生定孝――福島安正――伊地知幸介――英材田村――田村の禁慄――田村の部下庇護――田村の周到――田村の機敏、强情――中隊は中隊長率ゆべし――嚴格と慈愛――對上、對下――職務に熱して時間を忘る――田村の寺内排斥――田村の參謀本部――東條英敎――陸軍大學出身者の通弊――論客にして健筆――

川上閣下＝東條の議論好き＝東條の敵＝寺內對田村
小川又次＝小川の人物＝高島信茂＝小川の對清經營＝小川の辯＝伊東主一
＝伊東の死と參謀本部の權勢推移
荒尾精＝荒尾時代の士官學校＝靖獻派＝荒尾等の渡清＝犧牲となりし國士
＝浦敬一の伊黎行＝浦の消息不明
日清貿易研究所＝陸奥宗光の補助拒絕＝補助金難＝小山秋作の川上説服＝清
國通商總覽＝日清戰時の獻策＝朝鮮問題と暗中飛躍
花田仲之助＝花田の人物＝田村と衝突＝日露戰時の特別任務＝武人の典型
＝田中義一等のハイカラ論＝田村時代の支那經綸＝小山の對露作戰意見＝支
那の我將校招聘＝支那青年の士官學校入學＝學閥跋扈の端＝田村の勢力扶植
兒玉時代＝兒玉の作戰成績＝松石安治＝天賦の用兵家＝遺憾なる遼陽戰＝
松石の憤慨歸朝＝松石の人格威望
無中心時代、明石時代、田中時代＝山梨半造＝尾野實信＝尾野の材幹＝福田
雅太郎＝武內徹＝田村沖之甫＝田村の三兄弟

第五　教育總監部……一四三—一六四

大村の眼識＝山田顯義＝山縣の大西鄕説得＝鳥尾、曾我＝武田斐三郎＝驕
譯教授法
監軍本部＝歷代の監軍部長＝監軍部長の職務＝陸軍の編制替＝各學校創設
＝監軍部再設
歷代の監軍＝教育總監部創設＝寺內と大谷＝野津道貫＝西、大島、淺田、上
原＝教育總監部參謀長＝各兵監＝淺田時代＝初代の總監寺內＝野津及西
＝大島久直＝淺田信興＝上原勇作
齋藤力三郎＝齋藤の爲人＝大谷喜久藏＝大久保春野＝上田と本鄕＝栗田直
八郎
騎兵科＝佐野延勝＝大藏平三＝大藏の自任＝原田良太郎＝陸軍馬術の三派
＝馬術一定＝原田の爲人
澁谷在明＝歷代の輜重兵監＝秋山好古＝豐邊新作＝豐邊の沈勇＝豐邊の登
龍門＝豐邊の爲人
砲兵科＝大築尙志＝黑田久孝、牧野毅＝黑瀨義門、鹽屋方圀＝柴野義廣＝
伊地知幸介、豐島陽藏＝星野金吾＝佐藤鋼次郎
別役成義＝矢吹秀一＝上原勇作＝落合豐三郎＝近野鳩三

第六　陸軍新進の人材……一六五—一八二

長閥直系の人物＝白井二郎＝河村正彦＝菅野尙一、津野一輔＝中川幸助
長閥傍系の人物＝島川文八郎＝立花小一郎＝井上仁郎＝橋本勝太郎＝河合操＝兒島惣次郎＝宇垣一成＝松浦寛威
薩閥の人物＝與倉喜平＝岩滿仲太郎＝成田正峰＝宇宿行輔、町田經宇＝高山公通、志岐守治＝閥外の人物＝武田三郎＝鑄方德藏＝古海嚴潮＝淨法寺五郎＝有田恕＝西川虎次郎＝木下宇三郎、筑紫熊七＝森邦武、中島正武、鈴木朝資＝蟻川五郎作、首藤多喜馬、白川義則＝內野辰次郎、武藤信義＝寺西秀武＝津野田是重＝佐藤安之助
鈴木莊六、稻垣三郎、吉橋德三郎＝奈良武次、石坂善次郎、小野寺重太郎、阪西利八郎＝松井庫之助、矢野目孫一、星野庄三郎＝佐々木一郎＝廣瀨正德＝東正彦＝吉岡顯作＝溝口、小畑、靜間

海軍篇

第一　歷代の海相及其羽翼……一八三—二三一
海相十人＝勝安芳＝兵部省の請議＝我國所要の海軍力＝勝時代の我海軍力＝海相と學生
川村純義＝扶桑、金剛、比叡＝軍艦清輝の歐航＝海軍將校の歐洲留學＝川村の羽翼＝榎本武揚＝榎本の蹉跌＝氣骨の氣尙未銷
川村の再任＝樺山の入省＝建艦計畫＝國歌君ヶ代の選定
ベルタン招聘＝西鄕時代＝本宿宅命＝新艦建造計畫＝樺山の海軍擴張計畫＝樺山の藩閥擁護演說＝當年の形勢＝富士、八島＝樺山の羽翼＝仁禮及其羽翼＝海軍案否決と大詔煥發＝權兵衛の海軍＝條例改正の功過
權兵衛の統率力＝龍驤事件＝砲術敎練の創始＝艦長時代の權兵衛＝三浦排斥
日淸戰時の我海軍＝樺山の作戰計畫＝西京丸の樺山＝北洋艦隊の全滅＝三國干涉將來の所以＝權兵衛の手腕
日淸戰後の我海軍＝要塞參謀事件＝軍馬徵發條例事件＝海軍側の主張＝戰時大本營條例の改正＝西鄕の勇退
權兵衛時代の我海軍＝次官齋藤＝諸岡賴之＝上村と出羽＝吳製鋼所創設＝
第三期海軍擴張＝山內萬壽治の功績＝戰時艦隊長官の選任
海軍の無經綸時代＝柴山に召電＝財部の勸告＝加藤友三郎＝加藤の人物、材幹＝海相としての加藤＝軍務局長中溝、武富＝海軍の佐賀閥＝財部次官となる＝軍務局長江頭安太郎、栃內曾次郎＝野間口兼雄＝財部彪
八代の本省乘取＝八代の爲人＝墨國殉難の士の英魂を吊ふ＝軍人敎育家の資質

═鈴木貫太郎═向井彌一═秋山眞之

第二　各鎭守府及長官……二三一—二八一

二艦隊一軍港論═大艦隊の建設═最强最鋭艦隊の內容═軍港の意義
一軍港論不可═幕末時代の軍港營區═東海鎭守府═井上良馨の建議═横須賀
軍港の特色═勝と木村═永井と柴田═小栗上野介
長官十三人═井上良馨の爲人═井上の閱歷═三國干涉當時の井上═王妃事變
當時の井上═井上の重望
相浦紀道═坪井航三═日露戰役の長官═上村彥之丞═瓜生外吉═山田、伊
地知、藤井
横須賀造船所の功績═渡邊忻三と上田寅吉═ベルタン及佐双左仲═近藤基樹
═松尾鶴太郎═白井賴吉═平賀讓
横須賀工廠長═松本和═日清戰時の松本═艦長としての松本═工廠長として
の松本═艦政本部長としての松本═阪本一═加藤定吉═軍令部副官時代の加
藤═加藤の爲人═黑井悌次郎═横須賀の眞價
吳、佐世保═兩軍港の戰略的價値
軍港建築委員═佐藤鎭雄═佐藤の勇斷═今に至て恩惠を知る═玉石同焚═
赤松則良═赤松の失敗
吳の十、佐世保の十二長官═中牟田倉之助═極端に公平═有地品之允═有地
の器量═テールス號事件═義勇艦隊の失敗═戶水の憤慨═無德望の人═林
清康═林の心胸
柴山矢八═山內萬壽治═原田宗助═山內案═我造兵界の新時期═吳造兵廠
の進步═筑波、生駒の建造═山田佐久
東鄕平八郎═鮫島員規═坂本俊篤═戰時の港務部長═山下源太郎
山內の吳═村上格一の手腕═最も有能の艦政本部長═村上の廉潔═理想の海
軍次官═吉松茂太郎═伊地知季珍
三笠の引揚═向山愼吉═松島の副長═龍田の回航═吳及佐世保の特色
舞鶴鎭守府═日本海方面の安全═勁敵出現═中溝德太郎═田舍鎭守府═舞
鶴鎭守府の意義
東鄕の畫行燈═海上の將軍═日高壯之丞═日高と權兵衞═片岡七郎═片岡
の爲人═三須宗太郎═八代と阪本═舞鶴の工廠═小軍港
旅順鎭守府═創始時代の職員═沈沒艦船の引揚═引揚法の講究═悲觀說多し
═横山正恭の慨言═上野辰吉の發憤═衆議漸く一致═更に一難關
三浦功の起用═百萬の援兵═三浦着任の夜═三百四十隻の引揚═三浦對阪本

の競爭＝黑井と三すくみ＝三浦の神才＝柴山時代のみ
乃木軍と東郷艦隊＝旅順の戰略的價値＝存置の要あるか

第三　日清戰役と海軍殊勳者……二八二―三一四
海軍の試金石＝戰略の大本＝海軍の眞價發揚
殊勳第一位＝伊東祐亨＝武士道の精華＝樺山對伊東
軍令部と艦隊＝伊集院五郎＝机上の計畫者＝出羽の偉勳＝赤城の報告＝破
顏一笑＝島村速雄
阪元八郎太＝浪速時代の阪元＝赤城艦長時代の阪元＝黃海々戰當日の阪元
比叡の苦戰＝是非疑問＝鹿野勇之進＝各艦長＝河原要一＝內田正敏＝新
井有貫
野村貞＝勇猛なる艦長＝總員死方用意＝沈勇の人＝清正と日蓮評＝淺磨を
呼べ＝十七年變時の野村＝何の爲の軍評定ぞ＝最後の猛氣
松島の大破＝尾本と向山＝戰時の尾本＝勇敢なる水兵
東郷と上村＝上村始めて芽を吹く＝西海艦隊＝八重山の電馳＝平山藤次郎
＝揚陸事務の鞅掌＝海員の薰陶
悲劇威海衞＝水雷艇の實戰試練＝防材破壞、襲擊命令＝六號艇＝上崎辰次郎
の自靈＝戰時の水雷艇員＝二十二號艇＝今井兼昌＝九號艇＝第一艇隊の襲
擊＝餅原の用意＝光彩の頁

第四　日露海戰外史……三一五―四八九
第一段　東郷秋山の遇合……三一五―三三三
對露作戰準備＝海軍擴張案＝戰前の海軍力＝開戰の好機
日高に上京命令＝東郷に召電＝東郷日高に代る＝部內の躍起組＝山本權兵衞
の意圖＝山本、東郷の奉答＝人を得る是れ第一＝田中の苦吟＝千秋の助力
＝人員詮衡の結果＝山屋を採らざりし理由＝新任命
秋山迷路に立つ＝卿の努力に待つ大也＝蛟龍雲雨を得
大學豫備門時代の秋山＝松山出身者の双璧＝偶然の運命＝同期の俊秀＝日清
戰時の秋山＝戰術家、名文家＝鬼ヶ島桃太郎の解釋＝海戰術の大成
秋山の不平＝臨戰準備＝戰爭の發端
第二段　初戰の捷利と日進、春日の回航……三三三―三五三
作戰方略＝聯合艦隊の部署＝消息通間の風說＝岡市之助の豫言＝アレキセエ
フとスタルク＝マカロフの烱眼
瓜生戰隊の行動＝千代田艦長村上＝村上の苦心＝瓜生の憂慮＝森山と谷口

旅順艦隊を奇襲――敵艦隊の配備――戰勢決す
購艦の議――亞國の二裝甲巡洋艦――回航準備――竹内等の分乘歸朝――回航路の選定
故障續出――混雜、混交――露艦、日艦、英艦――最後の決心――二艦のコロンボ着
――新嘉坡にての手違――人夫請負會社の妨害――黃白碁黑烏合の衆――海軍力は不斷の充實を要す――當局の用意、不用意――危險なる投機
第三段　旅順港の閉塞、彼我戰艦の爆沈……三五三―三七五
旅順口閉塞計畫――秋山の建策――反對說優勢――奇襲の奏功不十分――港口閉塞命令――甲州流の兵學
有馬良橘――廣瀨武夫――夙夜たゞ對露策――ネヴア河畔の說經綸――天晴れの戰將――齋藤七五郎――正木と島崎――閉塞不成功
第二次の閉塞計畫――マカロフの着任――決死志願者激增――第二回閉塞、廣瀨の戰死――更に閉塞船の準備――戰術家マカロフ――技術家としての天才――裝甲艦排斥論者――海陸獄呼して迎ふ
小田喜代藏の獻策――機械水雷の沈設――敵驅逐隊の出動――マカロフの驅逐隊出迎――敵旗艦の爆沈――殊勳者小田――深沈寡默の長者――敵艦隊雌伏
第三回閉塞の擧――豫定の計畫と手違――中止命令の不傳達――匝瑳亂次の三河丸――白石葭江の佐倉丸――遠江丸・小樽丸、相摸丸、愛國丸、江戸丸・朝顏丸――林の悔恨、戰死――閉塞隊員過半生きず――ブウブノフの記事――石黑五十二の勳功――間接の効果
アムウル艦長イヲノフの獻策――初瀨八島の爆沈――敵驅逐隊の大擧來襲――殉難士塚本善五郎――塚本の爲人――我海軍の損失――災厄頻出
第四段　旅順艦隊の封鎖、浦鹽艦隊の監視……三七五―三九七
敵艦の逐次損傷――對旅順の持久戰開始――海戰史のレコオド破り――無理困難の作戰――浦鹽の天險と艦隊力の不足
敵艦ボウブルの大連出動――第三師團の苦境――我砲艦々隊の金州灣出動――南山陷落とボウブル歸旅
六月二十三日の敵艦隊出動――遇岩附近に激擊の準備――敵艦隊の港外歸還――高橋守道の殉難
少壯將校の活躍――橫尾敬義の特別水雷發射法――遠藤格、柳沼勇雄の敵驅逐艦擊沈――精彩煥發の第十四艇隊
上村艦隊――片岡艦隊の海峽警備――上村艦隊の浦鹽方面出動――浦鹽艦隊の能力――浦鹽艦隊の北海出動――敵艦隊出でず――敵將イエッセンの器量――ベゾブラアゾフとスクルイドロフ

金州丸の慘劇――イエッセンの計畫變更――常陸丸事件――敵艦隊出動の目的――和泉丸擊沈――佐渡丸、常陸丸遭難――佐渡丸危地を脱す
上村艦隊の行動――倫敦タイムスの批評――海上索敵の困難――嚮ろ大本營の遺算――浦鹽沖に留まらざりし理由――敵艦隊の浦港遁入――イエッセンの太平洋岸出動――上村艦隊の策應――敵將死中に活路を求む――津輕海峽に扼せざりし理由
第五段　黃海及蔚山沖の海戰……三九八―四一八
八月十日と十四日――秋山、佐藤――戰法の差異――兩戰法の特色發揮
敵長官七月中旬の軍事會議――出港論者と豹變――艦隊出動の勅命――敵將ウキトゲフトの爲人――已むことを得ず出動
敵全艦隊の出動――我艦隊の序列――我艦隊の邀擊準備――戰鬪開始――僅々三分間の失機――浮流水雷撒布說
たゞ神明の加護を祈るのみ――天なる哉敵將の戰死――敵艦隊の序列混亂――東鄕長官の命令――驅逐隊、艇隊の夜襲――再び封鎖配備に就く――黃海々戰の成績
我艦隊の損害――殖田謙吉の傷死――レトウキザン艦長――ペレスウエキト艦長――敵將レイツエンシテインの行動
上村艦隊の西航――第六戰隊に會す――海峽に歸還――蔚山沖海戰の序幕――戰端開始――第二戰隊の戰法
リユウリク大破、敵艦隊遁走――第四戰隊の出現、第二戰隊の追擊――第二戰隊の歸還――第二戰隊の損傷――敵艦隊の行動――敵の二艦を逸せし理由
敵艦隊の企圖摧破――一個大規模の海戰
第六段　爾靈山の占領、旅順艦隊の全滅……四一九―四三九
陸方面の戰況――第三軍との協同作戰――陸戰重砲隊の編制――作戰上旅順の意義――陸軍の旅順輕視
依然强襲の方略――攻擊目標を誤る――爾靈山に著目――海軍側の意見――敵將コンドラテンコの防戰――我兵員の大損害――松村の心血、大迫の方略
敵艦擊沈――セワストポウリ襲擊――十二月十四日の大擧襲擊――十二月十五日夜の襲擊――第十四艇隊の功績――東鄕長官の視察――東鄕長官の歸朝――旅順艦隊の全滅
犧牲となりし我艦艇――損傷を受けし我艦艇
乃木將軍の心事、東鄕長官の苦心――乃木將軍の艦隊歸還切望――苦境に同情しつゝ
無理注文――旅順最後の明星
第七段　バ艦隊の來航、三笠艦上の司令官會議……四三九―四五七
聯合艦隊のバ艦隊對策準備――太平洋第二艦隊編制――司令長官ロゼストウエンスキイ――敵艦隊の新嘉坡沖通過

彼地識者間の異論──第二艦隊の實力過信──論客クラド中佐──ロ長官の憤懣──
浦港に蟄進の意圖──蟄進計畫放棄──絶望的北上
我艦隊の動靜──南遣支隊の效果──北海及海峽の警戒
津輕方面に移動命令──藤井の憂慮──各司令官集れ──藤井の提言說明──各司令官概ね北海說
東鄕長官の詰問、藤井の辯駁──島村速雄來る──島村曰く北海移動は尙早也──危機一髮──東鄕長官の雅量
藤井較一──藤井の少時──慈母の力──賢母の激勵──日露戰史の一光彩
敵艦隊結束して來る──大安心、大歡喜──殘存問題は是れのみ
第八段　日本海海戰……四五七─四八九
暗黑裡の敵艦隊──我艦隊の所在──信濃丸の敵艦隊發見
軍艦和泉の殊勳──東鄕長官の第一報告──我艦隊の出動──第三艦隊の行動──出羽戰隊の敵艦隊監視
七段備の戰策──戰術的殊勳者の隨一──接戰勞頭の我艦隊行動──戰鬪開始──逐次回頭運動──意圖深遠雄大──東西海將の心的戰術の合致
效果顯はる──乙字戰法の應用──秋山、佐藤の戰術的色彩──米將フキスクの驚嘆
──追擊戰に入る──第五驅逐隊の襲擊──追擊南下
再度の追擊南下──第四驅逐隊の行動──第一戰隊の北航、第二戰隊の南下
第三、第四戰隊──我艦隊の苦戰──第二戰隊來る──敵の幕僚セメノフの激賞──機宜の行動──米の戰史家フロストの評言
第二戰隊の敵艦追擊──軍艦笠置の避戰──敵旗艦スウヴロフの最期──ロ長官の驅逐艦移乘
第一戰隊の追擊──敵艦隊の序列──竝航戰再開──第二戰隊の參加──第一、第二兩戰隊合す──東鄕長官の命令及報告──敵の本陣覆る
驅逐隊、艇隊の參戰──ネボガトフの嚮導──敵第二戰艦隊の全滅──エンクイストの遁逃──水雷戰史の新記錄
敵の殘存艦隊發見──敵艦隊包圍──軍使差遣──ネボガトフの降服訓示──兩將戰鬪の終局を視す──敵艦捕獲──敵の主力殲滅
殘敵の掃蕩──我艦隊の全勝──捕獲艦の引致
大艦隊の消失──我艦隊の犧牲──戰死參謀松井健吉──敵人員の損害──空前の偉功──永遠に此光榮を享有せしめよ
第五　海軍新進の人材……四九〇─五〇九
海軍新進の双璧──佐藤鐵太郎──世界の三大戰史家──戰將にして用兵家──日蓮

の鑽仰者＝秋山眞之＝多藝多能
竹下勇＝小栗孝三郎＝中野直枝＝岡田啓介
佐藤の級、松村龍雄＝千阪智次郎＝岩村俊武＝小笠原長生＝森、吉島、松岡
秋山の級＝田所廣海＝森山慶三郎＝堀内三郎＝吉田、小山田、川原＝森弘
長一＝齋藤半六＝野村、山岡、河田
財部の級＝向井彌一＝高木七太郎＝丸橋彦三郎＝荒井仲吾＝井出の級＝
井出謙治＝田中耕太郎＝舟越、岡田
加藤の級＝加藤寛治＝平賀德太郎＝佐藤皐藏＝安保清種＝下村延太郎＝
吉田清風＝吉岡範策＝佐野常羽
百武の級、坂本の級＝百武三郎＝谷口尙眞＝飯田久恒＝坂本則俊＝齋藤七
五郎＝竹内重利＝中里重次＝島内、桑島＝古川の級＝古川銳三郎＝廐崎、
金田＝山内、正木、福田＝櫻井の級＝櫻井眞清＝吉川安平
丸山の級＝丸山壽美太郎＝松村菊勇＝松下東次郎＝横尾尙＝筑土の級＝
筑土次郎＝山本英輔＝大角岑生＝飯田延太郎＝大石、白根、井口＝山梨の
級＝野村の級＝堅艦利砲を得るの日

（をはり）

陸海軍人物史論

陸軍篇

安井滄溟著

第一　陸軍の長閥非長閥

長閥對非長閥　川上操六

一

明治年間に於ける我陸軍の主權者が長閥なりしことは否むべからざる事實也。而して此間にありて長閥が非長閥に對して受身に立ちしことあるは、たゞ僅かに川上操六が參謀本部に龍鱗せし晩年の數年間のみ。

而かも長閥は決して僥倖のみによりて斯る權勢を扶植し得たるに非ず。長閥が我陸軍の實權を握るに至りしは、其力量に於て他に優れしものが努力精進せし結果に外ならず。故に吾人は長閥が其權勢を得し後の專横に對しては毫も之を寛假すべき理由あるを見ざれども、其權勢を得るまでに奮鬪努力せし長閥先輩の活動振りに至つては寧ろ大に之を尊敬するの念を禁ずる能はず。

殊に吾人の趣味を感ずるは、我陸軍に藩閥的の弊を醸成せしの兆候現はるゝや、之を打破すべく最も猛烈なる運動を試みし急先鋒が長閥の一人たる三浦梧樓なりしこと是れ也。

三浦梧樓　月曜會　溝田信興　長岡外史　山口勝　東條英教と長岡

三浦は明治二十年の頃、曾我祐準等と月曜會なるものを起し、少壯にして辯力に富む將校を羅織して盛んに閥族打破的の陸軍改革論を唱へ、縱横無盡に陸軍部内を攪亂したるが、此運動は長閥の本尊たる山縣の深く忌む所となりて、月曜會は遂に解散を命ぜらるゝの厄に遭ひ、三浦、曾我等の頭目は陸軍を逐はれ、其下に花形役者として活動せし溝田信興、長岡外史、山口勝等は皆地方に左遷せられたり。

明治の大久保彦左とも云ふべき三浦が、身長人にして我陸軍のために、長閥に對して反旗を翻へせしは左もあるべきことゝ首肯せらるゝも、山縣子飼の長岡が三浦の幕下に馳せ參じて盛んに活躍せしは、今日よりして之を觀れば、頗る意外の感なき能はず。

然れども當時にありては何人も之を怪しむものなきのみならず、却て渠が長人にてありながら、長閥を敵として奮鬪するの意氣を壯なりとして閥外有爲の士の間に重んぜられ、殊に東條英教の如きは渠を以て骨鯁得易からざるの人物なりとし、交情最も敦く、提撕最も努めたり、數理に暗く戰術を解せざる渠が、假令最劣等の成績なりしとは言へ、兎も角も陸軍大學校を卒業せしは、職として東條の援助ありしが爲めなりと稱せらる。

寺内と長岡

然るに長岡の心事の陋劣なる東條が川上操六の歿後尚ほ依然として川上閣下の意志云々を口にして長閥者流に相下らざるや、極力山縣に勸說して遂に之を參謀本部より放逐せり。由來渠の人物たるや、才氣の見るべきあると、辯力の常人に比して優れるあるのみ。何等推重すべき手腕力量を有するに非ず、而かも尚ほ今日の地位を贏ち得たるものは一に山縣の子飼なるに由る。

渠は斯く山縣の寵兒なれども、寺内とは殆ど犬猿啻ならざるの間柄にあり、是れ恐らくは兩者性格の相違より來る必然の結果ならん。渠の頭腦の粗大にして徒らに大風呂敷を擴げるは厲克にして精緻なる寺内の到底忍容する能はざる所也。此故に山縣百年の後は、假令他日再び長閥の全盛時代來ることあるも、渠の志を得るの日あらんことは殆ど豫期し難し。蓋し長閥の利け者中最も希望に乏しき將來を有するものは渠なるべし。

而かも人事は往々にして測るべからず、寺内と相容れざるの長岡は、或は他に之に代るべき支柱を見出すやも亦未だ知るべからず、現に渠は陸軍大學校時代には東條に援けられ、次で月曜會事件に坐して仙臺師團の中隊長に左遷せらるゝや幾許もなく山地將軍に拾はれて第一師團の參謀となり、爾後今日まで概して順境にありしを見れば、今後と雖も何人かの後援を得て相當の地歩を占むること莫しと言ふべからず。ただ其可能性乏しきのみ。

川上操六の參謀本部

川上の人材本位

二

山縣が築き上げたる長閥の陸軍に對して別に一旗幟を立て、殆と之を制壓するの概ありしものを川上操六と爲す。渠が明治二十二年三月參謀本部次長に任じ、明治三十二年五月參謀總長の職を以て薨去せしまで滿十ヶ年間に於ける我陸軍は或意味に於て川上の陸軍とも稱すべかりき。從つて夫の明治二十七八年の戰役の如きは恰かも渠と李鴻章との戰爭なるかの如き觀ありき。而して渠が此戰爭に對する準備の如何に周密にして且的確なりしかは多少の軍事眼を有するもの、等しく認識する所なり。

川上は此戰役の成功によりて益々陸軍部内に對する威信を高め、往々にして外交をすら指導せんとするの權勢を有せしを以て流石の山縣も渠に對しては一指を加ふるを得ず、纔かに柱をして陸軍省に據らしめ、寺内をして教育總監部に巢はしむるを以て滿足せり。

由來川上は人材を眼識し且つ之を驅使するに於て特に傑出せるの技能を有したり。從つて此時代に於ける陸軍部内の俊秀は概ね渠に拔擢せられて參謀本部に集まり、當時の參謀

長閥全盛

本部は人材の淵叢を以て目せられ、長閥は殆ど之に對して顏色なきの狀態にありき。而して渠は長閥に對抗する關係上自然長州人以外の者を多く擢用したれども、渠の眼中には殆ど藩閥なく、苟くも高材逸足の士ならば之を適處に置きて其能を盡さしめんことを期したり。故に必ずしも長州人を毛嫌ひせず、現に渠の歿後、渠の殘黨征伐に維れ日も足らざりし寺內の如きも亦渠の拔擢を蒙りて其手腕を發揮するを得し一人なり。

參謀次長寺內

川上の歿年より明治の末年に至るまで約十三年間は、陸軍部內に於ける長閥全盛の時代なりとす。而して長閥決して人材に乏しきに非ざるも唯閥なるが故に、閥を擁護せんが爲めには自から閥外のものを排斥し、俊秀用ふべきの士にして往々槽櫪の間に雌伏する者あるに至る。從つて此時代にありては到底川上時代に於けるが如く上、下を信じて其能を盡さしめ下、上を敬して赤心を披瀝するの美風を存續すること能はず故に物質的には陸軍の輪廓を擴大し得たるも、其內容の價値に至つては到底川上時代に及ばざるものあり。

長閥は川上の歿後、川上の系統に於て其地位を繼ぐの聲望と力量とを兼備するものなきを奇貨とし、先づ寺內をして參謀本部に次長たらしめ、以て其權力を自派の手に收めんと企畫せり。玆に於いてか寺內と川上の殘黨との間に激烈なる暗鬪を生じ、寺內は一時頗る窘窮したるも、山縣の勢力を假りて漸く一端の效を收め、最も頑强に渠に反抗したる東條英敎等を放逐するを得たり。而して柴五郎、上原勇作等又相次で渠の追ふ所となる。

東條、柴、上原の放逐

伊地知幸介は一時參謀本部內に於て田村怡與造と拮抗するの勢力を有せしも、田村が寺內に次で參謀本部次長となるや野戰砲兵監として部外に出でたり。玆に於てか川上時代の各部長中無事に殘存せしはたゞ一の福島安正あるのみ。而して當時少佐たりし宇都宮太郎は頗る寺內の忌む所となりしも、福島の智囊たりし關係上、福島の庇護に依て纔かに免るゝを得、日露戰爭前後一時英國に駐在せし外、常に參謀本部を出づることなくして第七師團長たるの時に及べり。

伊地知幸介　對田村怡與造　福島安正と宇都宮太郎

斯くの如く長閥全盛時代にありては、閥外骨鯁の士は多く其排斥する所となりしが、此間にありて常に能く重要の地步を占め、毫も之に屈せざりし英材を井口省吾及び松石安治となす。井口は少壯時より藩閥の專橫を憤慨せし一人にして、明治二十年の頃獨逸留學中、山縣が歐洲視察の途、獨逸を過るや、之を迎へて大に藩閥の弊を論じ爲めに其激怒を買ひしことあり。而も渠は遂に之に屈せざりき。又寺內の參謀本部次長にして一時陸軍大學校長を兼ねし當時渠は大學校幹事たりしが其干涉の煩に堪へずして、陸軍大臣兒玉源太郎の

井上省吾と松石安治

井口と兒玉源太郎

下に軍事課長となり、頗る重用せられしが、明治三十五年四月兒玉の陸軍大臣を辭して寺内之に代るや渠は寺内の羈絆を脱せんが爲め、田村の後を襲ひて參謀本部總務部長となり以て日露戰爭に及べり。

井口と松川敏胤

日露戰爭に於ては井口は松川敏胤と共に兒玉の兩翼として殊勳を奏し戰後、再び陸軍大學校に逆戻りして高邁の人格と卓絕の手腕とよく青年將校を指導したりき。殊に渠の面目を最も能く發揮せるは渠が陸軍大學校長の任に就くや、先づ長閥關係の教官を追ひ、爾後勉めて長閥者流を其教官に任用せざりしこと是れ也。是れ渠が長閥の教官が一種の間諜たる行爲を敢てするを惡みたるに由る。而して流石の寺内も渠の排長閥的態度を如何とも

眞面目なる國防研究者

する能はざりき。渠が長閥の極盛時にありて敢然之と拮抗し一歩も相讓らざりしの一事、以て渠の風采を想見するに足る。

井口は又松石と共に最も眞面目に國防を研究せる一人なりと稱せらる。今や朝鮮駐屯軍司令官として龍山にありと雖も、是れ恐くは適材を適處に置くものに非ず、渠の如きは當然參謀本部若くは陸軍省に於て重要なる椅子を占むべき一人なるべし。渠近時やゝ健康に異狀あるが如し。好漢、幸ひに加餐自愛せよ。

松石の風格

我陸軍部内にありて眞に國防の意義を解せるものゝ隨一は松石安治也。渠人格清雋、才識卓犖、實に當代得易からざるの人物也。而して其兵家としての手腕力量に至つても亦松川と相並んで我陸軍の双璧たり。渠明治三十七八年の役、黑木軍の參謀副長として軍に從ひ、遼陽の會戰、我軍敵の左側背を迂回するの作戰效を奏して、敵軍總退却を始むるや、猛然奮進して之を追擊すべきを主張せしも、我兵力敵に比して寡少なりしが故に參謀長藤井の容るゝ所とならず、遂に敵を逸せしを以て千載の遺憾とし慷慨措かざりしと云ふ。

松石の用兵

松石の用兵は我に多少不利の點あるも、機先を制して斷然攻勢に出づるに於ては敵は我不利に乘ずる能はずして、我利のみ發展すべければ、宜しく我不利の點を顧慮することなく有利の點を把持して働き掛くべしと云ふにあるが如し。海軍の兵家佐藤鐵太郎の用兵の箴言に七害三利なる語あり。蓋し此場合には、須らく我より働きかくべしと云ふ意義也。

松石對長閥

松石の用兵は夫れ七害三利主義なるか。

松石は眼中に長閥なく、往々衆人稠座の席に於て、山縣に對してすら無遠慮なる批判を加ふることあるを以て、頗る其忌み憚る所となる。此故に前年滿洲に於て毒瓦斯に當り、耳目の聰明を失ひ、生命殆ど危篤に瀕するや、沙上の偶語あり曰く、松石の病因は毒瓦斯

に非ずして毒酒也。現に渠の病は一旦回復し、上海に於て强烈なる酒を飲みて後再發せしに非ずや。而して赤十字病院に於ては渠に何等服藥せしむるなくしてたゞ日に一合の牛乳を給與するのみなるに非ずやと。

是れ勿論單に風說たるに止まると雖も、亦以て渠の長閥に對する態度の如何に强硬なりしかを推知するに足る。而して渠は纔かに生命を維持し得て數年を保ちしも、本年其館を捐つるまで遂に一箇の廢物を以て了れり。これ帝國陸軍のため殊に痛惜すべしと爲す。

三

田村怡與造と大島健一

田村の胸秘

身長閥外に生れて而かも山縣の信任を得るこく敦く、殆ど閥內の人と異らざるものに、先きに田村怡與造あり、後に大島健一あり。

思ふに田村は必ずしも長閥の謳歌者に非ずして、自己の目的を達する方便上山縣を利用せしに過ぎざらん。渠や決して長閥に降るが如き無腸漢に非ず。而かも渠は時に英雄人を欺くの權略を弄することあり。殊に勢を見るに敏なれば、大勢に逆行するの愚を爲さずして、順潮に棹さして、進まんことを心掛けしものなるべし。

田村の爲人

渠傲岸にして容易に人に下らず、時に傍若無人の行爲を敢てするとあり。現に渠は明治二十七八年の役、第一軍の參謀副長として山縣に從ひ征途に上りしが、參謀長小川又次と事毎に意見衝突せしを以て、山縣が中途病みて歸るに當り、渠を拉し來りしが、船宇品に着くと同時に忽然姿を匿し、私かに京都に赴きて優悠自適を極め居りしと云ふ。

田村の體軀

渠は又體軀肥滿せしを以て夏日の如きは殊に暑氣を感ずること甚だしかりしと見え、往々にして軍服の胸を開放したる儘、大臣大將の列席せる式場に列なるが如きことありき。又以て其如何に豪放にして小節に拘はらざりしかを推知すべき也。

田村の死

田村は恰かも滿洲問題の噴しく、日露間の風雲やゝ急ならんとするの際に病歿せしを以て十分に其大手腕を發揮するに至らざりしと雖も、渠の天分の高く才能の穎脫せるは川上以後の第一人なりき。故に流石に多士濟々たる參謀本部も渠の歿後其後任者を得るに苦しみ、遂に兒玉源太郎が內務大臣を辭し、臺灣總督を兼ねて其後を繼ぐに至る。而して兒玉が遂に此ために自から滿洲軍の中樞となり其精力を注ぎ盡し、腦漿を絞り盡して戰後幾許もなく溘亡せしことに想到すれば、田村が戰前に病歿せしはたゞに田村一人の爲に痛惜すべきのみならず、又實に兒玉の爲に痛惜すべき一大恨事なりし也。

大島の人物

藤井茂太

大島久直

立花小一郎

或曰大島は田村と同じく山縣の信任を得ること敦しと雖も、其人物は特に言ふに足るものの無く、單に獨逸語並に佛蘭西語に堪能なるを以て其長處に數ふべきのみと。而かも渠が陸軍部内の怪物として那邊にか非凡の力量を有するは到底否むべきに非ざる也。此點に於て渠は往年の田村と能く拮抗するに堪ゆべし。

一意長閥の意を仰合せしの陋劣漢として部内の指彈を受けしものに豫備中將藤井茂太あり。渠の長閥の意を迎ふるに急なる、寺内の祕書官たる一中佐にすら自から先づ擧手の禮を施して恬然たり。殊に日露戰役中寺内の男壽一が隊附を以て戰線に立つを危險なりとし、三たび寺内に電請して之を司令部附たらしめんとせしが如きは最もよく渠の性格を暴露せしものたり。

大島久直亦日清、日露の兩戰役に驍名を馳せたる老將軍なれども、其心術は藤井に近く、夫の河野廣中の奉答文事件の時の如き長閥の意を迎へんがため故らに直ちに議會を解散して憲法を中止せよと寺内宛に電請し來りしと云ふ。

立花小一郎は一英物にして、往々長閥に對し辛辣の言を弄することあるも、能く寺内の性格を呑み込み居るを以て、其信賴を得、明石元二郎と共に朝鮮に於ける寺内の股肱たり。

寺内と久能司

寺内は器局大ならざれども、必ずしも諂諛を好まず、往々直言を愛す。（但し自己の意に適する直言に限る）豫備中將久能司、曾て中央幼年學校長たりし時、寺内を訪ひ、其室内の書類亂秩せるを見て其不整頓を詰責せるに、却て大に寺内に喜ばれ、爾來信任薄からざりしと云ふ、立花の對寺内態度亦畢竟するに此模型を出でず。

要するに長閥長老の專恣は必ずしも悉く皆自己の意に出づるに非ずして、往々是等準長閥者流に誤まらるゝことあるを思はざるべからず。

四

增師問題

上原と山縣

增師問題に基く大正劈頭の政變以來、長閥は鼎の輕重を問はれたるが如し、始め上原の西園寺より陸相奏薦の内談を受くるや、上原は長閥を憚りて卽座の返答を與へず、山縣、桂、寺内三人の内意を承け、其推薦による形式を以て其任に就けり。

上原を推薦せる山縣等の意志を忖度するに蓋し陸軍部内に於ける長閥の根柢や既に深きものあれば僅かに一上原の力を以て如何とも爲し得るものに非ず。而して世間は漸く長閥の專横を慣慨するらしければ、此際の良策は寧ろ上原をして局面に立たしめ、己れ背後に

上原の意圖

ありて之が實權を掌握するにありと爲せしもの、如し。

而して上原が山縣等の推薦の下に陸相の任に就きし所以のものは、恐らく假令西園寺内閣倒るゝも、自己は其儘に居据り、徐々に目立たざる範圍内に於て長閥征伐を試み、滿腔の經綸を布かんとの下心ありしが爲めならん。渠が川上殘黨の一人たる齋藤力三郎を田舍の旅團長より東京に招致せしが如きは、明かに渠の人事に關する腹案の一端を暴露せるものと云ふべし。

草生事件

渠亦人事局長山田忠三郎が中將に昇進して宇都宮の師團長に補せらるゝや、其後任を物色して時の補任課長草生政恒を得たり。然るに田中義一、岡市之助の如きは閥外の草生を

增師と整理

して人事局長の椅子を占めしむるを心外なりとし、大々的反對運動を試み、田中と同級にして且準長閥たる河合操を以て之に代へ、草生を德島の旅團長に追へり、茲に於てか草生は憤然病と稱して任地に赴かず、遂に豫備を命ぜらるゝに至れり。

上述の草生事件は上原が長閥の勢力に壓せられて事を爲す能はざりし一例なるが、更に上原の苦衷を諒とすべき他の事件あり。陸軍整理問題是也。渠謂へらく增師は既定の計畫にして且陸軍の輿論なり。而して軍政整理は國民の聲也。增師を要求せんとせば順序として先づ整理を斷行せざる可からずと。

岡、田中對上原

然るに岡、田中の輩は渠の命を奉ぜざるを以て、渠は已むことを得ず、經理局長及び各課長を集め鋭意調査して漸く二百九十五萬圓の整理額を捻出す。而して寺内は渠の行爲を喜ばず、人に向つて之を批難するの語氣を漏らせしと云ふ。

公桂と木越

斯くして上原は一方整理を强行（假令其金額は少なかりしにせよ）して長閥の機嫌を損し、他方には增師を强要して輿論の排擊を買ひ遂に進退に窮して陸相の椅子を擲つの已むべからざるに至れり。而して西園寺内閣も亦渠の後任者を得る能はずして倒れたり。

公桂が非常の自信を以て時局收拾の任に當るや、閥外者乍ら第三師團長在職當時より特別の關係ある木越安綱を陸相に奏薦せるが桂内閣は幾許もなくして斃れ、山本内閣之に代りし際、木越は特別の思召を以て留任仰付られ、第一次の陸軍整理と、陸軍大臣官制改革問題は渠の手に依て解決せられたり。

木越の力量

人往々木越を稱して無能となすも吾人は之を信ぜず、何となれば、渠は兎も角も上述の二大事業を斷行したればなり、殊に渠が陸軍大臣官制改革問題に就て、部内の反對論を制壓するに、余は軍人なると同時に國務大臣也、國務大臣には自から國務大臣の考へありの

木越の不明

言を以てし、參謀總長長谷川の異議に對しては却て長谷川が先きに同意し乍ら――少くも反對の意志を有せざることを表明し乍ら――後に至つて表裏反覆せし不信を責めて一歩も譲らざりしが如きは、必ずしも渠の骨力の柔軟ならざるを證するに足る。

而も木越は到底明敏なりと云ふこと能はず、木越にして若し明敏なりしならば恐らく山本内閣に留任せざりしならん。而して自から内閣と陸軍との間に板挟みとなるが如き窮境に陷ることを避けたるならん。併し乍ら木越としては果して明敏にして早く身を退きし方が得策なりしや、將た曲りなりにも整理の實を擧け、官制改革を斷行せしことの事蹟を史上に留めし方が得策なりしやは疑問なりと謂ふべし。吾人は必ずしも渠の明敏ならざりしを惜まず。

楠瀬幸彦

五

木越に次で陸相たりし楠瀬幸彦の軍政的手腕は今尚ほxなれども、渠の人物の傑出せることは疑ふべくもあらず、殊に渠に採るべきは斷行力に富むにあり。所謂王妃事件の如きは、渠が露西亞の爲すなきを看破して我國威を大に朝鮮に布かんと畫策せし運動の餘波なりしと傳へらる。

楠瀬の意圖

渠は骨鯁なる點に於て殆ど部内の何人にも譲らず、爲めに長閥の忌む所となりて未だ曾て大に其抱負を伸ばすの位置を與へられしことあらず。故に其山本内閣に陸相たるや、渠は長閥の權勢を根拔すべく畢生の努力を致せり。而かも天時非にして、海軍瀆職問題に連帶する内閣の總辭職となり、渠の抱負は漸く其一端を顯現し得たるに過ぎずして早くも既に其椅子を去らざる可からざりき。若し楠瀬に貸すに、今二三年の日月を以てせば、恐くは閥關係に因する部内の弊竇の大半を一掃するを得しならん。渠が早く陸相の椅子を去りしは天の脊龍未だ長閥を棄てざる也。

就任劈頭の喝破

楠瀬の自由手腕

聞く渠は陸相就任劈頭の挨拶に於て喝破して曰く、不肖大命を拜して乏しきを陸軍大臣に享く、將に諸君と共に大に盡す所あらん。但し余には余の抱負あり、苟くも之が實施を妨害するものを省内に在らしめては甚だ迷惑なるに就き、さる考へを有せらるゝ方々は遠慮なく申出でらるべし。諸君の意の儘に轉職乃至退職の手續を踐まんとす。衆皆震駭し、省内の空氣一時に楠瀬化せる概ありしと云ふ。

加ふるに當時の楠瀬は之を上原、木越に比して頗る自由手腕を揮ひ得るの境遇にありき

長閥の癈土重來

長閥の後繼者

蓋上原は曾に山縣等の承認を經て就任せしのみならず、事毎に成を朝鮮なる寺内に仰ぐの必要ありしが、木越に至つては最早寺内に相談することなくして事を決し、楠瀬に至つては全然長閥の意向を伺ふことなくして就任せしだけ、何等之より制肘を受くるの憂ひあることなく、又從來長閥の專横に平かならざりし部内は大に渠を歡迎し、諸般の改革の斷行を期待しつゝありしかば、渠は此機運に乘じて思ふ儘に其抱負を伸ばし得べかりし也。而して楠瀬をして斯かる形勝の地歩を占め得るに至らしめし所以のものは要するに輿論の力なりき。而して楠瀬の失脚の因を爲せし海軍瀆職問題に伴ふ山本内閣の倒壞も亦輿論の力なりき。噫、輿論乎輿論乎、何ぞ昨非今是の感あるの甚しき。

而も楠瀬全盛當時にありても手腕あり力量ある後繼者に富みたる長閥は、假令暫く雌伏するも、隱忍自重して捲土重來の機を窺ふ可きは略ぼ世人の想像し得る所なりき。果せる哉大隈内閣の成立と共に陸軍部内の長閥は再興せり。長閥の勢力が常に一大團を爲せるに對して反長閥の烏合の衆なるは其最大弱點なり。斯くの如くにして已まずんば、假令今後幾許の時日を經過するも我陸軍の權勢は到底長閥の手を離脱することなかるべき也。

由來長閥は人を配置するに巧妙に、單に各部の要所々々を自派の者を以て占領するを以て滿足す。此故に長閥全盛時代と雖も外形上特に長閥跋扈の甚だしき形跡なかりき。而して此筆法は殊に寺内の苦心して之を奉ぜし所にして、現陸相岡市之助の如き亦實に其衣鉢を傳ふるものなり。

帝國陸軍の基礎

而して現陸相岡と云ひ、現參謀次長田中義一と云ひ、現第八師團長大井成元と云ひ、現軍務局長山田隆一と云ひ、現朝鮮總督府附武官白井二郎と云ひ、現第三師團長大庭二郎と云ひ、所謂長閥の寵兒は概して其手腕力量の超凡なるを見る。

而かも我陸軍をして萬代に其權威を維持せしめんがためには更に人材登用の途を擴大せざるべからず。曾て川上操六が參謀本部に人材を擢用するや、能く適材を適處に配置し毫も閥關係に拘泥することなかりき。若し寺内及び渠の後繼者にして我陸軍を朋黨の關係より超脱せしめ、眞乎、陸軍の陸軍たらしむるの誠意を有せば、宜しく閥を超絶し、黨を無視すべし、而してただ人材主義の實行を期すべし。若し然る能はずして依然從前の如き態度を繼續するに於ては、或は恐る、他日憂ふべき現象を呈し、我陸軍の名譽に關する不祥事件の出來することあるべきを、切に邦家の爲め、其猛省を望む所也。

第二　陸軍省の幹部

一

陸軍大臣十二人

明治十八年内閣官制々定以來今日に至るまで、我陸軍省に大臣たりしもの十二人、曰く大山巌、高島鞆之助、西郷從道、山縣有朋、桂太郎、兒玉源太郎、寺内正毅、石本新六、上原勇作、木越安綱、楠瀬幸彦、岡市之助是れ也。

山縣、大山、西郷

山縣の閲歴人物は世既に定論あれば特に評するを須ゐず、大山は茫漠の中に識量を有し西郷は更に大山に比して一頭地を抜く。而して西郷の威望は海軍部内に普遍的に徹底せるも、大山の偉材は渠に親近せる少數人士の外は陸軍部内の者と雖も、殆ど知る所非ず。

伊豆と兒玉の大山評

聞説らく伊豆凡夫は副官として長く渠に隨從し、渠の茫漠は内に眞智を包めるの茫漠にして、其不得要領は、凡ての事を知り盡せる上の不得要領なることを知り得たりとて感嘆措かざりしといふ。兒玉源太郎亦滿洲軍總參謀長として、渠の帷幄を統率せるが、戰後談當

一青年實業家の大山評

時の滿洲軍に及ぶ毎に總司令官に渠ありしが爲めに如何なる難局に立つも其頭腦の平靜を保ち、作戰の能力を發揮し得たることを力説せりと云ふ。

曾て一青年實業家あり、偶〻列車を同じうして渠と半日會談し、後其感想を語りて曰く余が大山公と會談中、公に就て感ぜし所を直言すれば、公は毫も將軍らしからず又政治家らしからず、實に一個超邁の世間智と、春風の如き溫情とを有せる實業界の耆老の如かりしと、又以て渠の心胸の深奥なること尋常一樣に非ざることを推知すべき也。

高島鞆之助

高島鞆之助は軍人と云ふよりも寧ろ覇氣滿々たる一種の政治家と見るべく、渠の第四師團長時代は、其師團司令部は恰かも民間政治家の倶樂部たるかの如き觀ありて、軍紀の頽廢せること當時の師團中、他に類を見ざりしと云ふ。而して渠は松方内閣に再度陸相の椅子を占めしも、軍政上特に渠の經綸として認むべき何等の痕跡を留めざりき。

桂太郎

眞に陸相の椅子に就きて陸相の事を行ひしものは實に桂太郎を以て筆頭と爲す。桂は常に薩の川上と對立して進み、川上が參謀本部次長として參謀本部の實權を握れる時は、渠が陸軍次官兼軍務局長として陸軍省の實權を握れるの時にして、川上が參謀總長の椅子を占めし時は、渠は既に陸相の椅子を占め居たりき。

軍制の大改革

桂の次官兼軍務局長時代は我陸軍の整頓期とも云ふべく、渠は此時期に於て縦横に其手腕を揮ひ以て陸相大山を助けて軍制の大改革を決行し、我陸軍制度をして、今日あらしむるの基礎を建設せり。而して是れ或意味に於て川上が再度の洋行の盧に乗じたる鬼の留守の洗濯なりき。

師團の創設

當時桂によつて決行せられたる軍制改革の重なるものは、鎮臺を改めて師團となし、師團司令部を設けて師團編制を完成し、監軍部を設けて軍隊の教育を統監せしめ、士官候補生制度を採用して將校養成の途を開き、陸軍經理の制度を定めて其會計事務を整頓したる等、孰れも重大の意義を有せざるは非ざりき。而して渠は此大事を頗る手際よく解決せるを以て渠が他日陸軍大臣たるの地歩は彌々此時に築き上げられたる也。

第三師團長桂

然るに明治二十四年五月山縣内閣倒れて、松方内閣之に代はり高島鞆之助の陸軍大臣たるや、渠は其下に次官たるを屑とせずして出で、第三師團長となり、以て日清戰後に及べり。

第三師團長としての桂は寧ろ失敗なりき。其名古屋にあるや其司令部の事務を擧げて之を參謀長木越安綱に委し、自己はたゞ紅燈綠酒裡に沒頭せるのみ。而して廿七八年戰役に於ても亦渠は用兵家として何等手腕を發揮せることなく、其海城の風雪裡にありて宋慶の兵に包圍せらるゝや、狼狽の極、急遽援兵を第一軍司令官、野津道貫を乞ひて得ず、遂に哀を大本營に請ひて一時の物笑ひとなるに了りき。而かも兎も角も大なる失態を外部に暴露せしめざりしは一に參謀長木越の力也。渠の終始木越を援きし、また所以ある哉。

二

陸相桂

兒玉源太郎

桂は明治三十一年第三次伊藤内閣の成立するや、豫定の如く入りて陸相となり憲政黨内閣、第二次山縣内閣に歷任して日清戰後の經營に鞅掌したるも、此際に於ける渠の手腕は軍政家としてよりも寧ろ政黨操縦に向つて發揮せられたりと見るべく、陸軍の關係に於ては特に言ふべきものある莫し。

兒玉源太郎は明治二十五年八月より同三十一年一月まで約五年半間陸軍次官兼軍務局長として省内の樞機を統督し、廿七八年戰役に際しては能く後方勤務に力めて其事務的手腕を發揮したるが、三十三年十二月桂が陸相の印綬を解くや臺灣總督を以て其後を襲ぎ、陸相として部内の推重を受けしことは、寧ろ桂以上なりき。

兒玉の執務振り

宮中に於ける不評

整理事務の改革

山縣と衝突

兒玉の陸相としての執務振りは歴代の陸相の慣例を破れる一種獨得のものなりき。由來陸軍省の執務手續たるや、課員之を起案し、課長、局長之に捺印し、關係の局課に廻附して參事官に於て之を纒め、副官、次官の手を歴て陸相の机上に到達し、陸相は多くは之に旨印を捺し、間々疑點あれば次官局長等に就て之を質すものなるが、兒玉は其書類を手にするや決して其疑點を次官局長等に質すことなくして、必ず其起案者たる課員を官房に招致し、自から之と議論を上下して其利害得失を究め事理徹底するや直ちに之を裁決す。此故に省内の事務は常に敏活に進捗し毫も澁滯の痕を見ず。是れ蓋し渠が多年次官兼軍務局長として省内の事務に明かるく、能く其急所を捕捉するを得たるに由るものにして、素より局外飛入者の能くする所に非ざる也。

兒玉の陸相振りは斯くの如く天下一品とも稱すべきものなりしが、其頭腦の明敏なるに任かせて餘りに決斷の速かりしために往々間違ひを生じ、一旦宮中に差出せし書類を更に訂正の爲めに差し戻しを請ふ等の事ありし爲め、宮中に於ける信任は前任者に比して却て薄かりしやに傳へらる。而して渠は經理事務は劍を帶びたる者の執るべきものに非ずとし、大藏省より吏僚を招致して之に執務せしめたるため、山縣の睨む所となり、寺内を

陸相寺内

後任に推薦して、自から臺灣に避けたり。陸軍の經理事務を財政に經驗ある文官に一任せんとしたるの一事以て優に兒玉の尋常一樣の武辨に非らざることを證するに足る。

兒玉の後を承けたる寺内は、其性格殆ど兒玉と相反し、精勵克勤、微を究め細を穿ち、省内凡百の事悉く自己の型式に當て嵌まらざれば承知せず。而して渠は武人に非ざれば國家有用の材なきかの如くに思へり。

渠の器局の狹小なることは世既に定論の存するあれば復之を贅せず、玆には單に其最も適切なる一例を擧出するに止めん、明治卅六年日露の風雲漸く急にして民論沸騰し、例の河野廣中の上奏文一件ありて議會解散の詔勅に接せしの時なりき、臺灣なる工兵大尉星野某より渠宛の電報來る。渠執つて之を見るに閣下等は辭職すべきやとあり、渠嚇怒して副官津野一輔に命じ、陛下の御信任ある以上辭職せずと返電せしむ。津野區々たる一大尉の電報に對して大臣自から返電するの其威信に關すべきを思ひ、更に其電報を執つて一瞥するに、閣下余は辭職すべきやとあり、蓋し星野某其進級の遲々たるに業を煮やし、大臣の注意を喚起せんために故らに電報せる也。而して寺内は匆卒の際、電文中のヨをラと誤讀せるなりき。爲めに一時省内の笑柄となる。

寺内の經理事務

軍事參議院

師團長親補

寺内對田村

石本新六

岡市之助

然れども寺内は精勵克勤にして殊に經理事務に意を注ぎしが爲めに、日露戰爭は其戰局の擴大せるに比して經費の贅冗少なく且比較的兵站の設備能く行き屆けり。是れ渠が陸相としての唯一の偉功にして又實に帝國の大幸なりしと謂はざるべからず。

渠の始め陸相の任に就くや比較的新參の中將なりしを以て陸軍の宿老を祭込むの必要上軍事參議院を設け、師團長を親補職とする等の細工を試みたるが、渠の抱負は恰かも當年に於ける川上に對する桂の如く、參謀本部を田村怡與造に任せ、己れ陸軍省にありて兩々相對立し、相勢援して陸軍部内の權勢を壟斷せんとするにありき。而して田村の歿するや渠は其競爭相手を無くして愈〻憚かる所を知らず、從來參謀本部に屬せし建制編制の權を陸軍省に收むるに至る。我陸軍省の權威の强大なりしこと渠の陸相時代の如きは、蓋し稀に見る所也。此點に於ては如何に渠を嫌ふものと雖も其力量を認めざるを得ず。

渠の後を繼ぎし石本新六は單に渠の目代たりしのみ。特に言ふに足るもの無し、而して上原、木越、楠瀬の三人者に就ては前號の評論を以て其大綱を盡せり。また贅することを須ゐざる也。

現陸相岡市之助は曾て長閥帷幄の謀士たり、又曾て參謀本部に總務部長たり、陸軍省に

軍務局長たり、次官たり、隊附の經驗は乏しきも、軍政の總攬者として其閲歴、手腕、何等缺くる所あるを見ず。たゞ渠に惜む所は其器局小にして眼識陸軍を出でず、又閥外者を包容して之をして活手腕を揮はしむるの雅量なきにあり。且蒲柳の質多く前途の望みを屬す可からざる也。而かも渠によつて多年の懸案たる二箇師團增設問題の解決せられしことは渠の畢生の功業として我陸軍史に特筆大書せらる可き也。吾人の今後渠に望む所は、其進退を誤ることなく、明哲保身の途を全うせんこと是れのみ。

現在の陸軍省の重心は大臣岡にあらずして寧ろ次官大島にあるが如し。渠は夙に山縣の副官を以て聞え、後參謀本部に入りては赫々の聲名なかりしも、其陸軍省に入るや、俄然聲價を高め來り、今や人をして陸軍の人材を擧稱するに當り先づ明石、田中、大島を並稱せしむるに至る。是れ蓋し渠の資質の軍令系統の畫策よりも。寧ろ軍政系統の經綸に適するの致す所ならん。殊に渠に取るべきは其眼識の高邁にして辯論に雄に、學東西を兼ぬるの點にあるが如し。其岐阜人を以て長閥圈内の人と爲りし一事に至ては人格上の批難あるを免かれざるも、思ふに渠の期する所は軍政と軍令の方面こそ異なれ、第二の田村怡與造たるにあるべし。吾人は刮目して今後に於ける渠の行動を觀んと欲す。

軍務局

局長岡澤精

三

陸軍省内の權力の所在は軍務局にあり。而して軍務局長の椅子は桂の陸相たりし時代に木越が入つて專任局長となりしまでは常に次官の兼任なりき。蓋し軍務局の事務たる軍事課、歩兵課、騎兵課、砲兵課、工兵課の五課に分かれ、各課長の下に各課員ありて其事務を立案處理し、局長に專屬する官房を有せざるを以て自から進んで事を爲すの士に非ざる限り專任局長としては特に爲すべきの用なき也。此故に如何なる模型の人たるを問はず、此椅子にありて其能を盡さしめんと欲せば、之を專任となさずして次官の兼任たらしむるを要す。夫の桂、兒玉の二人者が次官にして之を兼ね、最もよく其成績を擧げしに徵し、且木越、宇佐川の二人者が專任局長として何等爲すなかりしに徵すれば、軍務局に專任局長を置くは寧ろ或意味に於て人の材能を殺すものと云ふべし。由來軍務局の事務たる陸軍省全體に影響す、故に省内の事務を總攬する次官の手に於て之を統ぶるも何等の不都合を生ずること之れ無かるべき也。

却説、桂、兒玉の二人者は軍務局長として傑出せしが桂、兒玉の中間に軍務局長たりし

中村雄次郎

陸軍對海軍

岡澤精は單に一個の好々爺たるに止まり孰れの點に於ても特に評論すべき價値なし、渠が曾て高島の師團長の下に大阪の旅團長たるや、一日觀兵式に列せるに、閲兵式の終るまで高島と共に地に踞して語り、式終るや徐ろに立ち上りて其成績の可なることを告げて已みしことありしと云ふ。又以て渠の暢氣さ加減を見るべし。

兒玉に次で軍務局長たりしものを中村雄次郎と爲す。中村は技術官として傑出せるも、次官及軍務局長としては寧ろ適任者に非ず。此意味に於て渠の現職滿鐵總裁は所謂適材を適所に配置せしものなるべし、渠は日清戰爭以前は始終技術官として勤務し、戰爭當時大佐を以て砲兵課長となりしも、部内は依然目するに一技術官を以てせり。此故に渠が軍事課長となりしや、省内を擧げて一驚を喫したり。たゞ渠の人物たる圓滿にして、圭角なきが故に、桂の如き手腕家の下に女房役たるに適せり。

渠の軍務局長時代は、從來陸軍の爲めに頭を抑へられし海軍が漸次之と拮抗するの勢力を占め來りし時にして、海軍の軍務局長は前首相山本權兵衛伯、軍事課長は現軍事參議官出羽重遠と云ふ腕揮ひなれば、其陸軍に對する態度は頗る强硬なるものあり。從つて渠は之がために往々窘窮せしめられしも其圓轉滑脱の才は能く衝突を緩和するを得たり。

木越と宇佐川

渠の次官たりし晩年は前陸相木越入りて專任軍務局長たりしも、其性質溫厚和平なるを以て自から事を醸すを好まず、極めて平淡に經過し去り、寺内の陸相たるや其椅子を宇佐川一正に讓りて自から大村の旅團長に避けたり。

寺内の後見役

宇佐川が寺内の陸相時代に軍務局長となりしは或意味に於て寺内の後見役なりき。渠は元來寺内の親戚なれども其器量大にして且貫目に富む。故に寺内が新參の中將を以て陸相の椅子に就き、故參の師團長等に對して威望の足らざるを補足するには缺くべからざる重要の役者なりし也。渠は何等事務的の材能あるに非ず、故に渠を寺内の女房役たらしめし山縣等は敢て渠に官制上の軍務局長として傑出せんことを求めず、たゞ渠に期待せし所は寺内の忠告者、補佐役たるの任を盡さんことこれのみ。而して渠はこの期待に背かざりき。

長岡大臣

宇佐川に次で軍務局長の椅子を占めしものは長岡外史なるが、渠が陸軍省内にありて最も盛んに切り廻はせしは中村の下に軍事課長たりし時代にして、當時海軍の權兵衛大臣に對して長岡大臣の目あり。苟くも省内の事、大臣桂に話す以前に必ず渠の默認を經ざるべからざりき。渠の此時代に於ける一事績として認むべきは教導團を廢して現今の下士採用制度を施けることなるべし。

寺内の警告

當時寺内は教育總監たりしが、長岡が陸軍省を我者顔に振舞ふを見て心外に堪へず、桂に忠告する所あり。其結果として長岡は歐洲に派遣せらるゝに至りき。而して長岡の歐洲より歸るや、自から軍務局長たるを期待せしも、寺内は之を廣島の旅團長に逐ひ、後漸く軍務局長の椅子を與へしも、之を信任することなくして自己の朝鮮に去ると同時に再び渠を高田の師團長に逐へり。

岡市之助

長岡に次で軍務局長となりし岡市之助は最も能く策士的の面目を發揮し渠に次で軍務局長たりし田中義一の表面の舞臺に活躍するを得意とせしと好個の對照を爲せり。

田中義一

軍務局長時代の田中義一は增師問題を激發せる張本人として世人の注目を惹き一躍して部内の大立物となれり。渠の頭腦は案外粗笨なれども他を籠蓋するに術に長じその部下を驅使し、事務の大綱を統ぶるの技倆に於て傑出せることは疑ふべくも非ず。渠が增師問題勃發當時、自働車を四方に駛せて、縱横の辯を振ひ、財界の老雄澁澤榮一を説服して增師贊成の説を吐かしめしが如きは、世人の耳目を聳動せる離れ業にして、今尙ほ吾人の記憶に新なる所なり。

柴勝三郎

田中に代りて軍務局長となれる柴勝三郎は水戸人にして全然閥外の人なり。意志極めて強健にして、獨立不羈の氣象に富み自己の信ずる所は一歩も讓らず。之を以て部内に於ては夙に其手腕を認められたるも、長閥に喜ばれざる爲めに、其軍務局長の椅子に就くまでは徒らに犬骨を折らせられしのみ。若し大正劈頭の政變なくんば渠が軍務局長の椅子を占めんこと思ひも寄らざる也。而して渠を軍務局長に推薦せしは恐らく岡ならん。何となれば岡は其軍事課長時代に於て課員たりし渠の手腕を認識せるを以て、人を長閥以外に採らば先づ渠を推すべき因縁を有すれば也。然れども渠は之を軍務局長たらしむるよりも又現在の如く師團長たらしむるよりも寧ろ參謀本部の要職に就かしむるを以て更に適材を適處に置くものとすべし。蓋し渠は手腕ある軍政家乃至軍隊の統率者として許すべき以上に傑出せる參謀官なれば也。

山田隆一

現軍務局長山田隆一は長閥の先輩に愛せらるゝ田中義一、大庭二郎等に讓らず、此故に若し增師問題に基く政變なかりせば、敢て今日を待つまでもなく、渠は直ちに田中に次で軍務局長たるべき長閥豫定の候補者なりしと云ふ、渠昇進最も早く少將級中の年少者にして而かも其序列は既に先頭にあり。其人物は野卑傲慢にして陰險なりとの評あるも、長閥の先輩にとりては渠の如く材幹ありて、而かも渠の如く使ひ易き人物は他に之れ無きが故に頗る調法がられ、日清戰爭當時は後備の一中隊長に過ぎざりしもの、戰後陸軍省軍事課の出仕に擢用せられしより引續き順調に進み常に要部の椅子を占む。蓋し渠は長閥側に於ける未來の陸軍次官、乃至參謀次長の候補者として最も有力なる一人なるべし。

渠獨逸留學中素性怪しき女と下宿に同棲して邦人間の交際加はらざりし廉を以て指彈せらるゝも、斯くの如きは陸軍部内に於ける一種の長人氣質なるらしく、長岡外史、大庭二郎等亦獨逸留學中、邦人と交際せず、且吝嗇なりしを以て有名也。而かも渠は部内非長閥側の批難を蒙ること寧ろ長岡、大庭に過ぎ、甚しきは渠をして團隊長たらしむるは是れ卽ち上下の意思を疎隔し、上官に對する部下の信を失する所以なれば、精神的に軍紀を破るものと見るべく、從つて公平の見地に立てば、渠の如きは宜しく最先に之を馘るべきものなりと激語するものあるに至る。要するに渠は長閥の寵兒なれども、其人物手腕に於て到底田中義一、大井成元等に比肩する能はざるものゝ如し。

人事局長

長閥は陸軍省内に於て軍務局を其掌裡に握るを以て甘心し、他は多く顧みる所に非ざりしを以て人事、經理、醫務の各局長は初代より悉く閥外者を以て之に任ぜり。即ち人事局長には初代中岡默が岡山出身なりしを始め、本郷房太郎と云ひ、山田忠三郎と云ひ、河合操と云ひ、菊池愼之助と云ひ皆長閥の直系以外の者のみ。經理局長亦野田豁通より、外松孫太郎、辻村楠造を經て隈德三に至るまで閥族者流は一人もなく、醫務局長亦然り。

本郷房太郎

人事局長として最も傑出せるを本郷房太郎と爲す。渠は單に各人の技能を鑑識するに長ぜしのみならず、又周圍の關係に注意し極めて公平に且愼重の用意を持して事に臨みしを以て部内に於て殆ど不平の聲を聞かざりき。或曰、これ渠の功に非ず、渠は人事に關して隨分我儘の方にして往々公私を混同せしことあり渠をして大過なからしめしは其下に補任課長たりし草生政恒の力なりと、或は然らん。

山田、河合

菊池愼之助

本郷の次で人事局長たりし山田、河合二人者は共に人事處理の適任者に非ず、殊に河合の如きは動もすれば人を器械視し個性を鑑識するの能力を缺くやの批難を受けたり。

現人事局長菊池愼之助は水戸人にして其氣慨と骨力とに於て、同郷の先輩柴勝三郎に及ばざるも、亦敢て權力に阿附せず職務に熱心にして智識あり、手腕あり、資質亦高朗なるが故に部内に敵なし、曾て參謀本部の副官たり、士官學校の生徒隊長たり、又陸軍省の副官たりしが、到る所好評を博せざるはなかりき。蓋し柴と共に水戸出身武官の雙璧として推稱に値すべく人事局長として亦恐らく空前の適任者ならん。

經理局長野田豁通

野田豁通は往々世人より苞苴の欲に囚はれたるやの嫌疑を蒙らされたれども、必らずしも然らざるが如し。渠曾て日清戰後に於ける臨時建築部長として兵營新增設の任に當る、而して其事七八分竣はるの頃突として罷められ、陸軍部内有數の嚴格家として知らるゝ原田良太郎之に代れり。人皆以て野田に醜事あるを疑ふ。

原田良太郎

野田の剛直

然るに事實は之に反し、野田の罷められしは其代々木に新設すべき兵營を獨斷を以て世田ヶ谷に移せしに因し、而して野田が之を世田ヶ谷に移せしは陸軍部内の有力者が手を廻はして代々木に於ける兵營建設豫定地附近を買ひ占めしことを知りしに因ると云ふ。即ち野田は其剛直なりしが爲めに却つて苞苴を好むの輩に陷られし也。

野田の遺産

渠の死後、其財産として子孫に殘せしものは僅に本郷の邸と銚子の別莊とあるのみ、他に一財なし。而して渠に代りて臨時建築部長たりし原田は北海道兵營事件によりて批難の焦點となり、責を負うて自殺するの非運に遭遇せり。動もすれば人格を疑はれし野田の案外

外松孫太郎
辻村楠造
隈德三
石黒忠悳

清廉にして、嚴格を以て鳴りし原田の却て非命に死せしは豈是好個の諷刺的教訓に非ずや。

外松孫太郎は極めて清廉の人物なりしが故に、豪放にして末節に拘泥せざりし野田時代に紊亂せし經營を整理するには無二の適任者なりしと云ふべく、辻村楠造は夙に頭腦の明敏を以て鳴り、佐官時代より經理局長の候補者として期待せられたるの人物なりき。殊に渠に取るべきは單に陸軍部内に局限せられざる國家經綸の大策を胸裡に包藏するとにして眞に陸軍經理官中雞群に一鶴の觀あり。

現經理局長隈德三は人格上の批難あり、其手腕亦渠の競爭者を以て目せられし日疋信亮に及ばざるものありしも、學閥の關係上、遂に勝を制して現椅子に就けり。其經理局長として多くを期待すべからざるを覺ゆ。

石黒忠悳は日清戰爭前後に亙りて長く醫務局長の椅子を占め、後圓滿辭職を遂けて後進の賢路を開きたりと稱すれども、其圓滿辭職たるや必ずしも圓滿に非ずしてや、不圓滿なりしの痕なきに非ず。當時の事情に精通する者の言に依れば渠の醫務局長たりし晩年に於ては赤門派の軍醫と專門學校出身の軍醫との軋轢甚しく、渠は之が統御に堪へずして辭せしなりと云ふ。

小池正直
森林太郎

小池正直は衞生學者として一頭地を抜けるも、現醫務局長、森林太郎に比すれば、其學識、手腕、人格共に及ばず、且無愛想なるを以て評判宜しからざりき。森は之に反し上に好く下に好く、長閥に好く閥外に好く、渠が部内に於て不評判なるはたゞ小說を書くの一事のみ。

第三　各師團及師團長

一

師團編制成る

我陸軍に師團司令部の設けられ、師團編制の成るを告げしは實に明治二十一年五月にして公桂の陸軍次官兼軍務局長時代なりき。これ公桂が我陸軍に遺せし功績の隨一なるべし。

第一の試演場

當時の師團長は第一、三好重臣。第二、佐久間左馬太。第三、黑川通軌。第四、高島鞆之助。第五、野津道貫。第六、山地元治にして唯一の高島鞆之助を除けば、既に悉く白玉樓中の人たり。而して、高島と雖も、現代人として之を認むるには餘りに古色蒼然たり。

明治二十一年五月に師團編制成りし六箇師團が、その技倆を試むべき第一の試演場は、爾後六年にして爆發せし日清戰爭なりき。而して此戰役に於て最も威名を揚げしものは第五師團にして第一師團之に次ぎ、第三師團又之に次ぐ。第六師團は旅順、威海衞の兩關門を攻陷するに際して勇敢に戰鬪せしが以て其名藉甚せるも其功と勞とは共に第一師團に一著を輸すべく、第二師團は威海衞攻擊の主力として又征臺近衞師團の增援軍として相當の戰績を有するも、未だ十分に其技倆を發揮するに至らざりき。最も不幸なるは近衞師團にして遂に其武を支那大陸に試むるに至らずして、臺灣の土匪討伐に從事せしため、赫々の功績を擧ぐるを得ざりしのみならず却て動もすれば十年役に得し名聲を傷けられんとせり。若し夫れ第四師團に至つては征淸大總督府に伴隨して遼東に上陸せしのみ、敵と一兵を交へずして了りき。

第五師團

日淸開釁當時の第五師團長は野津道貫にして其參謀長は上田有澤、而して其參謀には仙波太郎あり、長岡外史あり、旅團長には大島義昌あり、立見尙文あり、就中、當時の第五師團の戰績を飾るに於て最も偉功ありしものは、師團長野津を除けば、立見、仙波の二人者なりとす。

戰將野津

野津は薩人の通弊として阿賭物を愛するの癖あるも、戰將としては超群の技倆を有す、渠が仙波の大膽なる獻策を容れて三方より平壤を包圍するの戰略を定め、第一軍司令官山

遼陽戰の殊勲者

縣の來るを待たずして、平壤攻擊を斷行せしが如きは一面より見れば暴虎馮河の觀あるも、渠にこの猛氣あるは適〻以て渠が戰將たるの價値を九鼎大呂よりも重からしむるものと言ふべし。

日露戰爭に於ける渠の猛氣は屢〻我滿洲軍の危機を拯ひたり。就中其最も顯著なるを遼陽の戰となす。當時遼陽の守堅くして拔けず、我軍連日の攻擊殆ど效を奏せずして、死傷刻々に增加するや、滿洲軍總參謀長兒玉は途を朝鮮にとりて背進するの外策なしとし、將に命令書を發せんとす。時に野津、首山堡の線を奪取すれば以て遼陽の死命を制すべしとなし、敢然損害を顧みずして之に突擊せしめ、遂に勝敗の機を轉ずるを得たり。故に遼陽戰の殊勳は之を野津に歸せざる可からず。

野津の武勳既に斯の如きものあるを以て、渠の生存中は流石の長閥も傍若無人の行爲を敢てするに多少憚かる所ありき。渠の凋落は確かに非長閥の一大打擊なりしと言はざるべからず。

二

立見尙文

鳳凰城據守戰

黑溝臺の猛戰

立見尙文は天禀の良將也。平壤の役、朔寧支隊を率ゐ、最も寡兵を以て最も險要なる牡丹臺を攻陷す。之を最も衆兵を率ゐて船橋里方面の攻擊に失敗したる大島義昌——或は長岡外史——の技倆に比す、素より同日の談に非ざる也。

殊に渠が鳳凰城に據守して五月蠅の如くつき纏ふ依克唐阿の兵を巧みにこなせし手腕の如きは、水際立ちて鮮かなるを覺ゆ、吾人は日清戰役中最も其技能を發揮せし戰將としては、先づ指を渠に屈せざるを得ず。

渠日露戰役には第八師團長として晩く出征し、出征するや否や黑溝臺の役ありて、滿目の氷雪裡に、我に六七倍する敵將グリッペンベルグの大軍と死戰して其勇名を轟かせり、當時渠一意敵を擊攘するに急にして一步を退くことを肯せず、爲めに其幕僚は私かに渠の戰術眼の有無を疑へりと云ふ。

然れども倩々思ふに、尋常一樣の敵に對戰するならばいざ知らず、衆寡の懸隔斯の如く甚しき大兵に對して接仗するには、先づ兵氣を振作せざるべからず、而して兵氣を振作するは主將の猛氣に待たざるべからず。吾人は之を日清戰役當時に於ける渠の戰鬪振りに徵し、又明治三十四年十一月宮城縣下に於て擧行せられし陸軍大演習に於て第二師團長西寬

二郎の率ゆる南軍を散々に撃破せる技倆に徴し、渠を以て單純なる猪武者なりと信ずる能はず。

仙波太郎

平壌包圍の作戰を計畫せる仙波太郎（現第一師團長）は我陸軍部内有數の用兵家にして其手腕は敢て井口、松川等に讓るものにあらず。現に松川によりて計畫せられたる奉天包圍作戰の如きも、渠の計畫して成功せる平壌の先例に倣ひしに過ぎざる也。

長閥に忌まる

渠骨鯁にして長閥に容れられず、殊に寺内と惡しき爲め、數奇蹉跎、常に要職にあるべくして而かも屢〻要職より追はれたり。就中渠の大厄たりしは第十師團參謀長として姫路にありし時、將校連の頭目となりて市の家屋に對する附加稅の苛重を鳴らし、之に對するストライキを企てゝ、第八師團參謀長に轉職の命を受け、之を奉ぜざりし爲め一時休職を命ぜられしこと是れ也。

剴切なる意見書

日露戰爭當時は渠、北清駐屯軍司令官として奉天戰後に至るまで戰線に列せざりしも、屢〻剴切なる意見を具して大本營の上將連を警醒せしと傳へらる。渠後ち漸く第十七師團長を贏ち得てやゝ從來の鬱屈を伸べ得たるが如き觀ありしも渠の智能と才略とは、之をして一田舍師團長を以て終らしめんには、餘りに博洽にして且深遠なりしと言はざる可からず。

渠辭令に巧みに、應接に妙を得洋行前は髯を剃らざる無性者なりしが、爾來豹變して一廉のハイカラとなれり。渠又非常に多藝多能にして殊に義太夫を嗜む。而も其之に淫するの甚しき、戰術書を讀むに尙ほ且義太夫口調を以てするに至ると云ふ。

渠の生ひ立ちは好個の立志傳也。渠の家は代々愛媛縣久米郡福音寺村の庄屋なりしが、渠の父の代に至りて微祿し爲めに渠は幼時雜魚賣り、甘酒賣りとまでなりさがりて其口を糊せしとあり。當時人あり、渠の父に對して若干の貸金を有し、之を請求せんと欲して渠の家に至る。時恰かも歳暮に際し、戸毎に餅搗きの杵音勇ましく、兒女歡喜の聲屋外に漏る然るに渠の家に至れば、渠は破布衣を身に着け、少許の糯米を臼に入れて搗きつゝあり。而して渠の父は涙乍らに自己が慣れざる勞役の爲めに、事毎に窮厄を重ぬるの狀を語る。其人渠が家の盛時を知るもの、この窮狀を眼前に見聞して同情の念に堪へず、たゞ慰藉の言を殘して去りしと云ふ。思ふに渠の意志の鍛錬は此窮厄裡より得來りしものならん。渠や決して逆境に處して進退の措を失するが如き漢子に非ざる也。

要するに渠は之を孰れの點より見るも、現時の師團長中にありて嶄然頭角を抜ける一人なるを失はす。

三

奥保鞏

奥保鞏は、日清戰役の初期に於ては近衞歩兵第二旅團長たりしが第一軍司令官山縣が二竪のため其任を野津道貫に讓つて歸朝するや、野津の後を繼いで第五師團長となり、牛莊、田庄臺に轉戰せり。而かも是等の戰は未だ以て渠の手腕を試むるに足らず。渠よりして之を見れば明治十年の役に於て熊本城より賊の重圍を破つて川尻方面に突出せし戰鬪振りの華々しきに如かざるの感あるべし。

第二軍司令官

渠が眞に其將軍としての技倆を發揮せしは實に日露戰爭にあり、渠此戰役に第二軍司令官として常に我軍の主力を提げて敵の正面に向ふ。從つて渠の軍は終始最も難局に立ちしが渠の卓拔なる手腕と、堅忍不撓の意力とは能く此難局に處して其任を辱しめざるを得たり。

南山の役、敵壘堅くして拔けず、殊に我軍の左翼第三師團の如きは金州灣に現はれし敵砲艦のために射すくめられて動もすれば動搖敗退せんとす。渠の幕僚額を鳩めて、今夕兵を撤して明朝更に進擊すべきか、或は又損害を顧みず夜襲を强行すべきかに就て討議す、

南山役の決斷

之を默聽せる渠、最後に只一言、斷案を下して曰く、夜襲しても取るべしと、議卽ち決すと云ふ。

沙河戰の沈勇

沙河戰の時、一時我軍の戰況不利にして、第二軍の如きも其總豫備隊たる安東旅團をも悉く戰線に放ち盡し、而かも戰勢は毫も挽回する能はず、前面より來る報告は悉く絕望的のものに非ざるはなし。參謀連皆顏色を失す。而かも渠は泰然自若として威容堂々劒に仗つて立ち、毫も之を意に介せざるもの、如く、敢て自から戰況を問ふことをすら爲さず、時あつて徐ろに歩を移して散策するのみ。軍參謀長大迫尙道の情報を齎らして渠の決を乞ふや始めて耳を傾けて之を聽く。

英雄の襟懷

斯くて夜に入り、戰況を觀望すべからざるに至りしかば幕僚の勸めに從ひて宿舍に就く、適〻河村鐵太郎伯より渠が故純義伯の逝去を吊問せし書狀に對する返信來着しあり。渠之を手にして左右を顧み、徐ろに重くるしき口を開きて曰く、河村の息子の細君は大久保の娘さうなが却々の美人ぢや。俺れでもなア、鑄型さへ好ければ、美い子が生まれると、諧謔一番、滿坐をして覺えず失笑せしむ。而してこの時はこれ敵が第四師團の前面に夜襲し來りて、我戰線は危くも突破せられんとし、衆心恟々たりし時なりしことを思へば、渠

青年將校に對する訓戒

のこの諧謔は或は意あつて然りしやも知るべからず、兎も角も渠の胸中には古英雄の閑日月を包藏せり。

奥對黑木

渠參謀總長として幹部演習に臨むや、其方略を與ふること極めて精緻にして寸毫の遺漏なし、而して常に青年將校を戒めて曰く、貴公等の戰術は飛躍戰術にして實戰に用を爲さず、實戰は圖上戰術の如く一足飛びに行き得るものに非ざることを記憶せよと。

世人往々大將黑木の元帥の列に入らずして後備に編入せられ、渠のみ之を贏ち得たるを以て、渠の長閥傍系なるが故に然るかの如く云爲するものあるも、渠が用兵家としての知識、修養は黑木に比して一頭地を拔くものあるが故に、假令黑木が元帥たるの榮譽を得ざりしとするも、渠が之を贏ち得たるに於て何等怪しむべきことある無し。然りと雖も黑木の威名は宇内に普ねき所、故さら之を元帥府より排せしは、明かに是れ長閥跋扈の餘弊なりと言はざる可からず。

醇乎たる武將

要するに奥は現代に於ける第一流の名將也。野津歿後の戰將は指を先づ渠に屈せざるべからず。而かも斷じて軍政家に非ず。醇乎として醇なる武將也。

上田有澤

上田有澤は日清戰役當時の第五師團參謀長にして又日露戰役の前半――沙河戰に至るまで――の第五師團長也。而して渠は第五師團參謀長として特に功績の顯著なるものなく、第五師團長としても亦大石橋に於ける夜襲戰にはやゝ成功したるも、沙河戰には、例の山田支隊の敗戰ありて名譽ある第五師團の戰史に一大汚點を印したり。

山田支隊の敗戰

當時第五師團が第十師團と相聯繫して戰線に立つや、第十師團は奮戰して漸次其地歩を占むるに至りしも、第五師團は軍司令官より前進の嚴命下りしに拘はらず、諸詛逡巡して進まず、空しく十月十一、十二の兩日を費やせり。勿論上田は參謀長仁田原重行と共に軍命令を奉じて其師團に前進を令せしも、是れ單に命令書を傳達せしのみ。自から馬を陣頭に驅つて部下を叱咤激勵するの擧措に出でざりき。爲めに其師團は遂に滿洲軍の總豫備隊たるべしとの休職命令を受くるに至る。是れ渠のために惜しむべく、又我第五師團の爲めに惜しむべし。而かも山田支隊敗戰の責を渠に歸するは聊か酷なりと言はざるべからず、渠は當時黑木軍方面に赴援して直接山田支隊の指揮を取り居らざりし。

軍政家の適任者か

聞く渠は普通學の知識深く、外國語に達し、辯舌亦極めて爽やかなるが故に、軍政家として適任なるべしと。夫れ或は然らん。渠は到底傑出せる戰將に非ざる也。

木越安綱

沙河戰以後の第五師團は木越安綱に率ゐられて黑溝臺役に立見師團を赴援して、大に其

大谷喜久藏

小原傳

名聲を揚げ、奉天戰には沙坨子附近に勇戰して第二軍司令官より感狀を得たり。沙河戰に於て振はざりし第五師團の面目、茲に於てか漸く一新す。

木越に次で第五師團長たりし大谷喜久藏は手腕あり膽略あり、頭腦亦明晰なるも、其風采態度何となく、人に喜ばれず。且細君難の嘆ありて家庭の寂寞なるは同情に値す。

現第五師團長小原傳は現野戰砲兵監星野金吾と同期の砲兵科出身にして、將軍川上の知遇を受け、其愛女を配せられ、一時青年將校羨望の的となりしことあり。而かも川上歿後の渠は比較的不遇の地位にありしも、日露戰爭には第十二師團參謀長として名聲を揚げ、爾後要塞司令官砲工學校長等を歷任して以て、現職に至れり。爲人溫厚篤實にして學識あり手腕あり、容貌亦秀麗を以て聞ゆ。蓋し好個の師團長なるべし。

第三師團

四

第三師團は日清戰役には第五師團に次で出征し、其第十八聯隊は聯隊長佐藤正に率ゐられて元山支隊の名を以て平壤包圍攻擊に參加し、立見少將の率ゆる朔寧支隊と共に牡丹臺、乙密臺を攻陷して偉勳を奏す。

對宋慶戰

大迫尙敏と大島久直

日露戰役の第三師團

爾後此戰役中第三師團の戰歷として最も重なる都分を占むるは淸將宋慶に對する海城附近の防禦戰なるも、未だ之を以て名譽ある戰鬪と許容することを得ず。是れ畢竟當時の師團長桂が戰將としての手腕乏しきに由るべし。

當時大迫尙敏は第五旅團長として、大島久直は第六旅團長として共に桂の麾下にあり、其名聲は寧ろ桂を凌ぐものありしが、此二人者が日露戰爭に於ては一は第七師團長として、他は第九師團長として、共に大將乃木の第三軍に屬して、再び相提携して、戰場に立ちしは又一奇とせざるべからず。旅順戰に於いては大迫の師團は後れて至り、新鋭の勢を以て第一師團と協力して二〇三高地を攻陷し、奉天戰に於ては大島の師團は四方臺、造化屯、八家子、郭七屯に勇戰して共に滿洲軍總司令官の感狀を得たり。

戰後一時大島が敎育總監の任に就きしは其人格上や、首肯し難きも、大迫が乃木の後を繼で學習院長となりしは恐らく最も其人を得たるものならん。思ふに其重厚少文の資は乃木の謹嚴廉直なるに對して決して遜色なかるべし。

日露戰爭に於ける第三師團は大島義昌によつて統率せられしが、之を桂太郎に率ゐられし日淸戰爭に於ける第三師團に比して、頗る功績を擧げ得たるに庶幾し。其南山に於て敵

高島友武
南部辰丙

の砲艦に射すくめられしが如きは敢て誇るべき成績に非ざるも、這は戰狀已むを得ざるものあり。得利寺、奉天に於ては共に苦戰せるも、危く敵を呑ひとめ、友軍の行動を有利に導きたるの功績は之れ有り。殊に沙河戰に於て五里街附近、干家窪子附近の敵を擊破して其火砲を鹵獲せるが如きは第三師團の戰功として特筆大書するに値すべし。而して干家窪子附近に於て敵の速射砲十四門を鹵獲せる殊勳者は當時の歩兵第六聯隊第三大隊長にして現歩兵第十九旅團長たる高島友武なりとす。

戰後の第三師團長

現第二師團長南部辰丙亦當時第五旅團長として第十七旅團長兒玉恕忠と共に最も戰功あり、渠元來長閥の傍系に屬し一時寺内門下の四天王の一人を以て目せられしも、爲人頗る常識に富み、且手腕あり、聯隊長としては南部式の模範聯隊を作り、士官學校長としては最も名望ある士官學校長なりき。而して渠は嘗に長閥に善きのみならず、非長閥者にも善く、長閥に對して强烈なる反感を懷くものと雖も渠に對して惡言を放つもの殆ど之れ有らず。亦部内に於ける一種の德望家也。

日露戰後の第三師團は大島の後に渡邊章、渡邊の後に上原勇作、上原の後に岡市之助、岡の後に仙波太郎各師團長として就任し、以て現師團長大庭二郎に至れるが、渡邊は凡庸の資、多く言ふに足らず、上原は病の故を以て任地に赴かずして已み、岡亦極めて短期間にして殆ど見るべきの事績を擧げず、たゞ仙波太郎のみは管下の人望を一身に負ふて立つの概ありたり。

仙波太郎の人望

仙波の師團長たりしとき、適〻特命檢閲を受けしことあり、時正に酷暑に際す。仙波卽ち兵營より練兵場に全師團の兵を統率行進せしめし後、一時間の大休憩を命ぜり。特命檢閲使勃然色を作して曰く、貴官は未だ本官の檢閲を受けざる以前に於て何故に大休憩を命じたるやと。仙波容を正して曰く、時正に酷暑に際す、若し到着後直ちに檢閲を受くるがために兵士をして激烈なる働作を爲さしめんか、或は恐る日射病のため不測の異變を生ずる者あらんとを。假令一兵卒と雖ども、是れ陛下の赤子にして國家の干城なり、其生命は尊重せざる可からず、之を以て敢て大休憩を命したり。大休憩後は法の如く檢閲を受けん。これ余の自から職務に忠實なりと信ずる所以也と。檢閲使其言の理あるに服し、卽ち休憩後を以て檢閲を行へり。之を傳聞せる管下の父兄、手を額にして相慶して曰く、我等の師團長は仙波閣下也、我等は意を安んじて可也と。

大庭二郎

管下の重望を負ひし仙波に代りて現に師團長たるは大庭二郎也。大庭は長閥にありて期

大庭の事蹟

待せらるゝこと大井、田中の二人者に次ぎ、自ら陸軍次官を以て任ずるも、爲人佞奸邪智にして單に山師的法螺吹きに過ぎずとの惡評あり。渠故公桂と姻戚關係あるのみならず、巧みに目白大御所の臺所廻りを爲すを以て、部内にありて思ふ儘に振舞ひ、人をして往々顰蹙せしむることあり。曾て近衛師團に模範聯隊を作らしむべく渠を以て其聯隊長に補せしに、渠はたゞ所謂弱い者虐めを敢てせしのみにして實績毫も擧がらざりき。日露戰爭に際しては始め乃木軍の參謀副長として出征せしも、旅順攻擊の失敗に名聲を失墜し、後備第二師團の參謀長に左遷せられしが、戰後戸山學校長となるや自から宣言して曰く、向後當校に校長たらんもの、恐らく余以上の經綸なかるべし、故に余以後當校を存續せしむるの必要を認めず、須らく余一代にて之を廢す可き也と。これ戸山學校の外に陸軍歩兵學校なるものが千葉縣四街道に設けられし所以にして、渠は實に其初代の校長たり。

渠の陸軍部内に勢力を有すること、其專恣とは上述歩兵學校創設の一事にても略ぼ之を推知し得る所なるが、其人を人とも思はざる振舞は事毎に現はれ、其戸山學校にありしとき、時の教育總監大島久直の教育に關する講評あるや、渠はわざと外を向きて空嘯ぶき居り、又歩兵學校を檢閲のため、時の教育總監部本部長本郷房太郎の來るや自から案内をも爲さず、本郷の來去に就て關知せざるもの、如かりし。自から任ずること斯の如く、又專恣なること斯の如き渠が、假令一時なりとも中央部を去つて熊本の旅團長たるを以て甘んぜしは今尚ほ一箇の疑問とせらるゝ所なれども、これ一は渠の負けじ魂より隊附として拔群の成績を擧げ模範旅團を作らんとするの抱負ありしと、一は增師問題に關する田中義一の運動の背後に渠あるの嫌疑を蒙りしとにより、暫く躊躇するの得策なるを感ぜしによる可し。

ボーア戰術

渠明治三十四五年の交、歐洲より歸朝して盛んにボーア戰術の效能を說く、曰く、將來の戰爭は銃火を以て勝敗を決すべし、而して之を射的場の成績に徵するに大約五百米突の距離に於て命中率特に多し。因て思ふに將來の戰鬪は五百米突以内の距離に近づくとなかるべしと。當時部内の識者は私かに死物たる射的上の成績を以て活物たる戰鬪――精鋭なる武器を執つて我れに銃火を注ぎ、銃劍を持して突擊し來る敵に對する行動――を律すべからざることを思ひ、冷笑を以て渠の說を迎へしも、長閥の勢力を負ふ渠の說は遂に當局の採る所となり、各團隊をして之を實施せしむ。時に靖獻派の一人晴氣市三近衛に中隊長たり。大庭の陪從せる特命檢閲使の問に對して敢然ボーア戰術は自己に於て尙ほ研究中に

屬するを以て未だ之を其隊に實施教練せざる旨を答ふ。流石剛愎の渠も、此一言にたゞ啞然たる許りなりしと云ふ。而して渠の主張せるボーア戰術は日露戰爭の經驗によつて實際の戰鬪に適合せざるものなることを遺憾なく證明せられたり。渠這回歐洲戰亂の勃發するや、夙に露軍にありて觀戰せり、知らず其齎らし歸る所果して何物ぞ。

淺く深き型

由來渠は田中義一の廣く淺き型なるに對して、狹く深き型なるを以て其術數を運らすの點に於て、儕輩中に一頭地を拔くものあり。從つて屢々蹉跌するも必ず一條の血路を開くに苦しまず。況んや其長閥の寵兒たるに於てをや。渠の將來は有望也、而かも其師團長としての信望、力量は到底前任師團長たる仙波に企及す可くも非らざる也。

第一師團山地元治

日清戰爭の第一師團

五

第一師團は山地元治の師團長たりし時代に於て其名聲最も藉甚たるものありき。山地は其戰將としての力量敢て野津道貫に讓らざるのみならず、能く士心を得たるを以て殆ど理想的の師團長なりき。

日清戰役に於ける第一師團は渠に率ゐられて長谷川好道の混成旅團と共に金州、旅順を攻陷して赫々の武功を奏せしが、就中、旅順を僅々半日間に略取せし如きは殆ど奇蹟を以て目すべき偉勳なりき。斯くて第一師團は更に北進して蓋平、太平山、牛壯、田庄臺等に轉戰せしも、太平山に於てやゝ苦戰せしの外は、比較的樂なる戰ひを爲せしため山地をして十分に其手腕を發揮するに至らしめざりき。

三國干渉當時の山地

既にして日清の和成り、次で三國干渉の事あるや、純武人たる渠は慨然劍を按じて北征の命を待つ、適〻監軍山縣有朋三國の忠言に聽かんとするの廟議を齎らして出征の諸將に諮らんがために、征清大總督府所在地に至る。渠其着船を待ち受けて、山縣に迫つて曰く、今日の時機苟くも身監軍の重職にあるもの、悠々渡海し來るべきの秋に非ず、閣下何が故に來れる。廟議を傳ふるにば別に其人あるべし、閣下何ぞ自から進退を重ぜざるの甚しきと、山縣をして赧然言の出づる所なからしめしと云ふ。

山地の人材援引

渠頗る人材を愛し、殊に閥關係のために有爲の資を抱きつゝ不遇の境地に沈淪せるものを援引するに力む。今日の將軍連にして渠の愛顧によりて立身せしもの頗る多し、長岡外史、秋山好古の如きは其最たるもの也。渠明治三十年十月、西部都督を以て猝かに逝く。思ふに渠にして若し更に十年の壽を保たば、長閥を以て其專横を逞しうする能はざりしな

一　乃木希典
西寛二郎

らん、渠先づ逝き、川上次で逝きたるは、これ今日の長閥あるを致せし所以也。

日清戰爭當時渠の部下に旅團長たりしものは乃木希典、西寛二郎の二人者にして、其參謀長は猫將軍の名を以て聞ゆる大寺安純なりき。伯乃木の事を語り且評するは、渠に關する著書の汗牛充棟も啻ならざるの今日、殆ど其必要あるを見ず。故に玆には唯餘り人口に上らざる渠の一逸話を記して、渠が尋常一樣の武人に非ざりしことを證明するに止めん。

渠我貿易關係の餘りに米支の兩國に偏するを見て、他日若し此二國と國際的紛擾あるに於ては、我國は爲めに少からざる不利の境遇に立たざるべからざることを憂慮し、且我國より米國に輸出する貿易品が、主として羽二重、茶等の奢侈品に過ぎず、又淸國に輸出するものは綿絲、綿布、海產物、木材、雜貨等の日用品なるも、外國品との競爭多きを以て、是亦其根柢の鞏固ならざることを慮り、如何にして此狀態を改善して我對外貿易を健全に伸長せしむべきやの問題に就て頗る苦心焦慮し居たりと云ふ。

西寛二郎は戰將としては薩の諸將軍中にあつて聊か遜色あるを免かれず、渠が日露戰爭に於て第二師團長として贏ち得たる名聲の大半は恐らく、之を松永正敏、岡崎生三の二旅團長に割與すべきものなるべし。

大寺安純
日露戰時の第一師團松村務本
白襷隊

大寺安純は一英物なりき。渠れ勇猛にして膽略あり、往々先輩に對して傍若無人の言を弄す。故に薩の先輩と雖も能く渠を驅使するに堪ゆるものなし。纔かに山地將軍ありて之を其帷幄に羅致す。從つて渠は薩人なるに拘はらず其昇進比較的に遲々たり。渠が第十一旅團長として威海衛攻擊に際し百尺崖所に於て敵彈に斃れしは、惜しみても尙ほ餘りあり。蓋し長閥に對して薩の陸軍を代表して立つの意氣と力量とを有するものは、之を川上の後進者中に求めば渠の外に之れ有らざる也。長谷川好道の如きは常に渠を以て最も恐るべき競爭相手となし、渠のために地步を占めらるゝ毎に、又猫にやられたか又猫にやられたかと、頗る無念の面持ちありしと云ふ。

日露戰爭に於ける第一師團は始め貞愛親王殿下に率ゐられて南山に戰ひ、中ごろ松村務本に率ゐられて旅順に戰ひ、後飯田俊助に率ゐられて奉天に戰へり。而して其最も苦戰し且功績を現はせしは松村の師團長時代なるべし。殊に其二〇三高地の略取は松村の最も心血を灑ぎし所にして、其勳功亦最も偉大なるを見る。

若し夫れ中村覺の白襷隊に至つては、たゞ意氣の壯なるを取るべきのみ。戰術上殆ど何等の價値あるを發見すること能はず、殊に其指揮官たる中村が纔かに膝頭に傷きて背進し

たるが如きは、吾人到底之に讃辭を呈すること能はず。加ふるに渠は人格優良ならず、剛直の資を缺き、往々過ちを部下に嫁すとの評あり。又其演習に關する講評の如きも幾巡回して遂に要領を得ざるを以て、人稱して螺線狀の講評と爲すと云ふ、要するに渠は軟弱なる外交官の資質なり、到底武人たるの性格を具有せず。

詮ずる所日露戰爭に於ける第一師團は日清戰爭に於けるが如き名聲を擅にする能はざりしも、これ戰爭の性質並に戰局の發展上實に已むことを得ざりし也。

戰後の第一師團

戰後の第一師團に長たるものに木越安綱あり、載仁親王殿下あり、一戸兵衛あり、而して現任仙波太郎あり、宮殿下は申すも畏し、木越と云ひ、一戸と云ひ、仙波と云ひ、共に戰將として又軍隊の統率者として、部内に傑出せる英物なることは疑を容れざる也。第一師團は此點に於て優に模範師團たるに足るべし。

六

黑木爲槙

黑木爲槙は日清戰爭當時第六師團長として赫々の功名なく、從つて第六師團の名は寧ろ長谷川の混成第十二旅團、大寺の第十一旅團等の名聲に壓せられて、其背後に蔽はれたるの觀ありき。而して此戰役中、渠自身兵の指揮を執りしは威海衛の一役のみ。

明治十年役

然れども渠の武將たるの資質に富むことは明治十年の西南役にて證明せられ、渠の率ゆる別働第一旅團第二聯隊は、最も失敗少かりし聯隊として知らる。而して宇土方面に上陸せし衝背軍と、熊本鎭臺兵との連絡成りて後、一夜敵將貴島清の率ゆる一隊が熊本を奪還すべく猛烈に夜襲せし時の如きは、渠は崩るゝ味方を叱咤し聯隊旗を儼立して一歩も退かず以て頽勢を挽回するを得たりと云ふ。

第一軍司令官

渠日露戰爭に於ては第一軍司令官として、常に我滿洲軍の重鎭となり、最も敵の忌憚する所となる。夫の沙河戰の如きは實に敵の總帥クロパトキンが渠を憚かるの餘り、先づ主力を擧げて之を擊退し、我軍の動搖に乘じて總攻擊に移らんと畫策せるに出づ。而かも渠は此機勢を察して、突出孤立せる梅澤道治の後備旅團をして退いて本溪湖、大岑の險要を守らしめ、結束して待ち、奮戰して敵の意圖を挫折せしむ。

梅澤道治

本溪湖、大岑の線に於ける梅澤旅團が大優勢の敵軍に對抗して能く其陣地を維持し、以て我軍を潰敗の危機より拯ひしは、沙河戰に於ける殊勳中の殊勳として特筆大書に値す。

各師團及師團長

梅澤は是亦戰時の將軍にして、平時の軍隊指揮官に非ず且權勢に阿附せざるが故に、若

梅澤の多藝多能

遼陽戰と黑木軍

戰將黑木

し日清戰爭にして之れ無くんば、恐らく少佐を以て現役を追はるべかりき。而して日露戰爭にして之れ無くんば亦恐らく現役將官たるの地位を贏ち得ざりしならん。況んや師團長たるの日あるは殆ど夢想し得ざりし所なるべし。

渠亦仙波同樣、一介の武辨に不似合なるまでに多藝、多能にして、時に脚本を自作して之を演ぜしむることありと云ふ。たゞ金錢關係に於て幾分吝なるやの噂あり、果して事實ならば白璧の微瑕として惜しむべきの至り也。

遼陽戰に於ける黑木軍は一箇師團の兵力不足せしが爲め最も有利なる地歩を占め乍ら、十分に其威力を發揮する能はざりき。然るに奉天戰に於ては始め野津軍と共に敵を牽制すべく正面攻擊の難局に當りしを以て非常の大損害を蒙りしも我左翼軍の戰局進轉するや、敵の退却に乘じて突進し、最も敏速に敵を包圍、追擊するを得たり。而して渠の軍に對せしは敵將中第一流の目あるリネウヰッチなりき。其戰鬪の猛烈にして壯觀を極めしこと想見すべき也。

黑木の戰場に臨むや、奥の威容儼然、恰かも泰山の動がざるが如きものあるに對して、又別種超凡にして洒脫の趣を有す。聞く渠は作戰計畫に就て、何等之に是非の批判を與ふることなく、軍參謀長藤井が之を渠の前に於て讀み上ぐるや、渠はたゞ點頭するのみ。而して愈〻彼我の砲火交はるや、渠は時に午睡して鼾聲雷の如く、時に一竿の釣を野水に垂れ、時にスリッパ穿きの儘散策す。恰かも戰あるを關知せざるもの、如し。

世界の黑木

大久保春野

渠は三軍を率ゐて難局に當り、戰機を適確に判斷し、戰勢を良好に指導するの點に於ては、之を奥に比して一籌を輸するものあれども、其將に將たるの器に於ては敢て之に讓らざるのみならず、寧ろ一日の長ありとすべし。從つて其帷幄に好幕僚を有するに於ては、其戰將たるの手腕を發揮するに於て遺憾あるを見ず、是れ渠の軍が日露戰爭に於て、其名聲嘖々たりし所以也。

日清戰爭に於ては各師團長中、特に其名の著聞することなかりし黑木將軍は、斯くて世界の黑木將軍となれり。此點に於ては恰かも海軍の東郷元帥と相似たるを見る。假令如何なる理由ありしにせよ、渠を元帥府に入れざりしは、吾人我陸軍の名譽の爲めに之を遺憾とす。

日露戰爭に於ける第六師團は大久保春野の指揮の下に大石橋、遼陽、沙河に於ては奥軍の中堅として、奉天戰に於ては野津軍の左翼として、常に正面攻擊の難局に當り、能く九

戰後の第六師團

州健兒の勇名を轟かせり。而して大久保將軍は戰將として第一流を以て許す能はざるも、日露戰爭に於ける働き振りは、略ぼ錯誤なきに庶幾かりき。

戰後の第六師團は西島助義、木越安綱相次で之が師團長たり、次で最近まで當年の勇將梅澤道治によりて統率せられしが、今や部内稀有の傑物明石元二郎の參謀本部より出で、之に膺るあり。第六師團も亦多幸の師團と言ふべき也。

七

第二師團

第二師團は明治二十一年五月、師團司令部の設けられしより同二十八年四月に至る滿七ケ年間、佐久間左馬太師團長として之を統率せしが故に、吾人今尙ほ第二師團を念頭に浮ぶる毎に佐久間を連想せざる能はず。

佐久間の人物

佐久間は長人中最も膽略あり、將軍としての器量に富むも、日淸戰爭には、其技倆を發揮するの機會なく――威海衞の一役の如きは、所謂牛刀を以て雞肉を割きたるのみ――日露戰爭には痼疾の肋膜炎の爲に惱まされて出征する能はず、從つて赫々たる武勳の特に傳ふべきものなし。

佐久間の無學

渠奇兵隊時代より軍旅の間に人と爲りしを以て、殆ど文字に關する知識なく往々その爲めに笑を貽すことあり。明治二十五年宇都宮附近に於て大演習のありし時、渠第二師團を率ゐ、山地の第一師團と對抗す。一日渠師團命令を讀むに當つて曰く、敵の一縱隊は鬼怒川の河モウに出でんとすと、蓋し河盂の盂字の盂字に似たるを以てなり。衆皆笑を忍ぶ。渠は又會席上　陛下の萬歲を奉祝するの際、必ずマン歲と發音するを以つて少年時の藝の渾名に對して晩年マン歲の渾名ありしと云ふ。

佐久間と長岡

渠茫漠不得要領なるが如くにして往々人を弄殺するとあり。曾て長岡外史が月曜會の事に坐して渠の師團に放逐せらるゝや、先づ渠を訪ふ、渠之を應接間に延く。長岡其室の絨緞敷の西洋室なるを見、靴の儘にて上るや、渠自から坐して談ず、長岡も亦已むを得ず靴穿きの儘坐す。少焉ありて辭し去らんとするや、渠連りに之を引止め、强て長坐せしむ。流石の長岡もこの皮肉なる待遇には頗る閉口せしと云ふ。

乃木希典

佐久間に次で第二師團長に補せられし乃木希典は、營下の兵を率ゐて臺灣南部に上陸し、北方より南進し來れる近衞師團と相策應して不逞の徒を鎭壓せるが、幾許もなく凱旋し、其職にあること僅々一年半にして臺灣總督に轉じたるを以て西寛二郎之に代れり。

西寛二郎

日露戰爭と第二師團

松永正敏

岡崎生三

西は明治二十九年十月第二師團長に補せられ、同三十七年九月遼陽戰後まで引續き八ケ年間其職にありしのみならず第二師團は渠の統率の下に始めて光榮ある戰歴を得たるものなるが故に、西と第二師團との關係は、佐久間と第二師團以上に深しと言はざるべからず。

然れども渠の師團が日露戰爭に於て贏ち得たる名聲は、之を渠の功績に數ふべきよりも寧ろ、松永、岡崎兩旅團長の功績に數ふるの至當なるが如き感あるを以て、玆には聊か松永、岡崎二將の人物に就て言說せんとす。

松永正敏は陸軍部内の酒豪として聞え、敢て新知識に富むと云ふに非ざるも、實戰家としては超凡の技倆を有す。渠が第三旅團長として鴨綠江戰より沙河戰に至るまでに發揮せし手腕は、各旅團長を通じて特に鮮かなるものありしを以て、奉天戰當時には拔かれて乃木軍の參謀長となり、最も大膽なる迂回運動に成功し益々其名聲を發揚せり。渠戰後第二師團長たりしが惜しむべし一昨々年を以て逝けり。

第十五旅團長岡崎生三は實戰家としての技倆松永に讓らざるのみならず、器局亦大にして、眞に好個の將軍なりし　今上陛下の曾て御幼少に在しませし時、東宮附の武官としては先づ貫目に富むの人物を選ばれしが、渠其選に當り僚輩の間に重きを爲せりと云ふ。

打方止め

遼陽戰後の第二師團

渠摩天嶺の役敵將ケルレルの大逆襲を擊退して其名聲を揚げ、遼陽の役黑英臺に勇戰して其名益々顯はる。殊に黑英臺に於て敵の夜襲軍を百步の前に引きつけ乍ら、喇叭手を顧みて「打方止め」の譜を吹奏せしめ、敵火によりて敵軍の位置を測り、一舉に之を潰走せしめし大膽果斷なる戰鬪振りに至つては、今尙ほ人口に膾炙する所也。

遼陽戰後の第二師團は西島助義により統率せられしが、敢て其名聲を失墜せず、戰後は當年の勇將松永正敏、西島に代りて師團長となり、松永の其任に殁するや、仁田原重行之を襲ひ、最近仁田原の第四師團長に轉ずるに及びて南部辰丙之を承け、以て今日に及べり。而して其師團長としての技倆は松永、南部相雁行し、仁田原は恐らく一着を輸すべし。

近衛師團

八

近衛師團は第一乃至第六の諸師團に後るゝこと三年半、即ち明治二十四年十二月を以て始めて師團長の任命あり。第一期の師團長は小松宮彰仁親王殿下なりしが日清戰爭中殿下が有栖川熾仁親王殿下薨去の後を承けて參謀總長に榮轉し給ふや、北白川宮能久親王殿下第四師團長より入つて其職を繼ぎ給へり。

能久親王殿下

能久親王殿下の臺灣征討の御功績と、御艱苦とは今更ら之を言説するを須ゐず。當時殿下に隨伴し奉りし近侍者の談、惻々として尚ほ吾人の耳朶にあり。而して西村天囚作の琵琶歌『臺灣入り』の一曲はよく其情趣を傳へ、聽者をして暗涙に咽ばしむ。

當年の近衛師團

當時殿下の帷幄に參贊し奉りしものに、師團參謀長鮫島重雄、師團參謀明石元二郎あり。又旅團長として殿下を扶翼し奉りしものに川村景明、山根信成、阪井重季あり。就中獻替最も努めしを明石元二郎となす。

參謀明石元二郎

明石は當時眇たる一大尉なりしも、師團の重きを以て自から任じ、萬般の戰務殆ど渠一人の鞅掌する所たり。渠が日露戰爭當時、能く露國内に於ける不平の徒を操縱して、其政府をして奔命に疲れしめし辣腕は、思ふに這裡艱苦の間に養成し來りし所ならん。

寺内の智囊

渠始め川上操六に用ゐられしも、後長閥系の人となり韓國併合前後は寺内の智囊として朝鮮總督府警務總監の要職にありて、其權勢殆ど朝鮮を風靡するの概ありき。然れども之を渠の性格より見れば寺内と相飽和せずして寧ろ相反撥するものあるが故に、他日寺内が渠の辣腕を必要とせざるに至らば、所謂狡兎死して良狗烹らるの厄に遭ふこと無しと云ふべからず。蓋し之を長閥側より見れば渠の骨頭と手腕と膽氣とは、寧ろ松石以上に恐るべきものあれば也。

明石の性格

渠士官學校時代より蟹カラを以て有名に、後架に上りて手を淨めざるは勿論、顏も碌々洗はず常に鼻をたらし、目を赤くし居りしを以て、鼻たらし、目赤等の渾名ありしとぞ。渠又頗る金錢に無頓着にして、常に机の引出しより錢を握み出して外出せるが、一日物を買ふに際し嚢裡にあるものを見るに、悉く五厘銅貨のみにて銀貨は勿論、一二錢の銅貨すらも之れ無く、爲めに其意を果さずして空しく歸りしが如き滑稽事もありしと云ふ。

鮫島重雄

鮫島重雄は工兵科出身なるも、尉官時代より引續き近衛の參謀なりしを以て、自から戰術家を以て任じ、工兵の事は知らずと揚言す。征臺の役渠身を持すること頗る嚴格に、遂に一度も瘴癘の氣に觸れずして凱旋す。而かも其實際の功績に至つては寧ろ遙かに明石に及ばざるものあり。

鮫島の人物閥歴

渠薩人なるに拘はらず晩年長閥に降りしを以て、薩人の渠を齒せざるは素より長閥よりも亦重きを置かれざりき。渠日露戰爭の初期に於て現役中將を以て東京灣要塞司令官たりしが、阪井重季の豫備中將を以て留守第一師團長となるや、其位地渠の上にあり、渠之に平らかならず、轉じて大本營附となり、旅順の包圍戰に參加し、土屋光春の負傷するや、

代つて第十一師團長となりて四國兵團の指揮に任ぜるが、旅順開城後鴨綠江軍の組織せらるゝに當り、阪井と相竝んで司令官川村景明の下に、最右翼軍として、奉天戰に參加せり。

川村對鮫島

當年臺灣に於て近衛師團の幹部として艱苦を共にせし川村、阪井、鮫島の三人者が再び日露戰爭に於て同一軍の幹部となりて戰歷を共にせしことは、世俗に所謂盡きせぬ因緣とこそ云ふべけれ。

鮫島の人格の陋劣なるは薩人にして長閥圈內の人と爲りしと云ふにても知らるゝが、尙ほ之を證明すべき一話あり。臺灣征討の當時、某地の戰鬪に際し渠師團命令を草して左側支隊司令官川村景明に致す。川村此命令を見るや否や汗馬に鞭つて師團司令部に來り、其命令の缺點を指摘し、渠を叱責す。渠唯々として其言ふが儘に訂正し、纔かに川村の激怒を釋くを得たり。當時側らに之を見聞せる通譯官香月梅外は曾て第一師團の一參謀が其職權を以て一聯隊長を叱咤せるを目睹せるもの、彼此を對照して、鮫島の參謀長たるの見識を缺くの餘りに甚しきに一驚を喫したりと云ふ。

川村景明の力量

川村景明は其力量將軍として三軍を指揮するに堪ゆ。日露戰爭に於て第十師團が終始野津軍の重きに任ぜしもの、職として、渠の力量に之れ由る。而して奉天戰に於ける鴨綠江軍が戰機を先制せし偉勳は渠の名をして我戰史上に不朽ならしむるもの也。

長谷川と川村

渠は必ずしも大人格の人と云ふ能はざるも、而かも其人物は現參謀總長長谷川好道輩に比すれば確かに優秀なるものあり。長谷川にして尙ほ元帥たる可くんば渠の元帥たるは寧ろ當然也。

阪井重季

阪井重季は土佐人なれども、之を鄕關を同じうする岡崎生三に比すれば人物遙かに小に、其技倆亦遠く及ばず、日露戰爭に於ける渠の後備第一師團の戰功の如きは、これ渠の力に依ると言ふよりも、寧ろ其參謀長橋本勝太郎の手腕に待つもの多かりしを思はざるべからず。

九

日露戰爭と近衛師團

日露戰爭に於ける近衛師團は、出征より遼陽戰までは長谷川好道に率ゐられ、沙河戰以後は淺田信興に率ゐられて能く禁衛軍の名を辱めざるを得たり。

不遇なりし長谷川

長谷川は今や長閥陸軍の勢力を脊負つて立つの概あれども、始めは長閥の先輩に喜ばれず、爲めに少佐時代までは佐久間よりも先任なりしもの中佐以後は其昇進遲々として啻に

佐久間に拔かれしのみならず、其將官たるに際しては更に其後進なる桂に拔かれ、奥に拔かれ、比較的不遇の地位にあり、從つて渠が長閥者流中にあつてや、頭角を現はすを得しは、比較的近年――兒玉の死後――のことに屬す。蓋し兒玉を失ひたる山縣は、其缺を補ふ者を物色せる結果、當然の順序として渠に來らざるを得ざりし也。

長谷川の暗誦力

渠佐久間同樣年少時より軍隊にありしを以て讀書力に乏しきも一種非凡の暗誦力を有し其講評の如きは美辭麗句を聯ね、聽者をして恰かも一種の美文を聞くの思ひあらしむと云ふ。

長谷川の淫酒

渠酒に淫すること甚しく、其幹部演習を統監する時の如きも往々醉うて、專修員の作業室を夜襲し、且飲み且高談し、作業を妨げて憚らず、而して各專修員の面上に窘窮の色あるを見るや、渠氣を吐いて曰く、諸君何ぞ余の酒に辟易するや、武士の戰場に臨む須らく徹夜の覺悟あるべしと。故に若し心利きたる副官あつて渠を他に拉し去るに非ずんば、衆の苦しむこと大方ならず。

長谷川の藝

渠又女色を好み、尉官時代より既に青樓に上り、時に支拂に窮して沖原光孚等に救濟せられしこともありしと傳ふ。渠既に酒に淫し又女色を好むこと斯の如きものあるを以て、敢て他の素行を尤めず、寛容以て之を待つ。渠が紅燈綠酒裡より得たる隱藝に淸元、二上りあり。

長谷川の吝嗇

渠金錢に吝なるを以て有名なり。其人を饗應するに官費を以てするは素より、苟くも官舍のものとし云へば釘一本と雖ども私費を以て購ふが如きことをなさず。又其養子猪三郎とは全然家計を別にし居るもの、如しと云ふ。

淺田信興

淺田信興はメツケルをして生れ乍らの好參謀官との讃辭を呈せしめたる當年の俊秀也。渠川越の藩士なるを以て、自から上州長脇差の氣風を帶び、幼時より喧嘩を好み、軍隊に入りて後も絕えず他と衝突し、往々上官の頭上に鐵拳を加ふることあり。而して渠の少壯時は我陸軍の氣風も自から蠻的にして大酒をあほつて氣を吐くものに非ざれば齒せられざりしを以て、喧嘩好きなる淺田は夙に一種の立物として迎へられたり。

尉官時代の窮乏

渠尉官時代にありては借金に苦しむこと甚しく、馬丁を置くの資にすら窮せしを以て、常に細君をして馬の手入れを爲さしめ、又借金取り來るや、押入に隱れて自から留守なりと怒鳴ることもありしと傳ふ。

十年役の勇戰

明治十年の西南戰當時は渠士官學校の教官なりしが、前記の如く借金に苦しめられ居り

しを以て、借金に苦しまんよりは寧ろ戰場に死するに如かずとし、大沼大隊の副官として出征し、常に險を冒し、死地に入りて奮鬪せしが、幸か不幸か渠は無事凱旋してたゞ其勇名を歌はれしのみ。而かも渠は賊魁西郷を逸せし責を負ふと稱して、一時頭髮を剃り落し、人の耳目を聳動せしめしことあり。

戰後渠依然として舊態を改めず、爲めに衆の忌嫌する所となりしも、其手腕の卓絶せるものあるを以て之を馘ること能はず、遂に廣島鎭臺の大隊長に追はれたり。而して大隊長としての渠は、凡庸揃ひの當時の大隊長中にありては、確かに鷄群の一鶴なりしを以て、其名聲は益々揚れり。

當時最も渠の材を愛して能く之を用ひし者は川上操六なりき。川上は渠をして一田舍師團の大隊長たらしむるは其驥足を伸ばさしむる所以に非ずとし、之を支那に差遣して特別任務に服せしめたり。是れ渠が今尙ほ古き支那通の一人として知らるゝ所以也。

渠に豪傑を衒ふの癖ありて、其軍隊を檢閲するや必ず何等かの點を以て隊附の將校の荒膽を挫くを常とす。而かも渠は唯々として自己の言に服從するものを目して凡庸の徒となして之を斥け、抗辯相下らざるものを膽氣愛すべしとして稱揚す。從つて能く渠の癖を知

鷄群の一鶴

川上に知らる

淺田の豪傑癖

淺田の宿舍選み

一代の絵卷

豪傑廢業仕候

戰後の近衞師團長

るものは渠の意を迎ふるの準備を怠らず、此故に部内の一部にありては、渠の癖は我軍隊内に或種の弊害を醸すものなりとして批難す。

渠に尙ほ一種の奇癖あり、其地方に出づるに當りて宿舍を選ぶこと最も嚴密を極むることと是れ也。卽ち渠の宿舍たるや其地方第一流の旅館にして而かも絶對に相宿者なく、且夜具は必ず絹夜具なることを要す。爲めに渠の副官は此爲めに往々閉口することあり。渠は此點に於て大將乃木の簡素なると正に相反す。

渠又案外に吝ちなりとの噂あり。曰く、渠曾て某繪師に自己一代記の繪卷物を描かしむ。而かも之に酬ゆるに僅々百金を以てせるのみ。以て其吝嗇なるを證すべしと。

渠久しく十二指腸に惱み、又アルコール中毒の症狀あり。それかあらぬか、近時頓に元氣沮喪せるやの觀あり。且已に大將の地位に上りしを以て幾分の自重心を懷くに至りしにや、玄關に張紙して曰く『爾今豪傑廢業仕候』と、噫、渠も亦老いたる哉。

戰後近衞に師團長たりしものに大島久直あり、上田有澤あり、載仁親王殿下あり、山根武亮あり、以て現師團長秋山好古に至れり。大島、上田に關しては旣に說く、山根は一種の才物にして、巧みに世を韜晦し、自から敢て競爭の渦中に投ずることを爲さず。生來顏

山根武亮

る短氣なれども能く後進を誘掖す。之を女に譬ふれば其輕く薄く且愛嬌ある點に於て尙ほ恰かも侍合の女中の如きものあり。其風采亦忠臣藏の與一兵衞の如く其資質をよく外部に表現せるに似たり。

山根の暢氣

渠曾て小倉師團の參謀長たりし時、其子と同時に赤痢に罹る。渠一日細君に向て曰く、今夜は乃公徹夜して子供の看護を爲しやるべしと。何くんぞ知らん渠は渠に阿諛する軍醫某と徹夜酒宴せるならんとは。渠の暢氣なること以て想見すべき也。渠亦女色を好むを以て有名に時々年甲斐もなき艶聞を流すことあり。要するに渠は長閥中最も毒の無き人物と云ふに止まり、軍政上にも亦軍令上にも、特に重きを爲すの資格ある者に非ず、素より師團長たるの柄に非ざる也。

秋山好古

現近衞師團長たる秋山好古は、頭の禿け具合より其巨眼爛々たる點に至るまで、風采何となく獨逸の大宰相ビスマルクに似通ひ、如何にも豪傑らしく見ゆ。而して其品性も亦高潔にして邪氣なし。夙に大尉時代より有望を以て目せられ、舊藩主久松定謨伯に隨行して佛國に遊學してより一層其進境を期待せられたり。或は曰く渠の洋行は得意の洋行に非らず、何となれば渠は當時第一師團にありて、參謀長大寺安純に苛められ、遂に之に堪ゆ

平和會議

騎兵科に於ける評判

る能はずして其鋭鋒を佛國に避けしものなれば也と。或は然らん、然れども渠の洋行が其將來に資せしことの大なるは疑ふを須ゐざる也。

渠第二回萬國平和會議に我大使都筑馨六に隨行し海軍の島村速雄と共に軍事委員として之に臨み、大に軍事的外交手腕を發揮し、將軍秋山の名聲をして藉甚たらしめたり。

渠部外に於て名聲嘖々たるに拘はらず、部內殊に騎兵科出身のものは、渠が騎兵監當時、何等具體的に貢獻せるものなかりしとて、渠を目するに建設的經綸の才なき見かけ倒しの豪傑に過ぎずと爲すもの多し。這は無論酷評に過ぐるも、渠が往々人を見るの明を缺くことあるは事實なるが如し。好漢希くは自省せよ。

秋山の人物

然れども、渠は之を渠の先任なる騎兵科出身の名物男として知らる、大藏平三・森岡正元等に比すれば、確かに一頭地を抜く。大藏は畢竟通譯にして、盛岡は所詮乘馬技師なるのみ。其知識手腕共に到底、渠の比倫に非ざる也。

鄉黨の誇

渠實戰に勇猛なるを以て名あるも、其勇猛の大半は之をブランデーの力に仰ぐと噂せらる。果して然らば之を現騎兵監の豐邊新作の沈勇なると同一に律す可らざるに似たり。果して然るか。而かも師團長としての渠は、思ふに得易からざるの材なるべし。渠が同鄉出

身の仙波太郎と轡を竝べて帝都の師團に長たるは、また鄰黨の誇たらずんば非らず。

十

第四師團は日清戰爭にはたゞ師團長山澤靜吾に率ゐられて遼東の地を踏みしのみ敵と一兵を交へず。是れ西南役に於て大阪鎭臺兵の特に不成績なるものありしが故に、殊更に其出征を後らせしに由ると云ふ。

第四師團

山澤靜吾

山澤は膽斗の如しと稱せられ、大西鄕の愛する所となりし豪傑也。其大西鄕に鑑拔されて、歐洲に留學するや適〻露土戰爭に際會す、渠卽ちプレヴナ攻圍軍に從軍し、自から一隊の兵を指揮して勇戰し、露帝の鑑賞に與かりしと云ふ。惜しむべし好漢、過飲肺を傷けて日清戰後二年にして歿せり。

小川又次

山澤に亞で第四師團長たりしものを小川又次と爲す。渠福岡人なれども夙に山縣の知遇を享け、日清戰爭に際しては山縣の軍司令官の下に第一軍參謀長たり。然れども渠の實戰上の手腕は日清戰爭に於ける第一軍參謀長としてよりも寧ろ日露戰爭に於ける第四師團長として發揮せられたりと言はざるべからず。

大阪師團の名聲發揚

南山役に於ける小川

渠日露戰爭に際し、奧軍に屬して南山、得利寺、大石橋、遼陽等に轉戰し、大に大阪師團の名聲を發揚せるが遼陽に於て敵彈の爲めに傷き實兵を指揮する能はざるに至り、其職を塚本勝嘉に讓りて內地に歸還せり。

塚本勝嘉

日露戰爭中。渠の戰功として特筆大書すべきは南山の役、我右翼兵團を率ゐて敵の左翼を突擊し、南山占領の先鞭を著けしこと、得利寺の役、機を失せずして敵の右翼に迂回し、之をして潰走せしめしことなるべし。素よりこれ軍司令官たる奧の用兵の技能の優秀なるに基くと雖も、渠の手腕の卓拔なりしもの與かつて力あるは疑ふべくもあらず。

有數の實戰家

渠に次で第四師團長となりし塚本勝嘉は豪傑として知られ、日清戰爭には大迫旅團の聯隊長として佐藤正と共に勇名を揚げ、團匪事變には第二十一旅團長として北京公使館救援の事に從ひ、能く其任務を盡し、日露戰爭の初期（遼陽戰まで）は同じく第二十一旅團長として出征し、到る所、實戰家としての技倆を發揮せり。

渠岐阜の出身なるを以て閥關係なく、又特別進級なるを以て何等の學歷――學閥もなかりしが、淺田信興の兵學家なるに對して、夙に實戰家として知られ、日清戰爭後には入つて陸軍大學校長たりしことあり。これ當時の陸軍大學校の校風が餘りに理論に偏して却て

實戰に適切ならずとの批難ありしがために、實戰家として傑出せる渠を招致せしものなるべし。

渠の小川に次で近畿の兵を提げて沙河、奉天に戰ふや、大阪師團は益〻其名聲を發揚し從來、他師團に比して弱兵と侮られしもの、其實力の却て之に優るものあるを認識せしめたり。是れ蓋し渠と小川との力にして、此二人者は共に第四師團にとりて永世忘却すべからざる歴史上の恩人なるべし。

塚本の廉直

渠資性極めて廉直なり。之を以て其團匪事變鎮定に從ふや、當時の第五師團長山口素臣、第九旅團長眞鍋斌以下、多くは所謂分捕事件にて其人格を疑はれしに拘はらず、渠に對しては毫も此批難なかりき。要するに渠は文明式の將軍に非ざるも、古武士の風格を有す。

大阪師團の恩人

由來第四師團は近畿の弱兵なるを以て之を統率するの將軍其人を得ざれば其成績の擧がるを期すべからず、故に歴代之に師團長たるものは概ね皆陸軍部内に重きをなすの威望と手腕とを兼備するものに非ざるなく、殊に日清戰爭以後に於て其然るを見る。

歴代の第四師團長

即ち其初代の師團長たる高島鞆之助は薩派の軍政家として一時部内の權勢を握り、二代の師團長黑川通軌は平凡他奇なかりしも、之に次で此職に就き給ひし北白川宮能久親王殿下は聰明英武の資、洵に帝國軍人の師表たり。第四代の師團長山澤靜吾は膽斗の如き豪傑にして、第五代の師團長小川又次は田村怡與造と竝び稱せられし兵家たり。第六代の師團長塚本勝嘉は實戰家として傑出し、第七代の師團長井上光は雋敏、明慧恰かも甕裡にある錐の頴脫せずんば已まざるの概あり。第八代の師團長淺田信興亦其手腕に於て容易に第二流に下るものに非ざるべく、第九代の師團長一戸兵衛は塚本以上の實戰家たり。而して第十代の師團長大迫尙道は深沈寡默にして思慮周密なるのみならず、其器局亦大なるを以て之を帷幄の材として見るも、實戰家として見るも、或は又軍政家として見るも、確かに一頭地を抜くの偉材たり。其日露戰爭に際し、渠が奥軍の參謀長として沙河戰、奉天戰に發揮せる技倆と膽略とは、司令官奥の威容と相待つて、第二軍司令部の雙璧なりしと傳へらる。思ふに陸軍部内に於ける非長閥の重きを擔うて立つものを薩人中に求めば、渠を除きて他に之れ有らざるべし。

大迫尙道

仁田原重行

斯くの如く過去に於ける第四師團長を列擧し來る時は、一黑川を例外とし、皆或意味に於ける部内第一流の人物に非ざるは莫し。然るに現師團長仁田原重行に至りては、其閥歴、信望、手腕共に前任者に及ばざること遠く人をして再び黑川時代に逆戻りせしやの感あら

しむ。蓋し渠は明石元二郎、松石安治、立花小一郎等と鄕關を同うし、而かも同年（明治十六年）に士官學校を卒業せしも、軍政家として明石の辣腕なく、用兵家として松石の雄略を缺き、八面應酬の才に於て遠く立花に及ばず、而して其人格亦特に言ふに足るものなし。加之、其第五師團參謀長時代に沙河戰に失敗せるの經歷を有す。然るに拘はらず渠は是等三人者を抜いて特に異數の昇進を敢てせり。渠も亦一代の幸運兒なる哉。

日清戰後陸軍力の倍加

十一

明治二十七八年の戰役に我軍の威武大に揚りしに拘はらず、戰後三國干涉の事あるや、我國は彼等の偉大なる威力の前に屈服せざるべからざりしを以て我上下は期せずして臥薪嘗膽を叫び、所謂戰後經營なる名目の下に海陸の軍備は大々的に擴張せられたり。卽ち海軍は戰艦一艦隊、裝甲巡洋艦一艦隊を主力とせる新鋭の艦隊を建造して一躍世界第四位の海軍國たる地歩を占め、陸軍は從來近衞を別に六個師團なりしものを倍加して十二個師團となせり。而して此海軍と此陸軍と有りしが爲めに三十七八年戰役は戰はれ、我軍の威名は普く宇内に輝き渡りし也。

日露戰後の擴張

而して日露戰爭は更に我陸軍力を增加せしむるの刺戟劑となり、戰後は戰前に比して六個師團を增し、以て今日の十九個師團の編制を見るに至れり。加之、數年來の懸案たりし所謂增師問題は本年を以て解決せり。知らず我國が此大陸軍を三たび大陸――滿蒙――に用ゆるは果して何れの日ぞ。

第十二師團

閑話休題、日露戰爭に於て最先に出征せしものを第十二師團となす。而して當時の師團長井上光は長谷川好道と共に岩國藩の出身にして、最も能く高杉晉作の風を傳へたりと稱せらる。

井上光

渠長人なるに拘はらず、長閥の先輩に喜ばれざりしことは、寧ろ長谷川以上にして、數々陸軍大臣の候補者に數へられ乍ら、遂に第四師團長を以て終れり。素より渠の軍政上の手腕は寺内に比して及ばざるべきも、之を大島義昌の凡庸に比すれば勿論、之を長谷川に比するも、確かに優秀なるものあるが故に、渠にして今尙ほ在らば長閥の一重鎭たるを失はず。駿爽なる渠の今日在らざるは、長閥の爲め何となく物淋しきの感無きに非ず。

井上の軍備論

渠は必ずしも寺内の如く陸軍萬能論者に非ず。日清戰爭後人の軍備擴張の程度を問ふものあるに答へて曰く、國民の安心する程度にて可也。猶ほ加藤清正は重き鎧を着て安心し、

加藤嘉明は輕き鎧を着て安心したるが如しと、又以て渠が比較的公明の心事を有せしを見るべし。

渠の最も盛名ありしは歩兵第一聯隊長時代にして爾後漸次名聲を減じたるが如し。渠日清戰爭には第二軍參謀長として、日露戰爭には第十二師團長として能く其任を辱めざりしも、特に用兵家として、又戰將として傑出せりと認めらるゝに至らざりし。所詮渠は之を戰時の人として見るよりも、平時に於ける軍隊教育家としての技倆を認むべきが如し。

歩兵第一聯隊長時代

戰後の第十二師團長

柴五郎

戰後、第十二師團長たりしものに淺田信興あり、安東貞美あり、山根武亮あり、藤井茂太あり、以て現師團長柴五郎に至る。內、山根武亮、藤井茂太の二人者は一種の手腕家なるも師團長の適任者に非らず。殊に藤井は帷幄の謀將としての技倆非凡なるも、人格上の批難多く到底師團長として長く其任にあるに堪えざりき。現師團長柴は部內の英國通にして夙に故將軍川上に鑑拔せられ、參謀本部に部長たりしが、川上の歿後稍〻不遇の地位にあり、漸く輓近に至りて師團長の職を贏ち得たり。而かも渠にして北清事變當時、北京籠城の偉動なからしめば、或は既に長閥の手に馘られしやも知るべからず、渠は寥々たる川上殘黨の一人として異彩を放てり。師團長としての力量も亦恐らく中軸以上にあるべし。

第十一師團

土屋光春

伊地知幸介

川上の心事

第十一師團は土屋光春に率ゐられて旅順包圍戰に參加して最も苦戰難鬪し、師團長傷きて交代するに至り、奉天戰には鮫島重雄に率ゐられて鴨綠江軍に屬し、最も難局に當れるを以て、殊勳者の數の多かりしこと歷戰の各師團中に冠たり。

土屋は川上操六に重用せられ、日清戰爭當時は大本營にありて帷幄の樞機に參畫し、頭腦の明晰と、人物の優秀とを以て聞ゆ、而して渠は川上の歿後も尙ほ依然として薩派に屬せしを以て長閥に喜ばれず、爲めに當然大將たるべくして遂に中將を以て現役を了れり。其人物に於て、又其手腕に於て渠に數等を輸する大久保春野が中將の定限年齡滿つるに垂んとして大將に昇進したるに拘らず、渠が特に中將の定限年齡滿つるを待つて豫備大將に編入せられしが如きは、假令如何なる强辯を以てするも、長閥の專橫を藏ふこと能はず。

伊地知幸介は戰後渠に次で第十一師團長に補せられしが何等爲すこと無くして終れり。渠が往年參謀本部第一部長の要職にありて、田村怡與造と相角逐するや、天下其風采を想望せしも、是れ實は渠の相棒たりし伊東主一の偉らかりしにて、伊東歿後の渠は年々窮の剝けたるが如き觀あり。

當時川上の心事を忖度するに恐らく渠と伊東とをして薩派の根柢を參謀本部內に築かし

伊地知の不評

めんとせしなるべし。而かも渠は先輩に期待せらるゝこと徒らに大にして其實力之に伴はざりき。

殊に渠をして部内に不評判ならしめしは、三十七八年の役乃木軍の參謀長として旅順の攻圍を作戰し、計畫齟齬して空しく我大軍を七ヶ月間堅城の下に膠着せしめ、剩さへ死傷數萬ならしめしにあり。

伊地知の失脚

渠は此失敗ありし以來、全く蹉躓して復伸ぶる能はず、其第十一師團長たりしも、其薩人にして元帥大山の姻戚なりしが爲めに然りしのみ、其力量を重んぜられしが故に非ず。從つて渠は他より手腕を揮ふべく期待せられず又實際手腕を揮ふ能はずして其任を去れり。

依田廣太郎

渠に次で第十一師團長たりしものを依田廣太郎と爲す。依田は始め井上光に鑑拔せられ、其師團に聯隊長として、模範聯隊の名聲を博し、爾來漸次其地歩を占むるに至れり。

部内の學者

渠部内の學者を以て許され、一時寺内の活字引を以て目せられしことありき。戸山學校長時代には豪傑として鳴り、黑溝臺には立見師團の旅團長として勇戰せしも、今や當年の意氣無く、全く一個の好々爺と化し了せり。而して其資質の穩健醇良なる、部内傳稱して君子人中の君子人と爲す。又非凡の一材として數ふるに値す。

第九師團

依田の後を襲ひし蠣崎富三郎は、佛國通にして露國通を兼ね、有名なる酒豪にして資性率直、品格亦野卑ならず、多少の稚氣を帶ぶるも團隊長としての手腕、力量に於て不足あるを見ざる也。渠曾て歩兵第二旅團長たりしが、田中義一が增師問題に座して軍務局長の椅子を退かざる可からざるに至るや、其犧牲に供せられて露國大使館附武官に轉じ、以て歐洲戰亂勃發後に及べり。渠は多大の將來を期待す可からざるも、また部内に於ける一方の材たるを失はず。

戰後の第九師團長

旅順攻圍戰に於て第十一師團と艱苦を共にせる第九師團は、師團長大島久直統率の下に勇戰せるが、當時全攻圍軍を通じて最も勇名を轟かせるものを金澤の旅團長一戸兵衛と爲す。一戸が自から陣頭に立ちて一旦敵に奪ひ還されし東鷄冠山北砲臺の西北砲臺を攻撃して確實に之を占領し、啻に敵彙攻撃の據點を得たるのみならず、之によつて我軍の士氣を振起せるの偉動は、實に旅順戰史上の花と言ふべし。

第七師團

戰後第九師團に長たりしものは神尾光臣にして神尾の後を繼ぎしものを現師團長川村宗五郎とす。渠や薩派の一人にして其爲人極めて平凡たゞ無難の師團長として許すべきのみ。

第七師團長は大迫尚敏以來英物揃ひと云ふべく、前々師團長上原勇作と云ひ、前師團長

上原勇作

林太一郎

林の用兵

林の氣骨

林太一郎と云ひ、又現師團長宇都宮太郎と云ひ皆或意味に於て陸軍部内第一流の人物也。

上原は確に師團長以上の人物也。而かも師團長としても決して他に讓るものに非ず。其韜略上の能力と軍政上の手腕とは共に當代得易からざるの材也。渠が增師問題に失脚せしは寧ろ其好漢なることを證明す。

林は徹頭徹尾醇乎たる武人也き、戰將也き。渠生徒時代より非藩閥側を代表して常に藩閥側と爭ひ、言語に次ぐに鐵拳を以てす。而して渠の同期生は渠を目して牛の渾名を與ふ。蓋し渠の軀幹長大豐滿にして物臭きを以て也。

渠の兵を用ゆるや疾きこと風の如く、伎掠すること火の如く、恰かも古不識庵の風あり。渠安東貞美の後任として伏見の旅團長に補せられ奉天戰に參加せるが、我第四師團前面の敵頑强にして、我軍動もすれば敵に壓迫せられんとするの形勢あるや、憤然自から一大隊の兵を提げて陣頭に立ち、進擊又進擊遂に此頑敵を摧破し、尙ほ勢に乘じて且進擊し且摧破し、數〻夜襲を試みて遂に敵をして頽勢を挽回するに暇あらざらしむ。其戰鬪振りの潑剌として目覺ましかりしこと比倫を絕するものありしと云ふ。

渠陸軍大學校出身なるも毫も學閥臭味なきのみならず、天保錢やうの徽章をすら帶びざるこ

林の日蓮讃仰

學都宮太郎

ことあり、また其眼中に長閥無し。渠旅團長たりし當時、一日其師團參謀長にして長閥の寵兒の一人なる飯田左門と論爭し、猛烈に長閥を攻擊す、飯田餘りの事と癪に觸りけん、左程不平ならば宜しく陸軍を退くべしと冷笑するや、渠言下に、將軍に對して何を言ふ、無禮者めと叱咤せしと云ふ。

渠當時の師團長中にありては最も新知識に富み、實戰の技倆に秀で、且經理の頭腦を有する一人なりし。而して渠が始終富貴も淫する能はず武威も屈する能はざる底の眞骨頭を有せしは、思ふに渠の讃仰する祖師日蓮の感化に由らん。好漢惜しむらくは攝養を怠り、昨年を以て館を捐てたり。

現師團長宇都宮太郎は實戰の經驗なく、また隊附の閱歷乏しきも、相當の經綸を有し、對支政策に就ても徹底せる意見――其意見の可否は兎も角――を懷抱せるを以て、其松石と相竝んで參謀本部に蟠居せし當時の如き、人皆其風采を想望せり。而かも松石を失ひたる後の渠は何となく背景の具はらざる感ありしが、遂に出でゝ極北の師團長たるに至れり。渠爲人圓轉滑脫にして恰悧敏、軍人と云ふよりも寧ろ外交官たるの資質をより多く具備す、從つて部内の勢力推移に際しても身を處すること巧妙を極め、往々其節操を疑はるゝ

ものありし。吾人は渠の才を惜しむもの、切に其自重を望まざるを得ず。

十二

第十師團は三十七八年戰役に於て川村景明の指揮下に大孤山に上陸し、析木城、海城を經て遼陽、沙河に戰ひ、其威名常に其友軍たる第五師團を壓するものありき。これ確かに師團長川村の戰將としての技倆が當時の第五師團長上田有澤に比して數等を拔くものありしに由らずんばあらず。

第十師團

川村と安東

既にして川村の鴨綠江軍司令官に榮轉するや、伏見の旅團長として第四師團に重きをなせし安東貞美其任を繼で奉天戰に臨み、能く其威名を失墜せざるを得たり。

安東貞美

安東は依田と共に部内に君子人を以て目せられ、其風采亦典雅遒秀にして雲上人の風ありと稱せらる。渠寺内の士官學校長時代に生徒隊長たりし以來、長閥傍系の人となりしも、猶ほ南部、依田等の德望あるが如く或は寧ろ夫れ以上に衆の敬愛する所となる。たゞ手腕の人を以て之を許すこと能はざるのみ。

戰後の第十師團長

戰後、安東の後を承けて第十師團長たりしものは戰將として傑出せる小泉正保にして、小泉の後を承けしものを兵學の大家たる松川敏胤とし、松川の第十六師團長に轉ずるや、山口勝、重砲兵監より出でゝ之を襲ひ、現に其任にあり。

松川敏胤

前第十師團長松川敏胤は松石逝き、仙波、井口漸く老境に入らんとする今日、殆ど我陸軍戰術界の權威を以て目すべき英物也。渠夙に萬敏の才を以て聞えしも、其實戰に就て手腕を揮ひしは、井口と共に滿洲軍の總司令部に參謀として遼陽、奉天の作戰を計畫せるの時とす。

松川の滿學

渠の兵を用ゆるや、其大膽なる點に於て往々人の意表に出で、部内目するに法螺戰術を以てす。而かも飽まで帷幄に籌を運らすの士にして、三軍を叱咤するの將軍にあらず。渠に對する最も適切なる評語は戰術的才物——俗臭なき學者的才子の二語なるべきに似たり。

松川と大島久直

渠仙臺の產なるを以て幼時岡千仞の門にあり、上京後も亦二松學舍に學びしが故に漢學の造詣頗る深く、滿洲軍の布告の如きも往々渠自から筆を執り、通譯をして顏色なからしめしことあり。

渠始め大島久直に知られ、大島が廣島の聯隊長たりし當時、渠中尉を以て其聯隊に在りしが、大島は自己が部下に對して戰術の講話を爲すよりも、渠をして代つて爲さしむる方

遙かに優れりと爲し、自から率先して渠の講話を聽きしを以て、大隊長以下の各將校は、此年少なる一中尉の戰術講話を聽講せざるを得ざりしと云ふ。

斯くて大島の臺灣總督府に參謀長となるや、渠參謀として之に從ひ、次で大島の陸軍大學校長となるや渠亦大學教官たる等、渠と大島との關係は猶ほ恰かも影の形に追隨するが如きものありしが、後川上に用ゐられ、獨逸に遊學し、歸朝するや伊知地幸介の後を襲ひて參謀本部第一部長の椅子を占め、次で日露戰爭に際會して屠龍搏虎の大手腕を揮ふことを得たり。

松川の骨力

渠幼時より艱苦の間に人と爲りしを以て、其世に處するや極めて圓滑に、容易に其鋒鋩を現はさゞるも、時に其主張を把持して動かざることあり。聞く渠は日露戰後第十五師團を朝鮮より內地に引揚ぐるに極力反對せしを以て、寺內は已むを得ず、渠を南清の演習見物に派遣して後、漸く引揚命令を發するを得たりと。

松川の不評

渠に惜むべきは器局小にして人を容るゝの量に乏しきと其人格の淸雋高邁なる點に於て遠く松石、井口に及ばざること是れ也。渠の第十師團長の任に就きし以來、評判頗る芳ばしからず、部下に怨嗟の聲を絕たざりしと傳ふ。これ或は渠が陸軍大學校にありて學生を教導するが如く管下の團隊長を取扱ひ、之をして其部下の前に面目を失墜せしめしに非ざるなからんや。渠は遂に一個の兵學者にして將軍の器量を有せざるか。

山口勝

現第十師團長山口勝は重砲兵界の權威にして、少壯時より夙に部內の囑望する所となれり。爲人骨鯁にして權勢に阿附せず、大學出に非ずして而かも新智識を有すること之に過ぎ、卓犖不羈、眼識亦超凡、實に得易からざるの材なり。其寺內の陸相時代に砲兵課長たりし時の如き、衆人皆寺內に對して慴伏せしの間にありて、渠獨り毫も屈せず、堂々所信を直言せり。後、少將に昇進し重砲兵旅團長として陸軍省を出づるに際しても、寺內は其送別會の席上に述べて曰く、凡そ陸軍省にありて山口君程自分に叱責せられしもの之れ有らざると同時に、又山口君程自分に稗益を與へしこと多き者を見ずと。以て渠の眞骨頭を見る可き也。渠豐島陽藏に代りて重砲兵監の職に就き、次で第十師團長に轉ぜり。渠の天賦は軍隊の統率者たるよりも寧ろ軍政家たるに適せん。而かも師團長としての手腕亦決して凡庸ならざる可きを信ず。

第八師團
立見尙文
小泉正保

第八師團は立見尙文によつて其光彩を放ちしが、戰後、山根武亮、小泉正保相次で師團長となれり。小泉は實戰家として聞え、日露戰爭には久留米の兵を率ゐて、第六師團長大

大井成元

久保春野と共に各地に轉戰し、奉天戰後一時第三軍參謀長たり。就中、最も渠の實戰家としての技倆を發揮せしは沙河戰に際し、奮戰して兵略上の要地拉木屯を占領せしこと是れ也。當時渠の部下の兵一小隊、群を拔いて挺進す。師團參謀之を危み退却を命ずるや、一隊の兵士皆「背進すべしとは未だ嘗て敎はらず」とて、頑として肯んぜざりしと云ふ。又以て渠が平素の訓練を思ひやらる。而して渠の旅團に代つて第五師團の山田旅團其部署に就くや、忽ち敵の逆襲を受けて敗走せり。玆に於てか渠の名聲彌〻揚る。而して師團長としての渠亦決して立見の後繼者たるの名を辱しむる者に非ざりき。

現に第八師團長たる大井成元は、始め菊太郎と稱す。自から任ずること頗る高く、其輪廓亦やゝ大なり。寺内と合はざるを以て近數年間、陸軍本省若くは參謀本部の要職に就くを得ざれども、其手腕、識見共に長閥中にありては群を拔き、儕輩に重んぜらるゝことは寧ろ岡市之助以上なりと稱せらる。たゞ渠が田中義一の如く世間に聞えざるは、田中の如く華美に活動することを爲さず、又部外に多く接觸せざるの致す所なるべし。其人物の重みのあると、堅實なるとは田中、岡以上なり。思ふに渠は長閥側に於ける未來の參謀總長なるべし。現に渠が井口省吾の後を襲ひて陸軍大學校長の椅子を占めしが如きは、他日其參謀本部に龍蟠するの素地を作すものと解せらるるに非らず。渠其内室の出の賤しきと、倨傲尊大の風あるとを以て兎角の評あれども、之を以て其材幹の非凡なるを蔽ふ可きに非らず、其桂の陸相時代に大臣顔せしと云ふが如きは、猶ほ山本權兵衞伯が西鄕海相時代の主事として大臣顔せしと同樣、寧ろ渠の抱負を見る可き也。要するに渠は長閥中にありて出色の人物也、但し團隊長としては恐らく不適任なる可し。

第十三師團

戰後の第十三師團長

十三

第十三師團は日露戰爭中に編制せられ、原口兼濟の指揮下に北征して樺太を占領す。原口は古き兵學者にして其佐官時代には士官學校の生徒隊長として令名あり。實兵指揮官と云ふよりも寧ろ敎官肌の人と云ふべく、始め寺内系の人なりしも、後之と離れたるらしく、其豐橋の旅團長たりし時、寺内の親戚たる部下の團隊長兒玉恕忠を、大佐の定限年齡未滿内に昇進せしむるの犧牲に供せられて休職を命ぜられしが、日露戰爭ありしがために漸く復活して不十分乍ら、老伏波の勇を試むるを得たり。

原口の後に第十三師團長たりしは岡崎生三にして、岡崎の後を長岡外史承け、長岡の後

を秋山好古承け、秋山の後を安藤嚴水承け、以て今日に及べり。就中人物の點に於て傑出せるは岡崎、秋山の二人者なる可し。

安藤嚴水

安藤嚴水は明治十七年の朝鮮事變に少尉を以て公使竹添進一郎擁護の任に當り、拔群の働きあり、爲めに勳六等を授けられ、俄かに名聲の藉甚たるを致せり。渠爾來少將に至るまで隊附せず、其守正王殿下に御附武官たりし時と、獨逸に留學せし時とを除くの外は、前後二十年間殆ど士官學校に終始せり。常に左肩を揚げて步行し豪傑黨の一人たり。其長く士官學校にありて人事に通曉せるを以て屢〻長閥側の人事局長に擬せられしも、遂に實現せらるゝに至らざりき。渠正直にして好人物なれども、愛憎の念激しきを以て往々嚴正と公平を缺くの虞なしとせず、渠が師團長として最も自警すべきも亦恐らくは此點にあるべし。

第十四師團

第十四師團は奉天戰後に編制成り土屋光春之を率ゐて出征せるが、凱旋後鮫島重雄之が師團長となり、鮫島逝くや上原勇作之を繼ぎ、上原陸軍大臣となるや、山田忠三郎之に代つて今日に及ぶ。

山田忠三郎

山田は何等取立てゝ擧ぐべき長所なき凡庸の材なれども、爲人公平にして且親切なるが故に敵少し、夙に長閥圈內の人にして其今日あるは一に寺內の貧緣に維れ由る。

第十五師團

第十五師團長は中村覺より內山小二郎、井口省吾を經て現任山比光衛に至る。井口、中村の二人者は既に評論せるが故に今又之を贅することを爲さず。內山は日淸戰爭當時第一師團の參謀として山地將軍の帷幄に參し、戰後中佐を以て參謀長に補せられしが、是れ實に若輩後進の一中佐が師團參謀長の職に就きし嚆矢なりき。蓋し從來の師團參謀長は各師團共聯隊長の古參中より各聯隊長を歷するの威望あるものを選びし也。

內山小二郎

渠後川上に知られて露國駐劄武官となり他日發展の素地を作りしが、渠と薩派との間には特に深き關係は之れ有らざるものゝ如し。

終始順境の內山

渠從來嘗て一度も中央部の要職を占めしことなく、又聯隊長たりしこともなし。而かも終始順境に立ちしを以て他に對する同情を缺き、往々部下に親切ならざるやの批難ありしも、師團長としては決して評判惡しき方に非ざりき。

內山の恬人

渠曩きに中村覺の後を繼で十五師團長となり、今や復中村の後を繼で侍從武官長となれり。而して師團長として、又侍從武官長として、中村に比し優ること數等なるは部內の等しく認識する所也。要するに渠は正直にして冷靜の人也。婉曲なる能はず、熱烈なる能は

由比光衛

由比の人物手腕

第十六師團

ず、徹頭徹尾秋霜の氣に滿つ。渠が部外に人望なきは職として是に之れ由る。

由比光衛は、松川敏胤、荒尾精等と同期に士官學校を出で、學生時代には鼻汁垂らしを以て有名なりしが、而かも其稜々たる氣骨は眼中に長閥なく、常に山口人何するものぞと傲語す。北清事變には第五師團參謀として北京救援の功を爲し、三十七八年戰役には始め奥軍の參謀副長として、後第八師團參謀長として、各地に轉戰し作戰上に貢献する所多かりし。其松石の後を襲ひて參謀本部に第一部長たりしが如きも、此戰役に於て奥に其技倆を認められしに由るべし。

渠參謀本部より陸軍大學校に遷り、更に轉じて第十五師團長に遷れり。無愛想を以て部内に聞え、一種珍妙の眼を以て人を睨殺するの癖あるが故に、頗る他の嫌惡を買ふものあるも、其帷幄に參畫するの手腕と、武人としての眞骨頭を有するの點に於ては、優に儕輩を拔けり。思ふに師團長としても容易に人後に落ちざらん。渠の參謀本部にあるや、其第二部長なる宇都宮太郎の外交家的なるに對して、醇乎たる武人の面目を發揮し、兩々相對して好箇の對照を爲せり。

初代の第十六師團長山中信儀は無能なれば評に及ばず、二代の師團長長岡亦師團長の器に非ず。渠嘗て第十三師團長たりし時、特命檢閲使長谷川好道の檢閲を受く、成績最劣等也、然るに檢閲使隨從員の首席たりし大庭二郎、閥擁護の關係上、其成績報告に筆を加へしより、最劣等の師團は忽ち一躍して最優等の師團となりしと傳ふ。

長岡の眞價

渠の戰術眼に乏しきは平壤の役明かに之を證明するのみならず、輓近に於ても、明治四十年の栃木縣下の大演習には歩兵第二旅團長として東軍に屬し、騎兵の一小部隊に牽制せられて戰機を失し、又昨年埼玉縣下に行はれし大演習に於ても其師團の成績頗る芳ばしからざりき。要するに渠は武將に非ず、又用兵家に非ず、其御馳走政略に巧みなると、談論風發の概あると共に絶好の政黨操縱係たる資格を具備するものと云ふべき也。渠若し他日長閥より排斥せらるゝが如きことあらば、或は俄然民黨側に寝返り打つこと無しと言ふべからず。所謂油斷のならぬ人物とは渠の謂也。

長岡の利殖

渠卑吝にして貨殖に巧に、日清戰爭に於て第一軍兵站監參謀長たる地位を利用してや、金錢を蓄積するを得たるを始めとし、爾來益々家富を增殖しつゝありと傳ふ。

堂々たる青山邸

堂々たる渠の青山の邸宅の如きも、渠が第一師團の參謀時代に建設せしものにして、當時渠は師團經理部長を說きて御用商人より僅々四五百圓を以て屋敷を買ひ入れ、軍務局長

時代に增築せしもの、これ現今の邸宅なりと云ふ。

要するに渠は全く武人たるの資格を缺く、其の久しく生命を保ちしは長閥の一人なると、山縣の推輓に出るのみ。師團長としては最劣等の一人也き。現師團長松川敏胤は其人物力量長岡の比に非ざるも要するに帷幄の謀士にして軍隊の統帥者に非ず。

第十七、第十八の兩師團

第十七、第十八の兩師團は所謂二十五師團計畫中の一部に屬し、明治四十年を以て創設せらる、當時陸軍側は四個師團を增設するの計畫なりしも急激の擴張に過ぐとの攻擊を避けんが爲めに二年歸休兵制度を採用するを條件として二個師團の擴張に止めたるものこれ卽ち第十七、第十八の兩師團也。

第十七師團長

第十七師團長は一戸兵衛に次ぐに仙波太郎を以てし、仙波の後に本鄕房太郎を以てし、模型こそ異なれ、共に陸軍部內の俊秀揃ひなれども第十八師團長に至りては玉石混交の觀あり。卽ち初代の師團長木村有恒は凡庸の士なるのみ。反之、二代の師團長たりし大迫尙道は其識量の超凡なる部內に定評あり。三代の師團長たりし神尾光臣は靑島攻圍戰に大に其名聲を揚げたれども、要するに淸國通にして軍人中やゝ常識に富める一人なるのみ。四代の師團長として其任に殁せし齋藤力三郎は、一種の才物なれども、手腕よりも寧ろ辯口の人なる可く、現師團長柴勝三郎は其人物、力量、才識共に師團長中の一異彩たり。

斯く概觀し來る時は、現時の十九師團長中、二三の例外を除き、概ね皆其人を得たるに庶幾し、我陸軍のために慶す可き也。

第四　參謀本部の變遷及人物

一

參謀本部

我參謀本部が現在の如く完備せる組織となりしは、明治二十二年三月故有栖川宮熾仁親王殿下が總長に任ぜられ、故川上操六將軍が少將を以て其次長に補せられし以後のことに屬す。

第六局

然れども陸軍省に對立して、大元帥陛下に直屬する參謀本部なるものを設けられしは明治十一年十二月にして、更に溯りて其濫觴を求むる時は、明治六年六月に既に陸軍省内に第六局なるものありて、專ら兵站事務を管掌せり。而して當時の第六局長は少將鳥尾小彌太なりき。

參謀局

明治七年二月第六局は廢局となりて參謀局なるもの新設せられ陸軍中將山縣有朋之が局長となり、九年三月まで其職にありしが、此時より鳥尾復山縣に代つて局長となり、十一年十二月參謀局の廢せられて參謀本部の設立せらるゝまで勤續せり。

參謀局時代にありて我陸軍史に特筆すべき事變は明治七年の征臺の役及び明治十年の西南の役にして、征臺の役當時の出師準備、竝に兵站事務等の衝に當りしものは參謀局長山縣を始め、局員曾我祐準、野津道貫、滋野清彦、桂太郎等なりき。

征臺の役

十年役

鳥尾參謀局長

十年役には鳥尾參謀局長大阪にありて行在所陸軍事務取扱長官なる職名を以て專ら後方勤務を鞅掌し、快刀亂麻を絕つの手腕を以て能く其任を盡せり。

山縣の戰略

始め西南の變報達するや、山縣陸軍卿、龍駕に扈して京都にあり、戰略の大綱を按じて謂らく、南隅一たび動かば九州は勿論、南海、山陽、山陰、東海、東山、北陸、竝に關八州の現政府に平かならざるもの所在響應するの虞れあり、而して賊の策戰は要するに汽船に乘じて東京或は大阪に突入するか、長崎及熊本を襲擊し全九州を破りて中原に出づるか、或は又鹿兒島に割據し、全國の動搖を窺ひ時機に投じて中原を破るか、恐らく此三策の外に出でざるべし。故に我の之に應ずるの策は力を一に集めて敵の策源地たる鹿兒島に向ひ、之を覆して然る後、更に他の鎭定に從ふべし。而して敵の動靜に應じ我軍の進退分合を神速自在にするには我軍の根據を海陸交通の要衝に當る大阪に置き以て全局を統轄するの外

十年役の四殊勳者

あらずと。當時鳥尾局長が大阪にありて兵站事務を總監せしは、職として山縣の此戰略意見に基くの。

思ふに十年役の殊勳者を以て目すべきもの凡そ四人あり。曰く戰略の大體を策定し、自から征討軍を統督せる山縣有朋。曰く熊本城を嬰守して敵の大兵を沮止せし谷干城。曰く敵の側背を衝きて熊本城救援の途を開くと共に賊勢を壓迫するの建言を爲せし高島鞆之助。曰く大阪にありて全局を統轄し且兵站を總監せし鳥尾小彌太是れ也。

鳥尾の陸軍改革運動

島尾は後、三浦、谷、曾我等の諸將軍と陸軍改革を呼號し、其容れられざるや共に軍職を擲ち去り久しく樞密院に隱れ、又禪に隱れしが、日露戰爭に際しては憂國の至誠禁ずる能はざりしと見え、神武必勝策なるものを稿して當局に建言せり。其要に曰く、今彼我の戰勢を按ずるに、我れにありては徒らに戰局を擴大するは、空しく兵力を損じ、國力を費消して敵の爲めに其疲弊に乘ぜらるゝの虞れあり、寧ろ如かんや朝鮮平安道なる定州附近の要地に據りて以て持久の策を講ぜんには、敵は懸軍萬里の大兵なれば速戰に利あり、曠日彌久は其最も忌む所、故に我は我勢力を蘊蓄して徐ろに敵の動靜を窺ひ、機に臨み變に應じて敵をして奔命に疲れしむるの策に出で、以て其疲弊に乘ずるに於ては大事成るべきも也と。其意見の當否如何は兎も角、若眼の凡ならざるを取るべし。

鳥尾の爲人

渠爲人奇峭峻銳にして辯論に雄に、又禪を修して其堂奥に入る。聞く故公伊藤の智才と辯論とを以てするも、渠と正々堂々の舌戰を爲すには常に難色あり、爲めに辭窮するに當つては渠の通ぜざる外國語を其議論中に交へて其機鋒を避くるの外なかりしと云ふ。

鳥尾の頭腦

渠は其頭腦極めて明敏なるを以て、常人の以て難解とする所も、渠にありては平易の事たるに過ぎず、之を以て其禪に入るに際しても、三浦梧樓が平坦の初學より入りしに反し渠は維摩經、金剛經等、緇衣の徒も以て難しとするの險路より入りしと傳ふ。要するに渠は其人物の奇峭なるの點に於て其頭腦の明敏なる點に於て、將又其辯論に雄なるの點に於て故伯陸奥宗光に似、而かも陸奥の西洋的色彩を帶ぶるに對して渠は純東洋的の風格を有せり。

桂太郎の建議

二

我陸軍は十年役の實驗を經て、制度改革の必要を感じ、又高等兵學を修むるの忽諸に附すべからざることを覺る。偶〻桂太郎、獨逸より歸朝し、參謀本部創設の議と、參謀將校

養成の意見とを具申す。茲に於てか、明治十一年十二月の陸軍省參謀局の廢局、參謀本部の設立となり、次でメツケルの招聘、陸軍大學校の創設となる。

參謀本部長山縣

最初の參謀本部長は前陸軍卿山縣有朋なりしを以て、當時の參謀本部の威力も亦比較的強大なるものありしが、其規模は尙ほ狹小にして、僅かに關東、關西の二局ありて、地理的に我國を二分し、職として地形、道路、運輸交通の關係を踏査講究せるに過ぎず。而して當時の局長は堀江芳介、岡澤精の二人なりしが、岡澤の出で、近衞の參謀長となるや、桂太郎其後を襲へり。

地理調査の必要

今日にありては內國の地形、道路、運輸交通關係等は殆ど問題とならざるまでに極めて精密且完全に調査し盡されあれども、當時にありては維新後日尙ほ淺く、封建の餘勢は尙ほ未だ全く打破せられざりしを以て東北の者は西南の地理に通ぜず、西南の者は又東北の地理を知らず、爲めに一朝有事の日に於ける軍事行動は暗中摸索の歎あるを免れざりき。

東北地方の警戒

現に十年役當時の如きも、當局は西南の亂に應じて東北亦起つべきを慮り、田原阪方面の戰鬪激烈を極めし時と雖も尙ほ東京に東伏見宮嘉彰親王(後の小松宮殿下)井田讓、曾我祐準の三少將を始め、大沼涉、岡澤精、阿武素行等の各佐官あり、以て東北地方を警戒せしが是等の諸人は皆西南地方の出身者にして一人として東北の地理に通ぜるものなかりしを以て頗る窘窮し、漸く街道の狀況に精しと稱する一馬子を得て、不完全なる地圖により其說明を聽取して甘心せしの狀況なりしと云ふ。

陸地測量部の觀

事情既に斯くの如くなりしを以て、戰後に設置せられし參謀本部が殆ど陸地測量部なるかの如き觀ありしは毫も訝しむを須ゐず。而かも或點に於ては寧ろ現時の參謀本部よりも權勢を有し、人員の配置任免權の如きは其掌裡にありしが故に、この爲めに數々陸軍省と衝突する等のこともありしと聞く。

參謀本部の組織變更

山縣は參謀本部長を勤むること三年二ヶ月の後、明治十五年二月を以て其職を大山に讓りしが十七年二月を以て再び入つて本部長となり十八年八月に至る。而して其後を襲ひ給ひしは有栖川宮熾仁親王殿下なりしが此時一時參謀本部に海軍々事部を合し、前海軍々事部長仁禮景範を以て參謀本部次長に任じ、幾許もなく更に之を海軍部長に任ぜるが、陸海の均衡其他の問題に就て內部に混亂を生じ、其調和頗る困難なりしを以て廿二年三月、遂に其組織を變改して參謀本部と海軍々令部とを各特立せしめ、海軍々令部長は戰時にありてのみ參謀總長の管下に置かるゝことゝなりしが、卅六年々末日露の風雲急なるに際して

戰時大本營條例の改正あり、從來參謀總長の下位にありし海軍々令部長は戰時にありても亦參謀總長に特立して大元帥陛下に直隷するの地歩を占むるに至れり。

三

參謀本部の七變遷

川上操六時代

明治二十二年以後の參謀本部は、其中心人物の變動と共に大體之を七期に區別するを得べし。曰く川上操六時代、曰く田村怡與造時代、曰く松石安治時代、曰く無中心人物時代、曰く明石元二郎時代、曰く田中義一時代。

明治二十二年三月、川上操六が熾仁親王殿下を總長に奉じて參謀本部に入り、其實權を自己の掌裡に收むるや、勉めて人材を吸集し、且少壯有爲の將校及び民間の志士を派して支那の各地を踏査せしめ、只管來るべき極東爭覇戰の準備を爲し、日清戰爭の前年たる明治二十六年三月より同六月にかけては自から朝鮮より南滿の要地を經て、山海關より天津、北京に入り、更に上海に出で、歸朝せり。聞く當時川上は鴨綠江を小船に乘りて精密に視察し、大孤山に上陸して陸路奉天に至り、營口に出で、北支那本部に入りしと、渠の着眼と計畫と以て略ほ推察すべき也。果せる哉渠の此の旅行の效果は廿七八年戰役の作戰計畫に現はれたり。即ち此戰役に於て我軍は先づ朝鮮より遼東に入り、次で大連、旅順を席捲して北進營口に至り、遂に征清大總督府を旅順に進め、山海關より上陸して直隷の野に彼我主力の大決戰を試むべく計畫せられたり。幸か不幸か渠の此作戰計畫は其最重大なる最後の直隷平野に於ける決戰の一齣を實行するに至らずして李鴻章の來朝となり媾和となりて已みしと雖も、渠が傑出せる川兵家なることは此戰役に於て遺憾なく證據立てられたり。

日清戰役と川上

日清戰役は他の何人に對するよりも實に川上に對する試金石なりき。而して渠は美事に之に及第せり。玆に於てか從前は渠が參謀本部の實權を握りて、隱然陸軍部内の重心たる地歩を占むるに對して平らかならざりし者と雖も、遂に參謀本部の重きを擔ふて起つものは渠の外なきことを認めざるを得ざるに至れり。從つて日清戰役後の渠は啻に參謀本部の實權を掌握せるに止まらずして、其威望と名譽とを竝有し、從前に比すれば一層容易に其抱負を伸ぶるを得るに至れり。

川上の情報蒐集

渠は諸外國、殊に極東方面に關する精確なる情報を豐富に且迅速に得るの點に於て時の外務大臣以上なりしと稱せらる。從つて渠の意見は單り陸軍部内のみならず、當時の内閣と雖も之を傾聽せざるを得ざりし也。

川上の對露準備

渠は日清の戰役終るや否や直ちに對露準備に着手し、鋭意露西亞の研究に努め、殆ど全力を之に注ぎしかば、渠の晩年時代の參謀本部は露西亞通の淵叢なりしと稱せらる。伊地知幸介、萩野末吉の徒が露國駐在を命ぜられしも此時也。又渠が中野二郎の經營する露清語學校に補助を與へて、其出身者をして寫眞隊なるものを編制して北滿、沿海州より西比利亞の奥深く入り込ましめしも此時也。自から青木宣純、古海嚴潮、久松定謨等を隨へて浦鹽よりハバロフカを經てブラゴエチエンスク附近まで游歷せしも此時也。而かも渠の對露準備は未だ中道にだも達せずして身先づ死す、眞に千載の恨事なりと言はざるべからず。

川上の死に基く損害

思ふに渠をして若し在らしめば、三十七八年の戰役は斯くまでに慘憺たる力相撲に我兵力を疲弊せしむることなくして更に妙味ある戰績を擧げ得たるならん。惜しい哉渠の後を繼ぎしものに渠の組織的頭腦と系統的計畫と無かりしかば渠の配置せる情報機關は其儘に存し乍ら、悉く斷片的のものとなり了り、之を連絡貫通せる生命を缺くに至れり。渠の遺業茲に於てか殆ど根本的に崩壞す。而して旅順の難戰、西比利亞鐵道の輸送力の誤算等悉く之に原因せざるもの無きを思へば、我國が渠の死に由て蒙りし有形及び無形の損害殆ど測り知るべからざるものありし也。

川上の支那經略

渠の志のある所は素より支那の經略にあり。渠が對露の準備に鋭意せしも實に露を押へて支那を料理せんが爲めなりき。此故に渠は一日も支那に對する着目を懈らず、日清戰爭の終りし翌年には早くも伊地知幸介、村田惇等を從へて安南方面を游歷せり。之を明治三十年に於ける東部西比利亞旅行と相對照す、渠の對支那策の規模の如何に雄大にして且周匠なりしかを想見するに足るべき也。

川上門下の四天王

四

田村怡與造、福島安正、伊地知幸介、大生定孝は川上門下の四天王と稱せらる。而かも是等四人者中、眞に渠の箕裘を襲ぐに足るの力量を有せしは田村一人に止まり、他は要するに凡庸の徒也。

大生定孝

大生は渠の腰巾着にして渠の晩年參謀本部總務部長の椅子に就き、渠の作爲する所、一切干與せざるなかりしも、其人物は見るに足らず、且長閥に睨まるゝこと最も甚しかりしを以て渠の逝くや否や先づ第一に參謀本部より放逐せられたり。而して時人殆ど之を惜しむものあらざりき。

福島安正

福島は爲人權勢の所在に隨從するを以てこれ事とし、主義定見の何等見るべきもの無し。而して戰術戰略の如きは其能く解する所に非ざる也。然るに渠が長く參謀本部の要職を占めし所以のもの、要するに其旅行家にして且語學者なると、其優柔なる性格は猶ほ恰かも護謨の如く、物と物との中間に介在して一種調和緩衝の用を爲すを以ての故なるのみ。渠は田村が寺内に對して常に對等の地歩を占めたるに比すれば權威なきこと甚しく、寺内に一喝せられて恐縮するの外なき狀態なりき。川上以來參謀本部が占め來りし特別優越の地歩を失墜せしは蓋し渠の次長となりし以後のことに屬す。たゞ渠に取る可きは對外硬なるにあり。是れ蓋し渠が親しく歐人の治下にある亞細亞の諸邦を巡遊し、歐人の不遜暴慢なる態度を憤るの深きによるものなるべし。渠より語學、地理の才と、此對外硬の態度とを除けば、渠の人物は零に近し。渠は軍人と云ふよりも寧ろ外交官たるの資質に富みたりと云ふべし。

伊地知幸介

伊地知は福島に比すれば或は多少の骨力を有せしならんも、之を孰れの點より見るも特に傑出せるものある無く、戰術家としても、亦軍政家としても到底常人の範疇を脱せず、且特に勉強心に富めりと云ふにも非ざりき。加之、居常默然として自己の意志のある所を明白に表現せず且氣難かしかりしを以て、部下は其命ぜられたる事務を如何に處理すべきやに就て往々當惑することもありしと傳ふ。要するに渠は敢て天分高しと云ふに非ず、又努力の人にも非ざりしが故に、上に川上の如き大人格の人あれば兎も角、單に自家の手腕のみを以てしては、到底參謀本部の重きを擔ふて起つの資質を有するの士に非ざる也。

英材田村

川上門下の四天王中の三人者が斯くの如く悉く凡庸の徒なるの間にありて單り田村怡與造のみは、超群の英材なりき。渠曾に帷幄の材として傑出せるのみならず、實兵指揮者としても亦能く部下の信頼を博せり。

田村の部下庇護

渠日清戰役に際し、第一軍參謀副長として出征せしが、軍參謀長小川又次と衝突して内地に歸還し、大津聯隊長に補せらる。時に部下の中隊長に松浦某なる渠の同期生あり、渠軍隊にありては部下として松浦を叱咤することあるも、隊務を終へて家に歸るや、全然友人關係に復し、互に横臥の儘之と談笑し、上官と部下との關係の如きは全然之を忘れたるが如くなりしと云ふ。

斯くて明治廿八年四月に至り渠の所屬せる第四師團も亦出征を命ぜられて廣島に集中せるが、其渡清すべき前日に際し當時の第七旅團長大久保春野は渠の聯隊副官たる南部頼清

田村の周到

田村の慇懃強情

（南部辰丙の兄）に命を傳へ渠をして明朝十時に旅團司令部に來らしむ。南部副官由來時間の觀念に乏しき人なりしかば其命令を渠に傳達することを失念し、所命の時刻に至りて漸く昨日の命令を思ひ出し之を渠に告ぐ、渠之を聞くや否や直ちに馬を走らせて旅團司令部に至れば既に定刻に遲るゝこと一時間なり。大久保大に怒りて之を叱責す。渠徐ろに答へて曰く、敢て罪を謝す、本日は折惡しく小官所持の時計遲れ居りしがために時刻を誤れり、請ふ之を恕せよと、斯くて要談を終へて歸隊せし後始めて嚴に南部を訓戒して已む。

既にして第四師團は繼子窩に上陸し、海城に向て前進せしが、道路險惡なりし爲め隊列を維持して行進する能はず、殆ど一列となりて進む。渠馬を路傍に立てゝ、各隊の行進を監視し、終つて馬を驅つて進むに、前面に落伍せる四五人の卒あり。渠其姓名と所屬隊とを問ひ、自から之を率ゐて後より宿營地に至り、落伍者を出せる大隊長を呼びて其部下の全員揃へりや否やを問ふ、大隊長答ふるに全員揃へる旨を以てす。渠卽ち其四五の卒を呼び來らしめ、大に其部下を掌握せざることを叱責す。

次で渠の聯隊の海城附近に滯在するや、一夜馬賊襲來の警報あり、渠直ちに諸隊に警急集合を傳令す。然るにや、遠隔にある某中隊、時を過ごすも尙ほ來らず、渠もどかしさに

中隊は中隊長準ゆべし

嚴格と慈愛

堪えずして馬に鞭つて自から至り見れば、隊員の約半數集合せるのみ。渠其中隊長に問ふに何故に速かに集合地に來らざるやを以てす、中隊長曰く全員の集合を待ち居りしなりと、渠大に叱して曰く、時を費やして全員來るも何の用をかなさん、警急集合に際しては集まりし人員の多少に拘はらず急速に驅けつくるを要す、危急の際悠々として全員の集合を待つの馬鹿者何處に在ると。叱咤し終りて急遽再び馬に乘つて驅け歸らんとして誤まつて落馬す、一曹長あり渠を扶け起して馬に乘らしむ、渠其助力を怒つて軍刀を以て毆る。蓋し渠の負嫌ひなる他に助けられて馬に乘るを以て非常の侮辱なるかの如く感ぜしなり。

何れの聯隊にても普通の事なるが、中隊の營門を出づるに際し中隊の行く所餘り遠距離ならざるに際しては中隊長自から之を率ゆること稀にして、多くは小隊長たる中少尉若くは特務曹長等をして率ゐしむ。然るに渠聯隊長の任に就くや、縱令門外一歩の地に出づるも中隊を編制する以上必ず中隊長をして之を率ゐしむ。曰く軍隊の編制に中隊長あるは中隊を率ゐしめんがため也、小隊長にして中隊を率ゐ得べくんば中隊長を要せずと。

渠は一面に於て部下に臨むに頗る嚴格なりしも、之を愛することも亦深く、渠が聯隊長となりし當時までは其聯隊も亦他聯隊と同樣從六位大尉（故參大尉）を以て半數以上を充た

されしが渠の一たび聯隊長となるや、悉く少佐に昇進して他に榮轉せりと云ふ。加之、渠は假令取るべきの技能なきものと雖も用ゐ得らるゝだけは之を用ゐ、決して之を棄て去るが如きことをなさず、且部下の失策は自己の責任として上官に取り做すが故に衆喜んで渠の用をなす。渠が參謀本部にありて隆々の權勢を有せしは一は渠の手腕の超群なるに歸すべきも、一は其包攬の量大に、よく部下を統御せしに由らん。

對上、對下

曾て渠の參謀本部第一部長たりし時、野外要務令改正の事あり、渠部員草生政恒外一人をして其校正に當らしむ、草生新參なるを以て其半ばを校正せしに止まり、他の一半を故參の一部員を委す、然るに愈〻之を上奏して御裁可を仰ぐべき日に至りて見れば誤字脫字多くして殆ど體を成さず、渠大に草生等を叱せしも、而かも上官に對しては之を以て自己の監督の不行屆の責に歸し、一言部下に及ばず、自から朱書訂正して漸く御裁可を經たることもありしと云ふ。

職務に熱して時間を忘る

渠の職務に熱心なるや實に驚くべきものあり。同じく參謀本部第一部長たりし時、京都附近より和歌山地方にかけて參謀旅行を試みしことあり。一夜伏見の客舍に於て專修員を集め、續々問題を課して十二時を過ぐるも尙ほ停止する所を知らず、衆皆如何になる事にやと思ひ惑ふ。渠依然問題を續出しつゝありしが、やゝ暫くして漸く氣付きしと見え、補助員に對して幾時なるやを問ふ。補助員答ふるに既に午前二時なるを以てす。渠愕然として卽ち已む。蓋し其作業に熱中するの餘り時間の經過するを忘れし也。

田村の寺內排斥

渠川上殁後の參謀本部を背負つて立つの概あり、寺內正毅の來つて次長の椅子に就き、盛んに川上の殘黨を征伐して長閥の勢力扶植を試むるや、渠卽ち福島、伊地知の徒と共に之が排斥に勉め、遂に其目的を達して寺內を陸軍省に追ひ、渠自身參謀本部次長の椅子を占有す。而かも渠は自己の繩張內なる參謀本部を荒らされたればこそ寺內を排斥したれ、既に之を參謀本部外に放逐せし以上は敢て追窮することをなさず、軍政の方面は寺內に任せ、自己は專ら軍令權を掌握するを以て甘んぜり。加之、爾後渠と寺內とは互に相提携補翼して進むの態度を取りしを以て世人往々晩年の渠を以て山縣の勢力圈內に入れりと爲す。

田村の參謀本部

然れども渠が參謀本部に龍蟠するや、能く時を測り、勢に順ふて自家の經綸を行はんと欲したるものにして、斷じて山縣の手足たるに甘心せしに非ず、蓋し渠の人物、力量、才識は川上以後の第一人にして、老山縣の藥籠中の者たるには其器局餘りに大に、其識見儕

りに高ければ也。惜しい哉渠滿洲問題の喧しかりし明治三十六年の夏を以て溘然雄圖を齎らして逝く、吾人は今尙ほ日露戰史を繙く毎に、假令川上にして亡くとも、渠にして若し在りしならばとの感慨に堪えざるなり。

東條英敎

五

東條英敎は川上時代の參謀本部第四部長にして專ら戰史の編纂を擔當し、兵學の素養深きも、中尉時代より隊附せざりしを以て單に學問上の戰術家たるに止まる。之を以て其參謀本部を追はれて姉路の旅團長となり、三十七八年戰役に出征するや、部下を統御するの方法其宜しきを得ず、爲めに戰地にあつての評判は頗る芳ばしからざるものありき。それかあらぬか渠中途にして歸還を命ぜらるゝに至れり。

陸軍大學出身者の通弊

部下を統御するに拙なるは獨り一東條に止まらず、陸軍大學校出身の參謀官連は概ね皆然るものあり。卽ち渠等は軍隊を動かすには單に一遍の命令を以て足るものと爲し、雄圖を爲せし古英雄の人心收攬術の如きは殆ど之を研究せんとするものすら無し。之を以て帷幄にありては好成績を擧げ得るものも、一旦隊附となるに於ては頗る不評判なるを免れず、此點は動もすれば單に理論にのみ走らんとする陸軍大學出身者の大に猛省を要する所なるべし。

臨客にして健筆

東條は其論客たるの點に於て、且其健筆なる點に於て、陸軍部內に殆ど匹儔を見ず、且現役を退くの後も常に泰西新刊の戰術書を繙き、日進の知識を吸收するを怠らず、其研究の結果は積んで我國稀有の良戰術書たる「戰術麁の塵」と爲りて現はる。

川上閣下

渠川上を崇拜すること深く、一にも二にも川上閣下を口にす。渠が參謀本部を放逐せらるゝ也、實に川上閣下の意思を云爲して、日淸戰史編纂の事業を縮少するを肯んぜざりしに由る。

東條の議論好き

渠又論戰を好み、往々民間の論客を對手に國防論を戰はせしことあり。而して其說く所、往々陸軍に偏して國防の眞諦を外るゝことあるも、流石に第一流の兵學家の所論だけありて傾聽すべきもの少からず現に一昨年夏より一昨春にかけて民間の國防論客西本國之輔、葛生東介、川島淸治郎の諸氏を對手になせる論戰の如きは頗る有益且有趣味のものなりき。吾人は我軍事論壇の爲めに陸軍論者の雄たる中將を失へることを深く遺憾とせざる能はず。

東條の敵

東條の敵は寺内なりき。渠は寺内によつて參謀本部を追はれ、又寺内によつて現役より葬られたり。素より渠が現役より葬られしは駐韓軍司令官當時の長谷川好道と衝突せしことも確かに其一原因をなせども、渠にして寺内に睨まるゝことなくば尚ほ其命脈は長かるべかりし也。而して吾人の見る所を以てすれば、渠と寺内と、其人物の模型何となく相似たるものあるも一奇ならずや、而かも其互に相容れざる猶ほ恰かもこれ同性の電氣の相反撥するが如きものあつて然るか。

寺内對田村

寺内は陸軍大臣としては成功せるも參謀本部次長としては終始惡評の下に葬り去られたり。これ當時の參謀本部が英物揃ひにして寺内の區處を受くるを屑しとせざりしに由らん。而かも一田村怡與造の歿するや、之を繼ぐべき名望と手腕とを兼有するもの之れ有らざりしに徴する時は、眞に寺内と太刀打するの力量ありし者は田村のみにして、他は悉く寺内以下の輩なりしと察せらる。

六

小川又次

川上が晩年まで自己の股肱として信賴せしは大生、伊地知、田村、福島の四人なれども、明治二十二三年の交に於て其樞機に參し、參謀本部の智囊たるの地歩を占めしものを小川又次と爲す。

小川の人物

小川は當時局長として參謀本部にありしが、其組織的の頭腦を有し、經綸の才に富み、且立論の堂々たる點に於て嶄然頭角を抜き、流石のメツケルも渠に對しては一目を置きし程なれば、其川上の信任を得て縱横の手腕を振ふや、部内殆ど之に抗し得るもの無し。

高島信茂

聞く當時の參謀本部の各局長及び各師團の參謀長を通じて渠と太刀打するの力量を有せしものはたゞ一の高島信茂あるのみなるも、高島は三浦梧樓系の人なりしを以て、三浦の學習院長たるや延かれて學習院に轉ぜしを以て、爾後我參謀本部は或意味に於て、殆ど小川の一人舞臺たるの觀ありしと云ふ。

小川の對清經營

殊に渠の爲めに特筆大書すべきは、所謂川上の對清經營なるものが、川上一箇の見に出づるに非ずして、實に渠の方寸裡に畫策せらるゝもの多かり、しこと是れ也。此故に當時年少氣鋭の將校にして支那に志を有するもの往々川上を訪ひ、痛烈の論鋒を以て參謀本部の不活動を辯難攻擊するや、川上は之を渠に差向けて說法せしむるを常とせり。而して渠の智と辯とは以て優に是等年少卓見の士と議論を上下するに足りしなり。

小川の辯

渠と川上との關係既に斯の如く、其材幹の超群なること亦斯の如きものありしが故に、若し順當に經過せば川上が參謀總長に歷任せし時は卽ち渠が其下に當然次長の椅子を占むべかりし也。而かも此事の遂に實現せざりし所以のものは、思ふに渠が餘りに辯論を好みて他と衝突すること多かりしと、金錢關係に汚なくして其人格を疑はれしに職由するなるべし。

渠三十七八年戰役に於て南山役に兵家たるの技倆を發揮せし以外、晩年頗る振はざりしも、當年の小川又次は實に部内の翹楚たりし也。我參謀本部史を畫くものは必ず渠の名を逸すべからず。

伊東主一

川上時代の參謀本部にありて小川以後に異彩を放ちしものを伊東主一となす。伊東は薩人にして、林太一郎、岡市之助、根津一等と同年に士官學校を卒業し、明治二十二三年の頃既に露西亞に駐在して、夙に露西亞通を以て著はる。之を同じく薩摩出身の伊地知幸介、上原勇作、大迫尙道等に比すれば最も後輩なるも、而かも其人物、材幹は第一に推すべく、從つて薩の先輩より期待せられしことも亦濟輩中に冠たりしもの、如し。

伊東の死と參謀本部の

殊に渠に取るべきは上原の如く才の人たるにあらずして寧ろ意の人たるにあり。其人物の堅確にして而かも包擁の量大に、能く他を薰化するの德望を有する點に於ては當時の參謀本部に於ける青年將校中の第一流に推すべかりき。渠は啻に一家の見を立つるに於て、敢て人後に落ちざりしのみならず、之を實行するの勇氣——自信敢爲の氣ある點に於ても亦群を拔くものあり。實に薩人中稀に見るの偉材なりしが、惜しむべし日清戰後幾許もなく少佐を以て夭折せり。思ふに天若し渠に假すに齡を以てせば、假令川上亡きも、尙ほ參謀本部は容易に田村の掌裡に歸せざりしなるべく、又恐らくは長閥の跋扈を許さゞりしなるべし。噫眇たる一少佐の生死、何ぞ我陸軍の權勢推移に影響することの大なるや。渠も亦人傑なる哉。

權勢推移

荒尾精

七

日清戰爭の前後川上の東亞經綸を助けて支那大陸に活動せしものに荒尾精、根津一、小山秋作等あり。就中其人物の最も傑出して英雄の資質に富みしものを荒尾と爲す。

荒尾は松川敏胤、由比光衞等と同期生にして、其士官學校を卒業せしは、根津に後るゝこと一年なりしも、其支那經營に著手せし點に於ては之に一歩を先んじ、從つて隱然當年

荒尾時代の士官學校

靖獻派

の支那在留志士の牛耳を執るの地歩を占めたり。

荒尾時代の士官學校は極端なる詰込主義の教育方針を採りしを以て、學生の苦惱殆ど局外者の想像外にあり。或は深夜戸棚に入りて竊かに蠟燭を點じて讀書するあり、或は寢臺の下に隱れ、上より毛布を蔽ひて火光の漏るゝを防ぎつゝ勉學するあり、或は睡魔を防ぐ爲めに強く鉢巻するあり、生茶を嚙むあり、制服靴穿きの儘假睡し、眠覺るや直ちに書を手にするが如きは尋常茶飯事たり、甚しきは線香の火を以て書を讀み、便所の火光を便りに其周圍に集まるもの五人乃至十人の群を爲すに至る。此故に學生中横著なるものは假病を使ひて練兵を休み、病院に入りて、終夜明晃々たる火光の下に勉學して、試驗の準備をなす等の陋策を講じ、意思薄弱なるものは苦痛に堪えずして自殺するあり、逃走するあり。遂に校長滋野清彦をして、學生の自殺逃亡は一種の傳染病なるが故に嚴密に注意すべしとの訓示を各教官に對して發せしむるに至る。

斯くの如く諸生の苦心慘澹たる裡にありて獨り荒尾は悠然として傳習錄を講じ、其學課の如きも、自己の將來の活動に必要なるものと否とを鑑別して、點取りの爲めに無用の精力を費消するの愚を爲さず、常に綽々たる餘裕を存し、志を同じうするもの二十餘人と結

荒尾等の渡清

犧牲となりし國士

んで互に相砥礪し、氣節を負ふて一校に濶歩す。依て同學の士荒尾の徒を呼ぶに靖獻派を以てし、最も之を畏敬せしと云ふ。

渠又漢籍の智識に富み、書道に精しく、文筆に達す。加之劍道、柔道、居合の術亦其堂奥に入らざるなし。平素大西鄕を景慕し、私かに其東方策を繼紹するの意あり。其少尉として銀杏城下にあるや、最も士氣の砥礪に努め、聯隊の空氣、爲めに一變するに至る。玆に於てか時人呼ぶに今西鄕を以てし、群童の戲遊するもの亦西鄕大將を以て自から稱するに非ずんば卽ち荒尾少尉に擬するに至りしと云ふ。

渠明治十八年を以て參謀本部に入り、翌十九年命を帶びて渡清し、漢口に居を定めて、禹域の實情を調査研究するの本部となし、同志の士井深彦三郎、高橋謙、宗方小太郎、山内巖、浦敬一等十餘人と共に各區處を定めて四方を踏査し、足跡四百州に遍く、居ること三年にして其實勢歷々として指掌すべきに至る。

而かもこの爲めに拂はれたる犧牲亦決して少なきに非ず、浦敬一は伊黎の邊境に向ひ、廣岡安太は雲南に入りて共に踪跡を失したるを始めとし、其任務を遂行し得たるものも或は群盜に襲はれ、或は瘴癘の氣に冒され、萬死の裡に漸く一生を得た

浦敬一の伊黎行

るに非ざるは莫し。

浦敬一の伊黎行は單に實勢を踏査するの外に特別の重大任務を帶びたり。卽ち荒尾等は明治二十年露國が西比利亞鐵道を敷設して東亞方面に活躍せんとするの計畫を有することを知るや、之が對策を百方討議研究の末、十年以内に支那を改造し、日清相提携して其南下を防遏するの外、策無しとし、其第一著手として浦に補助員若干名を附して、時の伊黎將軍劉錦棠を說き、其幕僚となつて先づ蒙古民族の結合を計り、以て同志の士が支那本部改造の目的を達するまで露人の邊疆侵入を防遏せしめんとするの計を畫せり。

浦の消息不明

斯くて浦は明治二十一年五月僅かに七百金を以て、一先づ甘肅省蘭州に到り、北京より來る二名の補助員を待ち合はせしも期を過ぎて遂に至らず。爲めに計畫齟齬して一旦漢口に引揚げ、更に翌二十二年三月を以て、藤島武彥を伴ひて再び伊黎に向ひ、七月西安を經て、九月蘭州に著し、嘉峪關を越えて遠く長城外に出でしも、藤島は議合はずして、中途より引返し、浦獨り萬里の絕漠を橫斷するの壯圖に從ひしが爾後遂に其消息を絕ち、死生知るべからざるに至る。年僅かに三十。渠が漢口を發するに臨で賦せし長古の一篇は其家大人に寄せし長文の手書――渠の雄大なる經綸を吐露せしもの――と共に今尙ほ懦夫をして起たしむるの概あり。此未成の英雄が空しく邊疆蠻人の手に死して、其志を伸ぶる能はざりしは我對支經營の爲め、殊に痛惜すべきの至り也。

日清貿易研究所

八

荒尾は同志の士と共に漢口を中心として拮据經營すること三年にして、一方參謀本部に對する重要なる任務を盡すと共に、一方對清經營の歩を進むるの資料を得、明治二十二年四月を以て歸朝し、英の東印度會社的の意義を有する日清貿易研究所の設立を畫策し、時の首相黑田清隆、藏相松方正義、農相岩村通俊、同次官前田正名等の熱心なる贊同を得、閣議に於て其事業に對し三十六萬圓を補助するの議を決せしむ。素より其裡面に於て川上操六、及桂太郎等が斡旋に努めしによると雖も、渠が年少なる一陸軍中尉の身を以て廟議を動かせし意氣と熱誠とに至ては實に絕倫にして、現今の中尉輩の容易に夢想だに爲し得ざる所なるべし。

陸奥宗光の補助拒絕

而かも荒尾の計畫は成るに垂んとして一頓挫を來せり。何ぞや、岩村に代りて農相となりし陸奥宗光が、閣議を飜して、其事業に對する資金の補助を拒みしことこれ也。玆に於

てか渠は進退谷まるの窮地に陷れり。其計畫を抛たんか、渠を信じて集まれる年少子弟及び其父兄の信を失せざるべからず、其計畫を把持して進まんか、資金を得るに途なし。凡そ此際に於けるが如く渠が其立場に窮せしことは前後を通じて是れ有らざるべし。其參謀本部の後援を得て一時の窮境を脱せしは、渠にとりては實に望外の幸なりし也。

補助金難

然れどもたゞこれ一時の窮境を脱せしと云ふに止まり、財政難は忽ち踵を接して至る。茲に於てか渠は更に資金融通の計を畫し、當時恰かも初期議會の開會に迫れるを機とし、朝野の間に奔走して漸く政府より一定の補助金を得るの豫約を得しが、適々民黨聯合して政府に肉薄し豫算に大削減を加ふることありし結果、此補助金も亦暗より暗に葬らるゝの不幸に遭へり。

小山秋作の川上說服

當時小山秋作、參謀本部出仕を以て貿易研究所に幹事たり。一日川上操六に詣り說いて曰く、我對清經營の基礎たる貿易研究所は斷じて中途にして廢すべからず。閣下は當初より責任を分擔すべき關係にあり速かに之を援へと。然るに不幸にして當時參謀本部に一錢の機密費だに殘存せざりしかば流石の川上も策の出づべき無し、小山卽ち百方川上の無責任無經綸を痛擊せし後、徐ろに話頭を一轉して曰く、閣下が現に住せらるゝこの邸宅は閣下の有なりやと。川上曰く、諾、君の意を諒す、明日再び來れと。卽ち邸宅を典して四千金を得、之を以て小山に附す。川上が私邸を典して經費を調せしの一事、以て如何に渠が滿身是れ報國の赤誠を以て充たされしかを證するに足ると同時に、如何に當時の荒尾竝に貿易研究所の窮狀に陷り居りしかを察すべき也。

清國通商總覽

荒尾等の對清經營は其當初より困難を極めしが、明治二十五年八月清國通商總覽の刊行せらるゝや、世人の貿易研究所に對する信用頓に增加し、翌二十六年を以て八十九名の卒業生を出すや、是が實地練習の機關として商品陳列所を設立するの擧は極めて順調に進行せり。然るに爾後一年にして日清開釁の事あり、研究所卒業生一同は徵せられて陸軍通譯及び特別任務に服し、邦家に貢獻する所多かりしと共に、其養成せる俊才にして鼎鑊の難に罹りしもの少からず。

日清戰時の獻策

始め日清の事起るや、荒尾等は清國を膺懲し、支那改造の大目的を達せんと欲せば、啻に北清の野に輸贏を爭ふを以て滿足すべきに非ず、必ずや兵を揚子江に入れざるべからずとし、事理を盡して獻策する所あり。川上亦前年荒尾等の勸說に從ひ、根津を東道として南滿、北清の地を踏査せし後、更に進んで上海より漢口に至るまで揚子江一帶の地を視察

し、得る所多かりしを以て、之に意無きに非ざりしも、戰局の進行上遂に其實行を見るに及ばずして已めり。是れ當時支那改造を急說せる一部有志の今尙ほ遺憾とする所也。

朝鮮問題と嗜中飛躍

荒尾は日清開戰前、朝鮮問題の處分に就て閣中の飛躍を試み、日清開戰するや戰策を献言し、媾和に先んじては、興亞の大趣旨に基く善後策を講じ、二十九年八月新領土及び南清巡視の途に上りて病を獲、其十月末を以て遂に臺北に逝く。而して根津は渠の志を繼承して東亞同文會を幹し、今尙ほ對支經營に其全身を捧げつゝあるも、背後に當年の川上の如き雄大なる經綸家無く、其威望未だ朝野を壓するに足らざるを以て、荒尾の抱懷せる大策は未だ實行の半にだに達せずして、早くも支那の土崩瓦解を見んとするの形勢にあり。嗚呼、東方齋逝いて我對支經營振はず、著々歐米列强の先制する所となる。慨するに堪ゆべけんや。

花田仲之助

九

荒尾の畏友に花田仲之助あり。花田は荒尾に後るゝこと一年、明治十六年を以て士官學校を卒業し、松石安治、明石元二郎、立花小一郎等と同期生たり。其薩人なるに拘はらず、閥を忌むこと甚だしく、極力是が打破に努む。今日我陸軍部内に於て殆ど薩閥なるものを見ざるに至りしは職として花田の力多きに居ると、部内の事情に通ずるもの、等しく認識する所也。

花田の人物

渠資性剛直にして謹嚴、人を畏服せしむるの識量を有し、若し人格を以てすれば、現下の大中將を通じて渠に比肩し得べきもの、恐らく一人も是れ無かるべしと傳へらる。現に薩州の後進にして相當の地位に上れるもの、中、床次竹二郎を始めとして渠の薫陶を受けて、人物を鍛練せるもの少からず。

田村と衝突

渠夙に露國の東方經營に就て苦心し、重大なる特別任務に服せしも、田村怡與造と衝突して陸軍を退き、三十七八年戰役には豫備少佐を以て召集せられて、對馬警備隊にありしが、我軍が馬賊操縱の必要に迫まらるゝや、此任に當らんもの渠の外なきを以て再び渠を參謀本部に徵するに至る。

日露戰時の特別任務

渠素より至誠國に許すの士、慨然として起ち、其人格と機略と膽力とは、能く此不羈無賴の徒を威服して、特別任務を遂行するを得たり。聞く當時渠は數々分捕砲一門と、分捕銃數百とを其隊に支給せられんことを我滿洲軍總司令部に請ひしも、總司令部に於ては何故

武人の典型

にや之を咨みて給與せず、渠をして依然舊式のスナイドル銃のみを有する烏合の一隊を率ゐて戰はしむ。渠已むことを得ずして、自から危險を冒して敵を襲撃し以て其銃を鹵獲し、戰爭の終期にはやゝ其部隊の武器を精鋭にすることを得しと云ふ。

渠に關する美談は一二に止まらざるも多くは軍機に觸るゝの虞れある事項なるを以て、茲に之を公けにすること能はざるを遺憾とす。要するに渠は武人の典型也、田村が微嫌を以て渠を部外に追ひしは實に田村の一大過失にして同時に又我陸軍の一大損失なりしと言はざるべからず。

田中義一等のハイカラ論

要するに川上時代の我參謀本部は特別任務に從事する人選に重きを置き、從つて部内の英材之に集まりしも、田村時代以後の參謀本部は、川上の施設とし言へば一も二も無く長閥の爲めに打ち壞はされしと、關係各國の情報を得るには敢て特別任務に服するの人士を要せず、公使館附武官若くは駐在武官の報告にて足るとのハイカラ論――このハイカラ論は主として田中義一等一派の主張せし所なりと云ふ――の勝を制せしとにより、各方面の特別任務に服せしもの一時悉く引揚げしを以て、平靜無事の日にありては格別の支障を見ざりしも、風雲やゝ變調を呈するや、毫も信賴すべき情報を得るの道なく寸前暗黑なりしと云ふ。斯く風雲急なるの時に當りて適確なる情報を得るの道なかりしこと、これ明治三十七八年戰役に於て我軍が遺算に遺算を重ねし所以にして、この爲めに貴重なる人命と財力とを犧牲に供せしこと擧げて數ふべからざるものあり。長閥の我陸軍に累を及ぼせしこと亦大なる哉。

田村時代の支那經綸

小山の對露作戰意見

十

然れども我參謀本部が支那方面に對して最も積極的に活動せしは實に田村時代なりき。田村が參謀本部に遺せる一大功績は實にこの對支經營の伸長にあるべし。

當時荒尾の同志小山秋作尙ほ參謀本部にあり。對露の作戰を按じて、我軍が全局の勝を制するの策はたゞ清國を誘導啓發して之をして歐式訓練を受けたる十萬の兵を養はしめ、以て露の兵站線を側面より脅かさしむると同時に、北滿一帶の沃土を我掌裡に收めて、我兵站を鞏固且豐富にするの外無しとし、而して此策を實行するためには、宜しく我より各總督巡撫を說きて之をして新兵敎練のために我將校を傭聘せしむべしとし、建言滔々數千言に亙る。

支那の我將校招聘

田村、福島共に此献策を可とし、著々計畫の歩を進めし結果、明治三十三四年の交には支那の各省城を通じて殆ど武備學堂の設け非ざる無く、武備學堂にして殆ど我將校を招聘せざるもの無く、我將校の之に教官たるもの立花小一郎、鑄方德藏、與倉喜平、齋藤季治郎、高山公通以下實に百二十七名を算するに至る。

支那青年の士官學校入學

而かも我有爲の將校の彼に招聘せらるゝ一方に彼より我士官學校に入學するもの漸く多きを加へ、今や其卒業生實に千三百七十名に上り、其中の先輩は多く師團長、旅團長の要職にあり。故に若し我參謀本部が當年の川上の方針を把持して進まば、我國權國力の支那に伸びしこと殆ど想像の外にあらん。惜しい哉、我參謀本部は田村の歿後常に陸軍省——寺内——の壓迫を受けて、外交的の舞臺に其手腕を振ふ能はざりしが故に、外形上の活躍大なるに比して其實質之に伴はず、遂に今日の如き對支外交の不振を致せり。

學閥跋扈の端

田村時代の參謀本部に就て尙ほ一言すべきは、此當時より漸く陸軍大學卒業生の中央部に登用せられ來りしこと是れ也。川上時代までは兎角大學卒業者は部内より蔑視せられ、一方に於て實戰の經驗を有する老將連よりは徒らに机上に空論を講ずる生兵法者と指彈せられしと同時に、一方には自己の手腕を以て要部の椅子を占め居りし青年俊秀の將校連よりは意氣地無しを以て目せられ、空しく怨みを呑んで地方の聯隊に沈淪せり。

田村の勢力扶植

然るに田村時代となるや、大學校卒業者の數漸次增加せしのみならず、彼等は隊の演習、實兵指揮の技倆こそ低劣なれ、動員、兵棋演習、圖上戰術等の數字的若くは理論的のものは其得意とする所なるを以て、漸次地方に於て頭を擡げ來り、中央要部の椅子を占むべく運動を開始すると同時に大學校長亦大學校設立の趣旨が高等師兵術を教授するにあることを理由として、之を參謀本部に登用せんことを要求せしかば、始めは事務見習として一年乃至一年半を限りて交代採用せしもの、漸次其地歩を確保し來り後には殆ど彼等を以て參謀本部を獨占するに至り、終に特別優秀の技倆を有すと認めらるゝもの、外、參謀官は全部、大學校卒業者を以て充てらるゝことに條例を改正せらるゝに至れり。而して田村は巧みに此氣運に乘じて自己の勢力を扶植せしなりき。

要するに田村時代の參謀本部は最も著しく活躍したることを認めざるべからざれども或意味に於て田村自身の利害を中心として打算せられたる活躍なりとの評を免かるゝ能はざるべし。

十一

兒玉時代

兒玉時代の參謀本部は總務部長に井口省吾あり、第一部長に松川敏胤ありて其作戰用兵の府たる資質を具備せる點に於て寧ろ川上、田村時代を凌駕するものありしも、其期間は殆ど日露戰爭を以て終始せしを以て、戰爭關係以外、特に經綸の見るべきものなかりき。

兒玉の作戰成績

而して兒玉の明腦と敏腕とは能く戰時に於ける帷幄の任務を盡せるのみならず、各軍を統轄操縱するに於ても亦多くの遺算あるを見ざりしも、之を其戰績より觀る時は、各所の戰鬪皆餘りに我兵力を費消すること多きに過ぎ、日露戰爭を通じて眞に好戰績を以て目すべきは、渠の出征以後にありては單に奉天の一役あるのみにして、鴨綠江戰と云ひ、得利寺戰と云ひ、殆ど理想的の戰鬪を以て許すべきものは、共に渠が出征以前に戰はれしものなることを思へば、渠の帥兵術は遂に川上に比して一籌を輸するものあるが如し。然れども

桜石安治

これ獨り渠をのみ尤むべきに非ず。要するに渠の前任者が徒らに川上の施設を破壞するに急にして、周到の作戰準備を缺きしの致す所也。而してこれ要するに長閥の弊に外ならず。

兒玉に次で參謀本部の中心人物たりし松石安治は、日露戰爭當時第一軍參謀副長として

天賦の用兵家

出征せるが、其用兵上の技倆は部内第一流を以て推すべく、其計畫になりし鴨綠江戰が嚴正なる批評眼を以てするも、殆ど缺點なき理想的の戰鬪なることは中外の齊しく認識する所也。

殊に渠の用兵家たるの天分を見るべきは得利寺戰の報を得るや否や直ちに我黑木軍を以て遼陽を急襲するの奇籌を運らせしこと是れ也。渠謂へらく、敵軍囊きに鴨綠江、南山に破れ、今や復得利寺に大敗す。而して現下に於ける彼我の形勢を按ずるに、敵は一方旅順の要塞に據り、他方シタケリベルグの南下部隊は我奥軍に擊破せられ、蓋平方面に敗退し、別に我大孤山上陸軍に對する一支隊析木城南方の分水嶺方面にあるの外、約八萬の精兵は總帥クロパトキンに率ゐられて遼陽にあり。而して我は乃木軍を以て旅順の敵を壓迫し、奥軍は敵を追ふて徐ろに遼陽に向つて本道を北進しつゝあり。大孤山上陸軍は黑木軍の淺田支隊と協同して岫巖を占領し黑木軍は鳳凰城附近にあり。故に若し敵帥にして傑出せる用兵家ならしめば心ずや先づ、其主力を擧けて我黑木軍を遠く南方に擊攘し、大孤山上陸軍を側背より壓迫し、形勝の地歩を占めて然る後徐ろに我本軍に對抗するの策に出でん。故に我黑木軍は敵が得利寺の新敗によつて士氣沮喪せるに乘じ、機先を制して斷然攻勢に

遺憾なる遼陽戰

出で長驅遼陽を衝くべし。現に黑木軍司令部の所在地なる草河口より遼陽に至るには强行軍を以てすれば僅々四日行程のみ。我軍の遼陽强襲にして奏功せば戰局は玆に急進轉して冬季に入る以前に於て敵を長春以北に擊攘するを得べし。若し萬一我軍の不利に歸するも、退いて山地に入らば隨處堅固なる陣地を得て敵の追擊を沮止し、以て我奧軍の北進して遼陽に迫るを待つべく、我大孤山上陸軍亦側面より我軍を援助すべければ敢て多く憂ふるを須るず。反之、若し徒らに萬全を望んで三道竝進遼陽を包圍するの戰策を採らば曠日彌久、敵の準備大に整ひ、兵力亦大に加はるべきが故に、假令之を攻陷するも尙ほ且多大の犧牲を拂はざるべからず。要は我軍の士氣を振作して速かに攻勢運動に出で、敵の兵氣沮喪と準備の不完成とに乘じて一擧に之を擊攘するにありと。

此意見は軍の少壯參謀連の歡迎する所となりしも、軍參謀長藤井茂太は大本營の意を迎ふるに急にして、松石の献策を以て危道なりとし頑として採用せず、友軍の遼陽附近に迫るまで兵を按じて動かざりき。玆に於てか遼陽戰は松石の心算より後るゝこと殆ど七旬、我軍三道より竝進し兵力を集めて之を攻擊せしも、敵は既に準備全く整ひ、要害に據守して頑强に抵抗せしを以て、我軍の苦戰甚しく、後備軍の如きは放つべき銃丸なく、空しく、手を束ねて敵彈の標的たるの慘狀を呈し、殆ど潰敗の危機に瀕す。幸に野津軍司令官の勇斷に依りて頽勢を挽回し、辛うじて之を占領するを得たるも、たゞ之を占領し得たりと云ふに止まり、殆ど戰勝を以て目すべからざるの惡戰なりき。

松石の憤慨歸朝

玆に於てか松石は、斯かる劣惡なる戰鬪を敢てするは兵家の耻辱なりとして、遼陽陷落の卽日を以て辭表を呈出し、憤然第一軍參謀副長の職務を拋つて歸る。

渠の戰術家としての技倆は部内既に定評の存するあり。其遼陽强襲の奇策の如きも斷じて行へば恐らく成功せしならん。我大本營が藤井の意見に聽きて、飽までも山縣流に石橋を叩いて渡る底の戰策に出でしは、一面より言へば其愼重を稱揚すべきが如きも、戰役の大局に累せしこと擧げて數ふべからず、中央統帥部にありて我滿洲軍の作戰を擔當せし松川敏胤、井口省吾の徒、責無きこと能はざる也。

松石の人格感望

松石は啻に頭腦の明敏と、才華の煥發とを以て鳴りしのみならず、其爲人率直濟泊にして他に對して毫も城府を設けず、其高潔にして淸雋なる人格は恰かも梅花の馨るが如く、人を薰化せずんば已まざるの概あり。此故に渠の人望は部内に洽ねかりしのみならず、部外の識者亦陸軍第一流の人物を以て推稱し、其勢望漸く長閥を壓せんとす。惜しい哉、一

昨々年滿洲に於て毒瓦斯に中り、一旦治癒せしも更に上海に於て强烈なる酒を勸めらるゝや、病再發して其精明なる頭腦は復用ゆべからずなり、遂に本年夏を以て白玉樓中の人となれり。これ豈獨り帝國陸軍の損失のみならんや。

無中心時代、胡石時代、田中時代

山梨半造

十二

松石の病んで參謀本部を退くや、參謀本部は一時其中心人物を失ひしの觀ありしが、明石元二郎の參謀次長の椅子に就くに及んで、明石中心の參謀本部を現出し、田中義一の之に代はるに及んで今や田中中心の參謀本部を現出せり。

現在の各部長中總務部長山梨半造は戰史に通じ、事務の才亦凡ならず、他に對して親切なるも、人物何となく輕きを免れず、田村の女婿たる上に、田中義一の系統に屬するを以て長閥に善く、其參謀本部に入りしは職として福島、竝に大島(健一)の後援にこれ由ると稱せらる。殊に渠が或一部より嫉視せらるゝは、其隊附の經驗に乏しく、(渠の隊附たりしは聯隊長、旅團長を通じて僅々一年のみ)實兵指揮者としての技倆の疑ふべきものあるに拘はらず、入つて參謀本部の要職を占めしにあり。然れども隊附の經驗に乏しくして參謀本部の要職を占めしは獨り渠のみならず福島然り、松川然り、井口然り、松石然り、宇都宮亦然り。而して獨り渠の此意味に於て批難せらるゝは要するに人をして其技倆に比して現在の地位の高きに過るが如き感あらしむるに基くものなる無からんや。渠青島攻圍軍に參謀長として勳功あり、爾來其參謀本部に於ける地歩は堅確を加へ來りしもの、如し。沙上の偶語によれば這回明石の出で、師團長たりしは職として渠との衝突に是れ由ると。果して然らば是れ明石對渠の問題と云ふよりも寧ろ明石對田中の問題たりし也。

尾野實信

尾野の材幹

第一部長尾野實信は山田隆一と同じく士官學校の第十期生にして首席を以て卒業し、陸軍大學校の成績亦拔群にして恩賜の軍刀を授けられたり。資性豪快にして器局亦大、事を處するに機敏果斷、而かも極めて周到なり、之を以て團隊長としても、帷幄の謀士としても將又軍政家としても、適くとして可ならざるなし。唯好漢惜しむらくはやゝ利己觀念を有すること强きに過ぎ往々他を排擠して自から薦め且素行放縱に過ぐるやの批難あり。前途有望なる渠の爲めに深く其自省を望まざるを得ず。

渠故將軍兒玉に愛せられ日露戰爭當時も田中義一、河合操等と共に滿洲軍總司令部に參謀たり。戰後陸軍省に軍事課長の要職を占めしが、後獨逸大使館附武官、中清派遣隊司令

福田雅太郎

武内徹

官、第八(姫路)旅團長を經て昨年五月、福田雅太郎の參謀本部第二部長に轉職すると同時に現職に就けり、渠にして若し長閥直系の士ならしめば、敢て田舍の旅團長たるまでもなく、夙く既に中央部の要地に鰲居したるべしとは部内の衆評一致する所なり、思ふに渠を由此の後任として參謀本部に招致するの斡旋に力を致せしは、時の參謀次長明石なりしか。渠參謀本部に入りし以來、益々天稟の材能を發揮し、部内部外を通じて好評嘖々、漸次威望を加へつゝあるもの、如し。努めて已まずんば他日の大成期すべき也。

第二部長福田雅太郎は陸軍部内の新智識として推稱せられ、帷幄の材幹に於て敢て第二流以下に落ちず、三十七八年戰役には第一軍參謀を以て終始し、參謀副長松石の去りし後は專ら軍の作戰を擔任して其戰術的手腕を發揮したりき。渠の餘りに才氣に富み且俗臭を帶ぶるは、往々人をして一箇の幕僚、秘書官、乃至事務家以上の人物ならざるかの如くに思はしむる所以なれども、其手腕より言へば渠は當然近き將來に於ける參謀次長たり若くは陸軍次官たる有力なる候補者の一人也。たゞ其鍛練に於て到底前部長宇都宮に及ばず。

第三部長武内徹は、大澤界雄以後の鐵道通にして其參謀本部に入りしも職としてこの關係に是れ由る。頭腦極めて緻密にして數理に明らかに、現交道兵團長井上仁郎と共に工兵界の雙璧たり。たゞ井上に比して權略無く、從つて敵を作ることも亦少なし、將來の大發展を期待す可からざるも、運輸交通界の權威として獨特の地歩を占む。

田村沖之甫

田村の三兄弟

第四部長田村沖之甫は、故田村怡與造の伯弟にして、仲弟早川新太郎の歩兵大佐たり、季弟田村守衛の騎兵大佐たるに對し、渠は砲兵科の少將を以て現職を占む。田村の四兄弟中、長兄怡與造の最も傑出せることは改めて言ふまでもなき所なるが、他の三兄弟中、人物の最も優秀なるは季弟守衛にして、他日怡與造の衣鉢を襲ぐもの或は此人ならんと期待せらる。而して之に次ぐものは仲弟早川にして――此早川姓は怡與造の舊姓なりしを仲弟之を繼ぎし也と云ふ――最劣を渠沖之甫と爲すとの世評あり。

渠等三兄弟は皆一種の俠骨を帶び、且强情なる點に於て長兄怡與造に似るも就中、守衛は最も思慮分別を有し、沖之甫は最も小事に屑々たりと稱せらる。殊に沖之甫をして一時不評ならしめしは其大阪の野砲兵聯隊長たる代に於て一部々下の反抗を買ひし點にあり。然れども是れ渠の隊附に適せざることを證明するに足るべきも以て其材幹の全部を否定すべき資料とならず、恰かも夫の宇都宮太郎が歩兵第一聯隊長として不評なりしと同樣に視る可きものならん。現に渠は砲兵課長として相當の成績を擧げ、第四部長として亦素より前

任者重見熊雄以上の手腕を有す。渠亦砲兵科の一人材たるに負かざる也。

要するに現下の參謀本部は往年の川上中心時代なりしに比して田中中心時代也。而して其各部長の材幹亦多くの遜色なきが如し、唯何となく貫目の足らざるが如くに感ずるのみ。

第五　教育總監部

一

我陸軍の教育に就ては傳ふべき人物と事績と頗る多し。就中最も傑出せる最初の一人は大村永敏なるべし。渠明治二年五月函館戰の平定するや幾許もなく兵部大輔の要職を占めて兵備建制の任に當りしが、渠の先づ著眼せしは我陸軍兵式の一定竝に是が師範たるべき將校の養成にあり。玆に於てか渠は横濱に語學校を設けて有爲の青年に佛語を授け、大阪に兵學寮を設けて諸藩の兵卒に歐式訓練を施せり。これ實に我陸軍の基礎を爲せるものにして、今日に於ける十九師團——戰時に於ける野戰軍三十八師團——の尨大なる陸軍も其端を玆に發せるなり。

明治二年九月、大村が京都木屋町の客舍に難に遭ふや、其職を襲ぎしものは前原一誠なりしも、爲人偏固にして特に經綸の見るべきなく、事實に於て大村の遺圖を繼承し專ら軍

山縣の大西郷説得

隊の編制及教育事務を鞅掌せしものは山田顯義なりし。

既にして山縣有朋、西郷從道等の歐洲兵制を視察して歸朝するや、當時大阪の兵學寮は長人、土人のみにして、薩人一人も在らず、且禁闕守護の任に當るものも亦長兵のみなるを見て我兵權の基礎を鞏固にする所以に非ずとし、山縣親から大西郷に説きて其出廬を促がし、薩長土三藩の兵を以て禁闕の守護に任ずると同時に其兵權を朝廷に收め、同時に兵部省竝に兵學寮を東京に移せり。

鳥尾、曾我

當時の兵學頭は鳥尾小彌太にして同權頭は曾我祐準なりしが、海軍が既に英人を聘し英語を以て講義を開始せるの例に倣ひ、斷然佛人を聘して之に兵學寮の教授法一切を委任するの議を決し、一時に佛人の教官二十餘人を招聘す。然かも陸軍は海軍に比して多數の將校を養成するの必要あるを以て海軍同樣直ちに原書に就て教授を受くるを得ず、已む無く翻譯教授により、翌日の教授を前日翻譯印刷して生徒に配附するの方法をとれり。

武田斐三郎

翻譯教授法

翻譯教授法を採るに當り先づ第一著に逢著せる難問題は兵學上の術語の選定にありしが、適々五稜郭の築設者にして當時第一流の洋學家兼兵學家たる武田斐三郎が、大佐を以て兵學寮の學監たりしにより、然までの困難を見ずして、之を解決するを得たり。

監軍本部

此翻譯教授法は當時にありても學生の腦力に比して困難に過ぐとの議論ありしが、曾我等は眞に兵制の基礎を定めんと欲せば洋式訓練に依らざるべからず、洋式訓練を施さんと欲せば泰西の兵學を學ばざるべからず、假令多少の困難ありとて之を廢すべきに非ずとし、著々其歩を進め、初めは生徒を教授せるのみならず、五大隊の兵をも訓練し、甚しきは蹄鐵さへ鍛造せるものを、後には射的體操等を戸山學校及び教導團に遷し、兵學寮は之を士官學校と改稱して專ら將校の養成機關となし、其位置も始めは龍之口の老中屋敷跡にありしものを、現在の四谷本村町に移せり。これ實に明治八年の事に屬す。

當時の我陸軍將校は斯くの如く佛人の教官によつて養成せられたるが故に、兵學は兎も角、語學の素養の如きは現時の青年將校に比して適かに優れたるものあり。夫の土屋光春上田有澤の徒が今尚ほ陸軍部内有數の語學者たる、決して偶然に非ず。

二

我陸軍初期の教育は大約上述の如き狀態なりしが、明治十年の西南役後、其經驗に鑑みて兵制を改革し、明治十一年十二月參謀本部の設置せらるゝと同時に監軍本部なるものを

設け、我全陸軍管區を東部、中部、西部に三區分し各二旅團宛を之に配屬せしめ、三人の監軍部長をして各管區の教育竝に出師準備を管掌せしむることゝせり。これ即ち他日の師團編制の準備にして三人の監軍部長は實に師團長の候補者なりし也。

歴代の監軍部長

此制度は明治十八年五月まで存續せしが、此時に至るまで監軍部長の職に就きしもの、東部には谷干城、三好重臣の二人、中部には野津鎮雄、谷干城、曾我祐準、黑川通軌の四人、西部には、三浦梧樓、高島鞆之助の二人あり。

監軍部長の職務

當時に於ける監軍部長の職務は一言にして謂へば常設の檢閲使とも云ふべきものにして、或意味に於ては從來の臨時檢閲に伴ふ各種の弊害を除却するがために設けられしものとも云ふべきものなりしが故に春季の大演習を統督する時の外は各監軍部長共、殆ど無事に苦しむの狀態なりき。

陸軍の編制替

明治十八年五月監軍本部の廢止を見るに至りし所以は、既に前年度より各鎭臺の步兵聯隊が漸次旅團に編制替せられ各兵種亦擴張せられて、著々師團建制の基礎成りしが爲めにして、此時まで監軍部長たりし三好重臣、黑川通軌、高島鞆之助の三人者を始め、士官學校長たりし三浦梧樓、參謀本部次長たりし曾我祐準等、皆出でて鎭臺司令官の職に就けり。

而して此編制替を畫策せしものは曾我祐準なりしが、自から多少の疑惧無きに非ざりしに、適々其實行中獨逸よりメッケルの來るありて其批評を求めしに、メッケルは現兵數を以てしては適當の編制及配置なりと考ふとの事なりしかば、漸く意を安んずるを得しと云ふ。斯くて明治二十一年五月師團の編制全く成り、師團司令部條例の制定と同時に從來の各鎭臺司令官を廢して新に師團長を置けり。茲に於てか我陸軍は戰略單位の師團六箇（近衞を除く）を有することゝなり、略ぼ其體を成すを得たり。

各學校創設

此間明治十六年には高等師兵術を教授する陸軍大學校の設けらるゝあり、續て軍醫學舍、軍吏學校、砲兵射擊學校、乘馬學校、要塞砲兵幹部練習所、砲工學校、經理學校、被服工長學舍、陸地測量部修技所等の設置を見、各方面の教育機關漸く整備す。而かも監軍本部なるものゝ廢止せられて以來軍隊の教育は全然鎭臺司令官の掌裡に歸せしが故に、各鎭臺を通じての同一兵科を教育するの機關は未だ整備せざりき。

監軍部再設

茲に於てか再び監軍部設置の議起り明治二十年五月に至つて其新設を見、山縣有朋監軍となり、兒玉源太郎是が參謀長に補せられ、同時に騎、砲、工、輜重の各兵監新設せられ騎兵監に佐野延勝、砲兵監に大築尙志、工兵監に別役成義、輜重兵監に德田正稔の補職を

見たり。これ實に後日に於ける教育總監部の體を成せし最初のものとなす。

三

歴代の監軍

爾後明治三十一年一月監軍部の廢せられて教育總監部の設けらるゝまで監軍の職にありしものに大山巖、三好重臣、山縣有朋あり、其參謀長に大島久直、井上光あり。

教育總監部創設

始め監軍部の廢せられて教育總監部の設置せらるゝや教育總監をして陸軍大臣の隷下に屬せしめしかば、當然の順序として此時まで監軍部に參謀長たりし井上光の補職せらるべかりしに拘はらず、寺内正毅第三旅團長より入つて其椅子に就き、井上はやゝ侮辱せられたるの形なりき。

寺内と大谷

斯くて寺内は最初の教育總監として明治三十三年四月參謀本部次長の椅子に就くまで其職にあり大谷喜久藏亦其本部長として此期間勤續せしが、寺内の參謀本部に入るや、同時に條例を改正して教育總監をして天皇に直隷せしめ、薩派の重鎭野津道貫入つて總監の職に就き、隙然長閥の圈内に入りし參謀本部と相拮抗するの形勢を示せり。

野津道貫

日露戰後同じく薩派の西寛二郎入つて野津の後を襲ひしが、幾許もなく大島久直之に代

西、大島

淺田、上原

教育總監部參謀長

り、次で淺田信興を經て現總監上原勇作其職に就く、茲に於てか一時薩派の圈外に逸せしが如くに見えし教育總監部は再び其の掌裡に歸せり。而して野津時代以後に教育總監部に參謀長若くは本部長たりしものに大久保春野、上田有澤、大谷喜久藏、本郷房太郎、齋藤力三郎及現本部長栗田直八郎あり。

各兵監

騎兵監は佐野の後を大藏平三繼ぎ、大藏の後を原田良太郎繼ぎ、原田の後、澁谷在明、秋山好古を經て現兵監豐邊新作に至り、砲兵監は明治二十三年九月、野戰砲兵監、要塞砲兵監に二分し、野戰砲兵監には黑田久孝、黑瀨義門、柴野義廣、伊地知幸介、大迫尙道、藤井茂太等之に歷任して現兵監星野金吾に至り、要塞砲兵監（後重砲兵監）は牧野毅、鹽屋方圀、黑瀨義門、豐島陽藏、山口勝を經て現兵監佐藤鋼次郎に至り、工兵監は別役の後を矢吹秀一繼ぎ、矢吹の後を上原勇作承け、上原の後を落合豐三郎襲ひ、以て現兵監近野鳩三に至り、輜重兵監は德田の後、原田良太郎、岡田貫之、澁谷在明を經て現兵監足立愛藏に至れり。

淺田時代

以上教育總監部の變遷及び人物を通覽するに、部内第一流の人物を網羅せること淺田時代を以て第一とし現下はやゝ遜色あるが如し。

初代の總監寺内

今試みに歴代の教育總監を對照せんか、初代の總監寺内は當時の新智識にして且爲人軍隊教育家たるに適せるが如きも、啻に其戰術家を以て目すべからざるのみならず、明治十年役に大尉を以て出征負傷せし後は少將時代に僅々一年三ヶ月間仙臺の旅團長たりし外、殆ど實兵指揮の經驗を有せざるの缺點あり、加之其器局狹小にして一種の型に嵌まりし人物の外用ふる能はず、從つて其理想を實現せしめば軍隊を機械化して止まんのみ。必ずしも好教育總監を以て俟つべきに非ざる也。

野津及西

二代の總監野津道貫は戰陣の勇將なるの外、其識や學や何等陸軍教育を指導するに足るものなく、三代の總監西寛二郎に至つては其無學無識なるの點に於て野津と伯仲の間にあるのみならず、實兵指揮者としての技倆は遠く野津に及ばざるが故に、其教育總監たるは殆ど兒戲に類すと云ふべし。

大島久直

四代の總監たる大島久直は古き戰術家にして實戰の技倆亦凡ならざるも、其心事の陋劣にして常に權勢に阿附するに急なるの餘り斷乎たる裁決力を缺く。夫の改正騎兵操典が一旦軍事參議院に於て阻まれ、之を再審査するを餘儀なくせられしが如きも職として渠が寺内の鼻息を窺ひ其系統たる大庭二郎、河村正彦輩の縱論を迎合し、教育總監たるの權威を保持する能はざりしの致す所なるに外なちず。

淺田信興

上原勇作

齋藤力三郎

茲に於てか吾人は第五代の總監淺田及び現總監上原を以て歴代の教育總監中出色の人物なりと推稱せざるを得ず。就中上原を以て優秀となす。淺田には一種の豪傑癖ありて動もすれば軍隊の氣風をして似而非豪傑風に墮せしむるの懸念なきに非ざれども、其兵學者兼實戰家たる點に於て歴代の總監中に群を抜き氣骨亦前總監大島等の比に非ざるのみならず又多少の經綸眼を有す。而して上原に至ては其兵學者兼實戰家たるの點に於て淺田に遜らず、其氣骨、經綸亦超凡、しかも淺田の癖なし、たゞ渠は餘りに氣早きがため事を爲すに當り、往々輕率の謗を免れず。夫の增師問題による失脚の如き最もよく渠のこの性格の一端を暴露せるものたり。かれ既に手腕識見に於て缺くるなし。希くは自重せよ。

四

淺田時代の本部長齋藤力三郎亦一種の豪傑的才物にして宇都宮太郎、伊豆凡夫等と共に川上の殘黨中にありても所謂豪傑黨とも目すべき一派に屬し、久しく逆境に處せしが、上原勇作の陸軍大臣たるや之を地方の旅團長より拔きて中央部に招致し、爾來昨年に至るま

で教育總監部に龍蟠して評判頗る好かりしが如し。

齋藤の爲人

渠軀幹短小なれども非凡の精力を有し、又多少の遠慮を有す、其元來武士的の徑路を踏むを以て自から任じ權門に阿附するを唾棄するに拘はらず、自から節を屈して陸軍大學に入り以て他日の發展に資するの用意を怠らざりしが如きは渠の遠慮の一端を見るべき也。渠實兵指揮者として敢て人後に落ちざるのみならず、事務の材幹亦尋常に過ぐるものあり。然かも吾人を以て渠を見るに渠は之を實務家を以て許すべきよりも寧ろ雄辯家を以て目すべきが如く、大公使館附武官としては殆ど理想的の人物なりと稱せられき。

大谷喜久藏

教育總監部初代及四代の本部長たる大谷喜久藏は寺内の型にして、容貌嚴格なれども上に對して弱く部下に人望なし、加ふるに其前妻は渠の出征中不倫の件ありて離別を餘儀なくせしことあるを以て其技倆の多少認むべきものあるに拘はらず、吾人は渠を以て教育總監部の要職を占むるに適するの人柄なりと許すこと能はず。

大久保春野

二代の參謀長たる大久保春野は福島安正等と同じく文官より陸軍に轉ぜし一人にして、一時小川又次の後を繼ぎ、川上時代の參謀本部に局長たりし高橋維則等と其名を齊うし、洋學の素養淺からざるものあるも、局量狹小にしてやゝ苛察に失するものあるが故に部下は頗る其意を迎ふるに苦しむことあり。日露戰役當時は師團長として相當の成績を擧げしも、そは職として部下の兵が肥薩の健兒なりしに由るべく、特に渠の用兵家としての技倆を發揮せるものとして認むることを得ず、渠の本領は實兵指揮者たるよりも寧ろ軍隊教育家たるにあらん。然かも吾人は渠を以て第一流の軍隊教育家なりと認識する能はず。

上田と本郷

三代の參謀長たる上田有澤は野津系の一人なるが故に野津に拔かれて教育總監部に入りしものと見るべく、其用兵竝に軍隊教育家としての資格は大久保に比して寧ろ劣るとも優る無し、五代の本部長本郷は一種の能吏なるも、到底識見ある教育家に非ず。

栗田直八郎

現本部長栗田直八郎は部内新智識の一人にして、手腕亦見るべきあり、殊に兵站事務に長ずるも、其爲人俗臭を帶び百事悉く利己心より打算し、常に權勢に阿附するを忘らずと て部内の一部には頗る批議せられつゝあるが如し。從つて其本部長としての信望は前任者齋藤に比して多くの遜色ある可し。今にして之を思ふ、齋藤遂に歷代の本部長中の隨一人也。

五

騎兵科

我騎兵科は久しく輜重兵科と同一視せられ、他兵科に比して一段低級の地位にありしを以て其兵監も亦秋山好古以前は特に人物の推稱するに足るものなし。

佐野延勝

初代の騎兵監佐野延勝は埼玉縣初松村在の舊幕臣にして大阪兵學寮時代の出身者の一人たり。鼓包武と共に、我騎兵界の古老を以て推され、乘馬の技倆と相馬術とに於て群を抜くものありしも、其人物は劣等にして商賣氣多く、豫備に編入せられし後、東京ビール會社に社長として巧みに阿堵物を蓄積せしと云ふの外、特に記すに足るべき事績無し。

大藏平三

佐野に次で騎兵監たりし大藏平三は、森岡正元、原田良太郎と共に鼓門下の三傑を以て目せられしが、三人者中最も世才に長け、夙に部下に對して自己の勢力を扶植するの用意を怠らざりしが故に、他の二人者を壓して先づ兵監の地歩を占むるを得たり。渠佛語を能くし又文筆に達す。其翻釋になる輕騎兵全書の如きは、最も文辭の妙を以て鳴り往年の少壯士官が愛讀措く能はざる所なりしと云ふ。

大藏の自任

渠自から將來の陸相を以て任じ、軍政方面に手腕を揮ふの意ありしも、其實際手腕は騎兵監として騎兵科の經綸を立つることすら覺束なく、桂太郎の陸軍大臣たるや軍馬補充部長に左遷せられて其競爭者たる原田のために騎兵監の椅子を奪はれたり。

原田良太郎

大藏に代りし原田良太郎は嘗て大藏のために壓せられ、其下に騎兵科に留まるを屑とせずして自から輜重兵科に轉ぜし者なるが、長閥の一人なりし因緣を以て桂に拔かれ、輜重兵監より入つて騎兵監の椅子に據れり。玆に於てか部内渠が輜重兵より飛び入りせしに反感を懷き、渠に對する不平勃然として起りしも、渠は長閥の勢力を背後に負ふて之を冷眼視し、著々自己の經綸を實行せり。

陸軍馬術の三派

渠の騎兵監時代の事績として特筆すべきは、我陸軍の馬術を一定せし一事にあるべし。當時我陸軍には一定せる馬術なるものなく、森岡正元の流を汲めるものあり、白石千代太郎の流儀に從ふものあり。或は又小池順の馬術を推稱するものありて嘗に騎兵科に於てのみならず砲兵科、輜重兵科にありても三派鼎立の狀態にあり。從つて又各操典の解釋を異にするに至る。

馬術一定

玆に於てか渠陸軍に於ける我馬術を統一せんと欲し、一大英斷を以て當時獨逸に留學して歸朝せし少佐三岳於菟勝に聽き、斷然獨逸流の馬術を以て統一し、操典教範の解釋を一定す。當時三岳は部内に於ける馬術家としては第三流以下に位し、其馬術は素より森岡、白石、小池等一流の乘馬家の馬術に比すべくも非ざるのみならず其流儀亦必ずしも優秀を

以て目すべからざるものあり、現に森岡の如きは之を以てこれ馬をして地獄に驅け人らしむるの馬術なりと嘲笑せしに拘はらず、原田が敢然渠の馬術を採つて自己の所信を斷行せしは亦一種の見識ならざるに非ず。

原田の權威既に斯くの如きものあるが故に部内不平の徒も遂に聲を潜むるに至りしが、渠勢ひに乘じ、野田豁通を排して臨時陸軍建築部長たりしより延いて旭川事件を惹起し、天下疑惑の中に死せり、渠爲人苛察にして融通きかず日清戰役當時運輸通信部長官に隷して大連碇泊場に司令官たるや出征將校の鞄をすら一々開搜し、福原豐功のために揶揄せられて纔かに止みしことあり。其旭川事件の如きも思ふに渠が建築に關する智識なきために請負業者の欺く所となりしなるべし。渠は決して私を營み得る人間に非ず、たゞ小廉曲謹の徒なるのみ。

原田の爲人

六

澁谷在明

澁谷在明は原田に次で騎兵監となり後、恰かも原田が輜重兵監より出でゝ騎兵監となりしが如く騎兵監より出でて輜重兵監となり、最近まで其職にありき。渠の騎兵監時代に於て騎兵科は始めて他兵科と對等の地歩を占め、或は大學に入り、或は參謀たるを得るに至れり。渠馬術に於ては遠く森岡に及ばず、經綸は素より原田に劣り、學問亦大藏に比肩するに足らざるも、凡てに行き亙りて廣く淺く通じ、且小心翼々として職務に勤勉なる點に於ては從來の各兵監の比に非ず。且爲人清廉にして權勢に阿附するの意なし。たゞ渠に惜しむべきは其餘りに溫厚にして覇氣に乏しきにあり。渠嘗て月曜會に與みし、盛んに其機關雜誌に論說を掲載せしが、山縣等よりの壓迫來るや、第一に腰を折つて冑を脱げり。渠が騎兵監の職を後進秋山に讓りて自から輜重兵監に遷り、中將中の先輩を以て遂に師團長たる能はざりし所以のものは、畢竟するにこの餘りに溫厚なるの致す所ならん、然れども渠は恐らく輜重兵監として絶好の人物なるべし。從來の輜重兵監は一原田のやゝ異彩あるを除き、初代の德田正稔、三代の岡田貫之皆騎兵科に籍を置くに足らざる凡庸の徒のみ。現兵監足立愛藏亦砲兵科に重きを爲すに足らざりしを以て輜重兵監に廻されしのみ。是等の徒に比すれば澁谷は素より嶄然頭角を拔くものと言はざるべからず。

歷代の輜重兵監

秋山好古

澁谷に次で騎兵監の椅子を占めし秋山好古は凡ての點に於て澁谷に勝り、學識あり、膽力あり、覇氣あり、且骨鯁にして勤勉、一種軍政家としての手腕を有す。たゞ渠が歷代の

諸兵監に比して、見劣りするは馬術のみ。思ふに特に薩長の庇護によるなくして特科兵より師團長となり、能く其地位を辱しめざるの力量を有するものは先づ指を渠に屈すべし。

豐邊新作

渠が歴代の騎兵監中嶄然頭角を抜くの人物なることは到底之を否むこと能はざる也。

現騎兵監豐邊新作は騎兵科中の德望家にして、部内渠のために死尚ほ辭せずと爲すものの尠からず。現に夫の旋毛曲りと强情とを以て有名に、騎兵科始まつて以來の横著者にして且陸軍部内の持て餘し者たる西本國之輔の如きも、渠の前には頭上がらず、他は推して知るべき也。

豐邊の沈勇

渠容貌婦女子の如く、言語優柔、毫も剛氣の外に現はるゝなし、然かも一旦戰陣に臨むや、其勇氣と技倆と共に群を抜き、未だ嘗て見苦しき失敗を取りしこと非らず。就中渠の偉動として數ふべきは、黑溝臺の役に於て歩兵第三十三聯隊騎兵第十三及第十四聯隊等を率ゐて沈旦堡の守備に任じ、數日間に亙る優勢なる敵軍の攻撃を撃退して我第八師團の右側面を安全に擁護し、以て我軍をして攻勢に轉ずるを得せしめ、始め不利なりし我軍の戰況をして有利に進捗せしめしこと是れ也。この沈旦堡攻撃の失敗は露國陸軍の今尚は切齒して其戰史に特筆大書する所、以て其如何に彼軍に取つての痛手なりしかを知るに足る。

豐邊の登龍門

豐邊の爲人

砲兵科大築尙志

聞く豐邊は大尉時代まで部内より無能を以て目せられしが、適々日清戰役に騎兵第五大隊の中隊長を以て出征し、戰時偵察の任務を最も完全に遂行し、其報告の精確にして詳細なること他偵察將校の報告の比に非ざりしが故に、時の第一軍參謀副長田村怡與造の鑑識する所となり、爾後漸く重用せらるゝに至りしと云ふ。而して渠の報告の精確詳細斯の如きものありしは他の偵察將校が遠地より雙眼鏡を以て偵察するに、渠獨り飽まで敵地に近接し、彈丸飛來の裡にありて悠々偵察せしに因ると云ふ、以て其沈勇を概見すべき也。

渠清廉潔白にして毫も名聲を求めず、從て又毫も地位に對する執著心なし。殊に其家庭は清福春の如く、實に紳士の家庭の模範とすべきものありと云ふ。渠素より秋山の學問なく亦其覇氣なし、而かも其人格と德望と閲歴とは騎兵科中の第一人に推すべし。我騎兵科は渠に於て絶好の騎兵監を得たりと云ふべし。

七

最初の砲兵監たる大築尙志は舊幕臣にして蘭學に達し、古き兵學者たり。人物堅實にして當時にありては最も有爲の一人として推稱さる。其功績の最も顯著なるは砲兵工廠の創

始にあるべし。

明治二十三年九月、砲兵科は野戰砲兵と要塞砲兵とに分離し、黑田久孝野戰砲兵監となり、牧野毅要塞砲兵監となる黑田は沼津兵學校出の舊幕臣にして大尉を以て召し出されしが、溫厚沈著にして砲兵界の元老たるの資質を具備せり。其歷史を飾るものは日淸戰役に第一軍砲兵部長として出征し、田庄臺攻擊に際し。百九門の大放列を布きて我陸軍始まつて以來未曾有の大砲戰を統督するの任に當りしことなるべし。

牧野は信州松代の產にして、夙に佐久間象山の砲術を傳統し、原田一道等と共に大阪砲兵工廠の經營に任ぜり。爲人頗る才氣に富み、當時にありて最も議論に長じ、意見の立つ一人なりしと云ふ。

黑田に次で野戰砲兵監たりしは、岡山出身の黑瀨義門にして、牧野に次で要塞砲兵監たりしは石川出身の鹽屋方圀也。黑瀨は鹽屋及び村井長寬等と共に牧野、黑田に次ぐ砲兵界の先進にして人物平凡なれども鹽屋の如き俗氣と銅臭となく、寧ろ好武人として推すべし鹽屋は其才氣黑瀨に比して勝るものあれども其人格の劣等なる到底將軍の柄に非ず。

明治二十九年十月鹽屋の步兵第二旅團長に轉ずるや、黑瀨其後を襲ひて要塞砲兵監となり、柴野義廣野戰砲兵監たり柴野亦鹽屋と同じく石川出身の陸軍先輩の一人にして其人物は鹽屋に比して幾分優るべく、從つて鄕黨に於ても相當の人望を有するもの、如し。然れども要するに鹽屋、黑瀨、柴野時代は我砲兵科にありて人物拂底の時期なりしと云ふべし。

柴野に次で野戰砲兵監たりしは伊地知幸介にして黑瀨に次で要塞砲兵監たりしは豐島陽藏也。伊地知は薩派の俊才として囑望せられしも、其眞價は世評以下にあり。豐島は靑年時代に於て數學に達し、當時にありては數學に於て部內渠の右に出づるものなしと稱せられしも、其頭腦や、舊式にして偏狹なる忠君愛國思想を有し、往々愛憎の念に動かされて部下の鑑識を誤まることあり。而かも概して言へば好武人にして十年役以來戰陣に臨んでの成績常に良好なり。殊に旅順要塞戰に於て我重砲兵を指揮し敵をして震駭せしめしの功績は沒すべからざるものあり。性格磊落にして圭角なきが故に其長閥たると非長閥たるとを問はず、渠に對して敵意を挿むものあらず、これ渠が閥外者の出を以て異數の昇進を敢てし、前後十一年間の長き重砲兵監の椅子にありし所以なるべし。

野戰砲兵監は伊地知の後を大迫尙道繼ぎ、大迫の後を藤井茂太繼ぎ、以て現兵監星野金吾に及びしも、重砲兵監は三十五年五月以來豐島の手に歸し、一昨年山口勝が取つて之に

黑田久孝　牧野毅　黑瀨義門　鹽屋方圀　柴野義廣　伊地知幸介　豐島陽藏　星野金吾